FPSプロゲーマーが魔法世界で撃つ

微糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FPSプロゲーマーが魔法世界で撃つ

【Nコード】

N4105Q

【作者名】

微糖

【あらすじ】

世界中のFPSプレイヤーから尊敬されていた最強のスナイパーが事故で死んでネギまの世界へ！オリ主もので、チートです。ただ、チートはチートでも狙撃のみに特化した一点特化型です。楽しんでいただけるようがんばります。注：外道成分結構強めです。普通に煽りに煽るので、耐えられない方は戻るボタンを押してください。

プロローグ(前書き)

狙撃に関しては一切自重しません。チートにチートを重ねる予定です。

プロローグ

「突然だけど、この後違う世界に行ってもらおうから。」

「…ごめん。全然意味がわからないんだけど?」

「ごめんね。私のミスであなただんじやったのよ。だから違う世界に飛んでもらおうね?」

「いや…だから、まったくもって意味がわからないんだけど。」

いきなり意味不明なことを抜かす目の前の美女。俺の名前は榊^{さかき} 琢^た磨^{くま}。FPSというジャンルのゲームの一応プロゲーマーをやらせてもらっている。中学1年生で衝撃を受けて以来、16歳になる今までずっとはまりつづけている。中学もまったく行かずに続けた努力が世界に認められたのか、15歳という若さでプロになり、現在ではこの業界でRDを知らないものはいないくらいの有名人だ。RDとはReal Downの略で、俺のゲーム内での名前だ。込められた意味は現実を捨てた、俺はここで生きるといったもので大層気に入っている。確か、意識を取り戻す前までは世界大会の決勝戦にでるために車で会場に向かっていたはずだ。

「そうそう、あなたは向かってる最中交通事故で死んじやったのよ。」

「…なんで俺の考えがわかる?」

「私が相当位の高い、世界の管理者である一人だからかな。あなたたちの世界でいうなら神様の一人ってやつね。」

「にわかには信じがたいが……まあこの光景見てたら疑う気も起きないわな。」

そういつて辺りを見渡す。琢磨がいる場所は一面が純白の何も無い空間である。足には床に立っているという感覚がなく、なぜ自分が一つの場所に留まっていられるのかまったくわからないような状態だ。

「違う世界とかいいからさ、俺を戻すことはできないのか？」

「ごめんなさい、あなたはもうあの世界では死んでしまったことになってるのよ。」

「そっか……せめて母親になんかしてあげたかったな……」

「ごめんね……私のミスでこんなことになっちゃって。お詫びにもならないかもしれないけど、あなたにはこれから違う世界で生きてもらいます。能力も、容姿もあなたの望むまま。望むままの最高の人生を約束します。」

「まあ一度死んだんだ。蘇らせてくれるなら、2度目は好き勝手生きろ。これって俗に言う転生ってやつだろ？」

「まったくもってその通りですね。それにしてもいきなりこんな状

況になったのにあまり驚かないんですね。」

「FPSってジャンルはだめだね。どつぷりはまると人間らしい感情がどんどん消えちまうわ。まあ転生に関してはそんな感じの創作ものに一時期はまっつたからな。」

「そうなんですか。ちなみにあなたを送る世界は魔法先生ネギまの平行世界に当たります。とりあえず、あなたには最高の肉体、不老不死、それに加えて無限の魔力と気をプレゼントします。」

「あー全部いらねーわそれ。」

「はい？最高のスペックで生まれ変わるんですよ？これさえあれば怖いもの無しなんですよ？」

「いらんいらん。魔法も気も一般人より少し上くらいでいいわ。その代わりにいくつか欲しいものがある。」

「それらを捨ててまで欲しいものって言うのが気になりますね。一体何がお望みですか？」

そうして琢磨は一人しばらく思考する。自身は肉体を使ってドンパチなどは性に合わない。ずっとPCの前で戦争をしていた時もちもそうだ。RDとは世界最高のスナイパーの名前。生まれつき視力と神経伝達速度は人間の持てる最高のスペックであった琢磨の狙撃はもはや勝負に挑むという発想が相手側には存在せず、いかにして多人数でRDを囲み、最小限の犠牲で潰せるかという考えしか与えないほどの圧倒的正確度と速度であった。運動神経があり、い体を持っていればどのスポーツでも天下を取れたであろう人間の

体の内部の作り。残念ながら運動神経に恵まれず、スポーツの方は断念してしまつたが、今更そんなようなものには欠片も未練は持つていない琢磨であつたのでどうせだから自分の代名詞ともいえる狙撃で暴れてみようと考え。もつともそれはゲームの話であり、現実で行つたことは当然皆無であるが。

「一つ目は知識だな。別に最高のものじゃなくていい。欲しい知識は武器全般、それと陰陽術、氣や魔力の扱いについて。・・・すまんが陰陽術に関しては最高のもので頼む。二つ目は眼だな。物の死が見えるとか、あらゆるものを解析するとか、そういった仰々しいものじゃなくていい。そうだな・・・20km先だな。20km先まで鮮明に見え、その範囲内のものを任意で透過させることができる眼が欲しい。三つ目なんだが、これは超能力にあたるのかな。イコールスピード絶対等速とあの作品では呼ばれていたな。あれをレベル5の状態であ俺にくれ。あとは・・・不老だな。不死はいらない。世界をゆくりと見て周りたいな。」

「その条件だと強力な魔法使いに接近を許した時点でかなりピンチになりますけど・・・いいんですか？2度目の生なのですよ？」

「だからだよ。別に死ぬなら死ぬで構わないんだ。殴り合いなんか性に合わないだろうしな。殺されたらそこまでいいんだ。ただ、世界最高のスナイパーとまで言われたんだ。まあゲームの話だけだな。俺の考えが正しければこの条件でシモ・ヘイへをはるかに超える化け物の完成さ。まあだめだつたらだめだつたであつちの世界でのんびり生きて、適当に死ぬさ。」

「あなたはなんというか・・・命というものが見えてますか？命は重いものなんですよ？」

「どうだかな。俺自身、自分の事なんかあんまし把握してないんだわ。まあ条件はこれでいいや。容姿はこのままで別にかまわない。その代わりあれだな、修行時間と世界を見て回る時間が欲しいな。なんかでっかい戦争あったよな？あれの100年くらい前で頼むわ。」

「本当にその条件で構わないのですね？もう私と会うことは2度とありませんよ？」

「ん。まあやりたいようにやって死ぬさ。FPSやってるやつならわかるけど1度人を撃つてみたかったんだよな。ワクワクするのなんていつぶりだろうな。あ、言い忘れてたけどAWPってスナイパーライフルをくれ。L96A1が正式な名前だな。」

「人を撃つって・・・あなたが先程まで普通に生きてたことに私は心底驚いてますよ。こんな歪んだ人間が何も問題を起こさず普通に生きていたなんて。まあいいでしょう。あなたが幸せな人生を送れることを祈っています。」

「別に幸せなんて望んでるわけではないけどな。楽しむだけ楽しんで死んでくるわ。ありがとな、行って来る。」

そっぴい残して琢磨は神の目の前から消えていった。

「ここどの辺だ？知識の方は…おお、いい感じじゃん。なんか一瞬でもものすごく頭がよくなったように感じるな。魔力と氣はつと…微妙っぱいな。まあ動きを助けてくれる分の働きをしてくれたら問題ないしな。さてさて、お楽しみの…：…おおおおおおこれがAWP…ゲームではお世話になっています。」

神によって世界観を移動した琢磨が最初に着いた場所は見渡す限りなにもない広い草原であった。自身の与えられた能力の確認をしつつ、世界最高のスナイパー（ゲーム内）と言われた自分の相棒であるAWPの確認をする。手に持ってみると、軽い重量感が感じられ、ゲームとは違う現実なんだと認識させられる。

8

「まずは最初の一発。やばいな、徐々に燃えてるわ。刀も素敵だけと銃も男のロマンだよなほんと。」

そういつて銃口を空に向けて引き金を引く。ズドンツツという鈍い音を出し鉛球が空に向かって発射される。元々、異常なまでの動体視力を持っていた琢磨には回転しながら空に向かう鉛球がはつきりと視認でき、自身の相棒を生で撃てたことによる感動がこみ上げてくる。

「やばいな、これ。これを持って俺は世界一になったんだ。すげー

わほんとに。」

他にももらった力そっちのけで、時がたつのも忘れAWPをいじくりまわす琢磨。この世界に来て初日、結局AWPとイチヤイチャしているだけで終わってしまったのであった。

ブローグ（後書き）

FPSは人生を壊しかねない代物です。用法 用量を守ってプレイしてください。ん？俺？俺はもうだめだ。ここは俺に任せて逃げろ！

1 要目（前書き）

色々と頭の中にあることを書いておきます

1 撃目

ネギまの世界に送られた初日。自身の相棒であった（あくまでもゲーム内で）AWPをいじっているうちにあつという間に時間が過ぎ、近くに町も無いのでこの日は野宿することに決め適当に役に立ちそうな魔法をもらった知識から探し出す。とりあえず野宿なんかしたことはないが、なんとなく火が必要だと結論に至り丁度いい魔法を唱える。

「よし。なんか恥ずかしいな…プラクテ ビギ・ナル 火よアールデスカット」

…つかねーじゃん。えっ？何？だって知識の通りならこれあれじゃん3歳児用の魔法じゃん。魔法使いが最初に教えられる魔法じゃん。えっ？なにこれ俺ってこういうレベル？世界最高のスナだよ俺？（くどいようだがゲーム内）3歳児に教えて俺に使えないって何なの？欠片も出る気配ねーじゃん。え？いいんだよ別に。俺にはAWPがあるからね。こいつさえあれば俺何もいらんよ？なに笑ってんだお前風穴開けてやるうか！と誰がいるわけでもない場所で一人恥ずかしさと屈辱から混乱してわけわからないことを言い出す。

「うん。よく考えたら俺杖もってねーじゃん。」

そういえば魔法って使うのに杖必要だったけど、創作物だけで原作をほぼ知らなかった世界の知識を思い出して解決する。創作物事

態も、FPSの息抜き程度に流し読みしていた程度であるのでは。この世界のことは知らないといつていい琢磨。この屈辱的事態をなんとかしようと、FPSのやりすぎで半分腐っているような脳みそから必死に情報を引きずり出した。

「まあいいや、氣つてのを使えばある程度体が丈夫になるっばいな。やってみるか・・・」

一応、普通の気や魔力を使える人レベルには知識をもらってはいるので、自身の気を周りに纏うくらいのはすぐにできるようになってしまった。きたばっかでなんとも言いがたいが、どうやら琢磨は魔力よりも氣の方が多少多いみたいである。実際、そんなこと彼にとつてはどうでもいいのでとりあえず今日は問題なく生き抜けそうだと考え、適当に気を纏って眠りにつこうとする。纏ってみてわかったことだが、魔力や氣には纏っている者にとつてある程度適温になってくれるという特性があるのだとわかった。少し肌寒いくらいに感じていた気温も、気を纏ってからとても過ごしやすく感じるようになった。

「便利だな。クーラー要らずじゃん。とりあえず寝ておきてAWP弄くり回しながら考えてたことを実行に移しますか。」

能力確認とAWP改造などは寝ておきてからやることにし眠りについていた。この世界に来て初めての睡眠は、見渡す限り何も無い草原のど真ん中であった。

この世界に来て、色々な能力をもらい、自身の相棒を生で手に入れ浮かれていた。今までの今まで気づかなかったがものすごく重要なことを忘れていた。むしろ、これを一番最初に神にお願いするべきだったと琢磨は心から後悔している。現在は夜が明け、太陽の光が何もない草原に降り注いでいる。寝て起きて冷静になり、人間がまともにいきるのにもっとも必要なものをもらうのを忘れていた。過去の自分を恨んでいる最中だ。

「金ねーよ俺。」

シンプルイズベスト。金。衣食住、まともな生活をしようとするれば必ず必要になるそれがある程度確保するのを忘れていた琢磨。不老であるが不死ではない。食わなければ死ぬし、飲まなくても死ぬ。怪我也病気も普通の人間と同じように発祥するのである。下手すれば、永遠の時間をなんらかの重い病気と共に過ごさなければならなくなるので、早いとこ衣食住を確保しようと考えてる。

「てか、今更だよな。もうこの能力もらった時点でやることなんか一つしかない。やりたい放題生きるって決めたしな。欲しいものは

殺して奪う。金なんて持ち歩かない。」

どこかの盗賊団が言いそうな台詞をいいながらとりあえず町に向かつて歩き始める。もらった知識のなかに瞬動もあつたので試しに使ってみる。切り替えしができないとか弱点を挙げられていた気もするが、現在切り返す必要も無いので早く町に行きたい琢磨にとつては丁度よく、使ってみたが所詮は知識だけ。全然うまくいかず体中汚れてしまっただけであつた。

「まじやつてらんねえ。まあいつか、俺にはA W Pと絶対等速イコールスピードがあるからな。A W Pの改造といくつかの魔法取得に全てを捧げよう。瞬動とか知らん！」

最初から魔力や氣に頼る気はあまり無かつたが、改めて自分には無理だと確信。確信すれば後は早い。自身に必要なものを磨き続けるだけである。氣に関しては重たいものを持ち上げることができれば問題なく、魔力に関しては転移と索敵と認識障害の3つ。転移と認識障害に関してはもしもの時の保険であるが、索敵だけはなんとしても自身から半径20kmの範囲を網羅するほどでなければならぬ。20kmをフルに使って狙撃してこそ場所が決して相手に伝わらず、一方的に攻撃し続けられるのである。

自分の目でも、見れることには見れるが、狙撃中とはもっとも警戒するべき時間であり、目に映るものに集中しすぎて後ろから殺されるなんてことにならないようにするためである。普通の狙撃ならば近づけば近づくほど場所がバレる変わりに正確度が上がるというメリットがあるが、絶対等速イコールスピードというこの能力をレベル5の状態で神にもらった琢磨からしてみれば、近づくなんて行為は愚考以外の何者

でもない。

昨日の空への発砲でこの力は20km先まで持続、下手すれば100kmを超える範囲まで永遠と進み続けるかもしれないということがわかった。

「とりあえずあれだな。陰陽の力には俺の想像通りのものがあつたし、こりやまじですんげーのができあがりそうだ。陰陽の知識は最高レベルでもらつておいて正解だな。今必要なのは……陰陽符、索敵に関するさらなる知識、あとは金かな。まとめてどっかに落ちてないかな。いやありえんな。現実的にこれらが手に入りそうな職業とか無いかな……統一性なさすぎだろ俺の欲しいもの。殺し屋でもやるか？いいんじゃない？人間使つて色々実験できるしな。そうと決まればどうすつかな。とりあえず町見えてきたし、なんか食つてから考えるか。」

はじめてこの町に来てから100年がたった。この町は、まともな生活を送れないような犯罪者、殺人鬼、薬中などおよそ人間の底辺と呼ばれるやつらが最後に行き付く掃き溜めの町。この世界ではゴミ箱ダストと呼ばれるこの町にたどり着き、適当にまだまともな金を持っている奴らを遠くから撃ち殺して金を奪い、時には殺しの依頼なんかをこなしながら過ごしていた。

このゴミ箱と呼ばれる町の住人は人間として見られていないので、かなり多くの殺しの依頼などが来る。殺しの依頼といっても全員が全員そんな技術を持っているわけではない。懐に魔法で作った毒を忍ばせて標的の近くで撒き散らしたり、爆弾を抱えながら抱きつき爆発させたりと体のいい使い捨てのゴミのように扱われる。それでも、その日の薬を得るために喜んで依頼を受け薬を打って死んでいく。もはや、まともな思考回路をしているものがまったくいないような町で、琢磨は名をRDと名乗り今日まで生きてきた。RDと名乗り始めてから100年。この100年で琢磨はこの世界で最高の殺し屋として数えられるようになった。

琢磨自身、喜んで殺しに参加しているようにも思える。元からきつとどこか壊れていたのであろう琢磨である。初めて人を殺した時何も感じない、まるでゲームで人を殺したとでもいったような感覚であった。それからというもののどんな依頼でも遂行し、その都度データを取りながら試行錯誤を繰り返して自身の愛銃の強化と必要な魔法技術の取得に明け暮れた。100年生きていたのである。この町での平均滞在時間など3年あればいい方で、だいたいのやつはそれ以内にこの町ないしはこの世界から姿を消す。そんな町なのでもはや琢磨の素顔を知るものは一人もいなくなった。

3年も過ごしたところには琢磨自身好んで仮面により顔を隠し始めたのでなおさらであった。これはいずれ自身は賞金首になる。その時に顔がわからない方が見つけるのが困難になり、難易度があがる。難易度が上がった方がより強者のみだどり着くようになる。どうせ、好き勝手やってきたし殺されるなら最高の強者に殺されたいと考えた琢磨の作戦だが、依頼を受けるときも姿を現さず、魔法越しに依頼を受け狙撃は必ず15km以上離れた場所からを徹底してきたので未だに自身にたどり着くどころか、懸賞金の張り紙の写真にはunknownと書かれた文字があるだけで顔どころか姿写真すら載っていない始末であった。

この世界に来て10年過ぎ、依頼を受けての殺しを始めてから今ま

で一度も誰にも姿を見られなかった琢磨。わかっているのは彼が名乗る偽名とわかりきっているRDという名前のみ。帝国も他の小国も、旧世界も新世界も関係なく依頼されれば世界中どこにでも現れ、音もなく標的の体を消し飛ばし、データを取る。そうして愛銃に更なる魔改造を施す。そんなことを繰り返すうちにいつの間にか1500万ドルという歴史上最高額の懸賞金を賭けられるまでになった琢磨。二つ名なんてものもできていくくらいである。「存在して存在しないもの」、「魔弾」、「音無き死」と。

思い返せば、後半の殺しはその標的がいる国にとって必要な重役ばかりの依頼となっていた。当然といえば当然であるし、琢磨自身楽しんでやっているので自分の懸賞金の額など欠片も気にしない。こんな大層な二つ名もらっているが、実際はまともな戦闘能力を持っておらず、これでしか殺すすべを持っていないと知られたらどうなるのかなと少し考えてみてやめる。

「そっぴやそろそろ戦争始まるんだっけか。まあ愛銃の能力もアホみたいに上がったし、俺自身…は、まああれだよ。うん…まあとにかく100年間でやれることはやったし、後は楽しむだけだな。本物の戦争とかきつとすげーんだろうな。まあ俺は遠くから撃ち抜くだけだけど。」

姿を見せず超がつくほど遠距離からゲームの中でしかありえなかった戦争を楽しむことを今か今かと待ちわびながら愛銃を抱き、琢磨は子供のように顔を緩ませながら眠りについた。

1 撃目（後書き）

時間が飛んだ？とりあえずポルトガル語で話してくれ。私日本語苦手なのでございます。

絶対等速についての説明。

超電磁砲という作品に出てくるモブキャラの能力。

効果は、自身が投げたものは決してその速度を失わず、その投げたものが壊れるまでその速度で進み続けるといったものでした。このモブキャラのレベルを3とし、5になると効果はそのまま、範囲をほぼ無制限、さらにその能力をかけるタイミングを任意で選べ、硬度に関係なく、自身が能力をかけたものを半永久的に破壊されず前に進ませ続けるという能力と定義します。

2 撃目(前書き)

チート ダメ 絶対

2 撃目

いきなりですが、みなさんはFPSというジャンルのゲームをご存知でしょうか？日本では多額の賞金ができることがないので、プロゲーマーらしいプロゲーマーはほぼ存在しないといってもいいかもしれません。ジャンルのゲームですが、海外では莫大な賞金とスポンサーなんてものまでチームについてきたりしちゃうような人気のゲームジャンルです。FPSとはFirst Person shooting gameの略で、和製英語で一人称視点シューティングゲームとなります。まあ書いて字のごとく、プレイヤーは自分の姿を見ることができず、画面の照準を動かして常時回りに気を張りながら味方の報告やリーダーを頼りに対戦プレイヤーと戦い、殺しあうというシミュレーションで最高に奥が深いゲームです。アマチュアですら1秒を余裕で切るような速さで頭を打ち抜いてくるようなゲームで、プロレベルにもなると0.01秒の世界でお互いを殺しあう、まさに瞬間を制するようなゲームです。

さてさて、どのジャンルでも「チート」というものは忌み嫌われますよね？このFPSというジャンル、チートの種類が非常に多いです。回線抜き、加速、無限グレネード等、種類は様々。そんな数々のチートの中で、もっとも発見しづらく、かつバレずに最高の戦果をだせるチートとして忌み嫌われているのがWHウォールハックと呼ばれるチートでありましょう。このWH、有名なFPSのプレイヤーたちですら誘惑に負け、使うものが後を絶たなかったほど、とても魅力的で、うまくごまかせば絶対にはれないといったチートです。WHとは、壁のテクスチャを透かし、相手の動向を全て丸裸にするといったチートなのですが、FPSにおいてこれほど魅力的な物はありません。様々なFPSには一撃必殺といっても過言ではないSRスナイパーライフルが必ず1本は存在します。本来、この一撃必殺のSRは、装填速度が遅かったり、持った状態での移動速度が遅かったりと初心者にとっては非常

に扱いつらい武器に設定されているゲームがほとんどです。ところが、このWHをもっていたらどうでしょう？初心者も、壁に隠れながら移動している敵が出てくるところにあわせて銃口を向けるだけ。壁からでてくる前からずっと見えているのでタイミングも完璧。一瞬でプロですら撃てないような速度で一撃必殺のSRを放てる狙撃手の完成である。

FPSですらこのような事態になるのです。考えてみてください。もし仮に、このWHを現実で行える狙撃手がいたらどうなるか？どんなに建物に隠れようが、水に潜ろうがその狙撃手の目からは決して逃れられないのです。だが、見えているからどうだというのどう？建物に入ってしまったら、仮に見えていて撃ってきたとしても建物が守ってくれます。よしんば貫通させてきたとしても、軌道が反れ、一発で対象を沈ませることはほぼ不可能といってもいいであろう。その間に解決策を導けばいい。ではそのWHを20km先から行える狙撃手が存在すれば？これは問題になりません。なぜなら、どんなに性能がいいSRでも20km先の対象に着弾させるなど絶対に不可能だからである。見えていようが何しようが、攻撃手段が無ければ対象を殺すことなどは絶対にできません。これは、小学生にもわかる問題ですね。では、20km離れた場所にいる対象をどんな状況でも捕らえることができる眼を持ち、なおかつそこに確実に着弾させることができるSRと狙撃技術を持った狙撃手が存在するとすれば、それは一体、何なのでしょうか・・・？

「100年たった今でも思うが、この眼やりすぎだな…」

現在、琢磨ことRDとはある小さな林から目の前に聳え立つ山をスコープで見続け独り言を言う。第三者の視点で見ればわけのわからない構図であろう。ぼろぼろの黒いフード羽織り、顔が見えないように深くフードをかぶっている仮面を顔で隠した何者かが、林に寝転がりながらバカでかい狙撃銃を構え、目の前の山をスコープで覗いているのだから。

「まあ眼どころか…こっちのが今となっちゃやばい気がするけどな」

そういつて自身の構えている狙撃銃に目を落とす。この100年、元々は神様からもらったAWP。試行錯誤を繰り返すうちにできあがったそれは、全長4.4m、持ち歩くななんて発想はバカでも思いつかないような、スナイパーライフルとも対物ライフルとも分類されないそれは、まさしく魔『砲』と進化していた。

琢磨がこちらに来て殺しを始めしばらくすると、自身の目で見てもありえないような状況が続いた。誰が、秒速901m/sで飛ぶ弾丸を避けれると想像できよう？そう、この世界の住人は音速の2倍以上で飛んでくる銃弾を平気で避けたのだ。

もちろん、全員が全員ではないが、割と上級の使い手になってくると、こちらが放った銃弾を平気で避けていった。よしんば、着弾したところでこちらの世界には治療術師なるものが存在する。腕が干切れようが体に風穴を開けようがそれを普通に直していくのであった。最初こそ簡単に対象を沈めていた琢磨であったが、このレベルの使い手が普通に存在すると知った時の衝撃は半端ではなかった。

だが、このような対象の依頼をされるころには自身の名前はかなり通っていたし、また無駄に確殺なんていうプライドも持ち始めていたころなので、色々と試行錯誤を繰り返しながらこの愛銃を作り上げた。琢磨がもらった能力では、速度を保ち続けることはできても、速度を加速させることはできない。この速度では限界は近いという考えになるのには時間がかからなかった。

そこで、神にお願いした当初からの考えを実行に移すことを決めた。お願いしておいてなんだが、ゲームの中とは言え、自分の相棒とも言えるそれを魔改造するのにためらいもしたのかもわからないが気づいたら改造が始まっていた。この世界にしか存在しない”魔鉱石”と溶かしたAWPのフレームを7：3の黄金比で組み込みフレームを作成。中の部品にも”魔鉱石”を組み込み、一つ一つに自身の氣と最高の知識を組み合わせ、必要な念を込めた陰陽符を張り組み上げる。強化に強化を重ねたその魔「砲」は、初速、消音、反動を殺すことに全てを注がれ、今や撃ち出した瞬間に「砲」ごと吹き飛ばないように、フレームにすら強化の札を手当たり次第張り巡らされている。そんな試行錯誤から生み出されたそれは、馬鹿でかい銃口から66mm弾を初速140km/sで撃ち出すというわけわからない物へと進化した。20km先のものに0.14秒で着弾する66mm弾は掛け値なしに全てを喰らい尽くす。

「もうこいつが一番わけわかんない状態だもんな。さてと標的は…あれか。」

スコープで山を見ながらぼやく。スコープの向きには山しか見えな
いはずであるが、琢磨の眼には本日の依頼の標的であるメガロメ
ンブリアの重役であろう髭ジジイが写っている。

「小便済ませたか？神様にお祈りは？部屋の隅でガタガタ……いや、まあ言ってみたかっただけなんだけどね。」

そういつてトリガーをためらい無く引く。辺りは無音。だが、馬鹿でかい銃口の中から銃弾が確かに発射される。山に向かつて。なんのためらいも無く発射された銃弾は、山をやすやす貫通。琢磨から標的までの距離は直線距離で17.8km、その間に存在する全ての邪魔者を喰らい殺しながら標的に着弾してなお進み続けた。普通に使ったら正確性も糞もないようなその魔『砲』は、琢磨の能力により初弾の速度、向き、力を持ったまま能力解除まで進み続ける。初速140km/sというありえない速度で撃ち出される66mm弾はその通った道に食い残しを残さない。護衛を引き連れて歩いてきた対象は瞬きする間に天国だか地獄へと旅立ち、現実に残ったものは対象の血を噴出しながら未だに立っている両足のみであった。辺りは一瞬でパニックに、嚴重体制が敷かれるが、山を越えた先から狙撃した琢磨の場所なんてわかるわけもなく普通に帰る準備をする。

「いや今更だけどこれ無しだろ。WH+壁抜き無制限+弾速加速とがありえんよこんなの…チートは垢BAN安定だな。まじ早いとこ何とかしたほうがいいよ俺。」

狙撃対象の周辺を大パニックに陥れた男は、なつかしの元現実・思いを馳せ、微妙な短距離転移を繰り返しながら帰路につく。帰ったころには魔力切れでぐったりしていたのでそのまま爆睡モードに入したのであった。

2 撃目（後書き）

WHはまじで勘弁して欲しいですね。筆者は、無料、有料問わず様々なFPSをやってきました。どこいつても必ずといっていいほどいますよねW H e r。もし見かけたら私の場合は某自宅掲示板で即刻晒しますね。

某自宅掲示板とか意味わからないけど。

3 撃目（前書き）

今更だけどチートすぎてやばいと思う。なんなんだろうこのキャラ。
やばすぎて吐き気がするほどヤヴァイ。

3 撃目

突然のヘラス帝国の進軍により、魔法世界を2分化する戦争が始まった。広大な土地を持ち、圧倒的な魔法力を携えて進軍するヘラス帝国。それに対するは、いくつもの小国などで成り立つ連合軍。現在、世界最高の殺し屋であり、歴史上最多金額賞金首でもあるRDを味方に引き込もうと、連合から来たそれなりなお偉いさんっぽい魔法使いたちが3人来ている。琢磨は依頼を魔法越しでしか受け付けない。「ゴミ箱」^{ダスト}からでてかなり行ったところにある森の中心部の湖。その湖で特定のキーワードを言うと琢磨との話がつながらよう陰陽符で湖を囲った琢磨。受けた依頼は100%達成させるが、受けるか受けないかは正直気分によるところであり、普段は携帯で言う着信拒否状態が続いている。この3人は、この1週間一日も休まずRDの勧誘に着続いていた。ずっとスルーしていたが、いい加減ウザク感じてきたので取り合えず話だけでも聞いておこうとする。

「今までの悪行についても不問にし、懸賞首を取り下げる。そして、戦争に勝ったあかつきには」^{マキステル・マキ}偉大なる魔法い”の称号も与えると上層部の方からもお約束いただいた。よってRD、この戦争では我が連合についていただきたい。」

「いや…そんないいから取り合えず金持つて来いよ。」

「懸賞を取り消し、」^{マキステル・マキ}偉大なる魔法使い”の称号までもらえるんだぞ！その上、金を要求するとは本当の外道か！？」

「話し聞いてた？そんな称号とかこちらとしては糞も必要としてないわけ。そんな生ゴミを土産に持つてくるなんて何考えてるんだお

前？最低でも5億^{ドラクマ}DRPもつてこいよ。そしたら考えてやる。まあ考えるだけだけど。どうーゆーあんだすたん？」

「な、生ゴミだと！？みなのもれである”偉大なる魔法使い”を侮辱するのか貴様っ！貴様のような殺すことしかできないような屑に特別にお与えくださるといって上層部の方々の寛大な処置を蹴るつもりか！！？」

「ああん？人が寝てる場所に生ゴミ携えてやってきて、話を聴いてやったのにもかかわらず、屑呼ばわりするとは何事だ？おおん？……いやまあとてもその通りだと俺も思いますけどね。うん。」

「なめているのか貴様……？ふん、その余裕もいつまでもつかない？」

「俺は死ぬ間際まで、少年の心であり続けたい。」

「言ってる。何のために3人で来ていると思ってるんだ？」

「いやあれだろ？プフツ……夜の森がクツクツク……怖かったとかそんな感じのあれだろ？うん……ごめんな、こんなとこに設置して。プアツハハハ」

「もうその余裕もなくなるわあ！後ろの二人は、優秀な探索魔法を使える二人だ。貴様とつながっている時間で逆探知をかせさせてもらった。悪いが、絶対につれてこいとこの命令を受けている。もう探知も終わる。そして探知した場所に、控えている200人の優秀な魔法使いを送り確保させてもらう。処刑される前に正義のために戦えるんだ。逆に感謝してほしいくらいだがなあ。はっはっはははははは。」

「ああゝなるほどそのパターンかゝ。なるほどねえ……うん……
本当に後悔しない？俺的にはこの今すぐ家に逃げ帰って布団に包ま
ってブルブル震えながら、夜を越えて朝生きてる喜びを全力で感じ
るっていうCパターンがオススメなだけだ。どうだろうか？」

「ふん！もう8割方居場所の特定はできているからな。やはり貴様
は「ゴミ箱」を根城にしていたのか。あと少しで完璧な探索も終わ
る。今更切って逃げようなんて考えるなよ？今念話を切ったとして
も200人の魔法使いを引き連れて「ゴミ箱」ごと焼き尽くしてく
れるわ！どうだ？今ならまだ許してやらないことも無いぞ？いくら
貴様が最強の殺し屋であろうと、エリート中のエリートである彼ら
200人を相手にするのは不可能だ。連合におとなしくついてきて
くれれば”偉大なる魔法使い”の称号はまあ無理だとしても、懸賞
金の取り下げぐらいなら上層部の方々に進言してやってもいいぞ？」

「ああゝこれ完全パターンはいつちゃったなゝ。とりあえず、一つ
訂正させて欲しいんだが、俺は最高の殺し屋であるかもしれないが、
最強の殺し屋ではないからな？200人どころか1人にすら殺され
る自信があるくらいだし。まあそれはいいとして一つ質問だ。正直、
お前や後ろの二人なんぞより頭もよく、魔法も使え、考えも同じの
やつらが今までここに来なかったと思うか？俺の首には新世界通貨
で1500万\$の懸賞金がかかっているんだぞ？はつきり言うと、こ
こに来るやつこの6割はお前と同じ事をしようとしたようなやつだ。
さてさて、そんな状況にもかかわらず未だに俺の懸賞金の張り紙に
は俺の姿すら映されていない。これの意味することが何かわかるか
？」

「何をわけのわからないことをごちゃごちゃと！もう今更泣いて許
しを請うても遅いからな！！連合のために働いて、その後死んでも
らう。なあに安心しろ。薬と魔法により貴様の人格は破壊されるか

らな。死ぬ間際も何も感じないだろうさ。」

「余談だけどな、俺この魔獣たちに結構好かれてるんだわ。すごくね？人間を餌としか見てないようなあんな怖い生き物たちにだぜ？ん？なんでかって？餌を恵んでくれる優しい人間だと思われてるのさ。」

言い終わった途端交渉の場に来ていた3人の上半身が消し飛んだ。それを確認した魔獣たちが残った肉片を食べようとゾクゾクと集まってくる。死体を見ると、もはや銃で撃たれたとは絶対に考えられないほどきれいな状態になっていた。普通の現実世界にある対物ライフルアンチマテリアルライフルですら、人間の胴体に着弾すれば上半身と下半身がお別れするような威力なのである。弾の大きさが対物ライフルの3〜5倍。弾速にいたっては比べようもないようなそれから放たれる銃弾は、正しく明確な死の通り道である。威力の方も押し測るべきであろう。

もはや、着弾した場所の周辺は文字通り細胞一つ残らず消し飛ばしてしまうほどの威力。多少食べる量が減ってしまったが、魔獣たちも何もなくても餌が手に入ったとことで見ただ感じ嬉しそうにしているような気がしなくもない印象を受ける今日この頃である。

「よく噛んで飲み込むんだぞ。具体的に言うと30回くらい。じゃないと健康に悪いからな。まあ俺は割りと噛まないで飲み込む派だけどな。あの食べ物Dieが喉を通るのを感じるのがなんともまあノリでパターン入っちゃったけどしかたないよな。だからパターンCryにしとけていったのに。てか、ナツパエリート200人残ってるんだっけ？ここまで来られたらあれだしやっとか。暑苦しいな意味で。」

「最後の念話から30分…もはや何かあったとしか考えられないな。」

「くっ…あんなに連合のためにがんばっていた方はなかなかいないというのに。RDめ…」

「「ゴミ箱」を根城にしているということまではわかっている。あの方たちの犠牲を無駄にしないためにもRDは必ず捕らえて戻るぞ。連合のためにも。」

「あんな掃き溜めなんて広域殲滅魔法でまとめて消し飛ばしてやりたいが…それだとRDごと消し飛ばしてしまうかもしれないからな。はんっ、びびってねーでさっさとできて正々堂々闘えてんだよ糞がっ。」

「油断するなよ。相手は100年は生きてるといわれている最強の殺し屋だ。100年かかっても顔すら判らずじまいの殺し屋だ。全力で確保に当たる。」

「隊長、お言葉ですがここにいる全員あの厳しい審査をクリアし、訓練に耐えてきた者たちです。自分で言うのもなんですがかなりの

エリートに当たるでしょう。隊長にいたっては”偉大なる魔法使い”です。もう少し肩の力を抜いて事に当たってもよろしいのでは？このままだと、できることもできなくなってしまう。」

「副隊長の言うとおり！連合でも有数の使い手である隊長の部下たちなんですぜ俺ら。もうちょっと信頼してくれてもいいんじゃないですかね？」

「そうだな・・・こんなに緊張するのは久々だな。よし、大丈夫だ。みんな信じてるぞ。聞けえ、これより「ゴミ箱」へと移動を開始する。我らがいるポイントは「ゴミ箱」より50km離れたこの森だ。ここから「ゴミ箱」10km手前までは長距離瞬動により近づく。そこからは、認識障害をかけながら「ゴミ箱」に侵入。その後、町をしらみつぶしに探索だ。怪しいと思ったやつは一人残らず連れて来い。責任は俺が取ってやる。安心しろ、あそこの住人を何人殺したところで罪に問われることはない。くれぐれもRDに悟られるなよお前等！ではいくぞー！」

「「「「了解「「「」

この部隊の隊長が作戦開始の号令を出す。隊員たちはその合図と共に思考を切り替え、RDの確保に集中する。この辺のメリハリはさすがのエリート部隊であろう。みな、声に出さずとも静かに、けれども確実に集中のレベルをあげていく。そして、長距離瞬動の準備に入ろうとしたとき、”偉大なる魔法使い”であり、自身たちが絶対的に信頼する隊長の首から上が音もなく消えた。

「…………え？」

一瞬でエリートあるはずの部隊は壊滅状態のパニックに落とされる中、副隊長に任命された男が索敵を行う魔法使いに命令する。こうしている間にも1秒、下手をすればそれ以上の速さで何人も仲間が消し飛んでいく。隊長の首が消えてから30秒もしないうちに先程まで語り合っていた仲間が数えるほどの人数に減ってしまった。場所さえわかれば、ここにいるメンバーでも任務の達成は可能。それほど自信をもてるほどに厳しい訓練をこなしてきた。戦闘能力は、連合の中でもかなり上位に当たる部隊である。仲間の死を無駄にしないためにもここで撤退という二文字はありえなかった。

「……いない…」

「見つからなければ範囲を広げる！お前らは10km以内なら大まかではあるが人間の反応を感じられるんだろうが！こうしている間にも「ぎゃああああああ、もういやだああああああ」くそつ。」

「……だからいないんですよ……」

「だからさっさと範囲を「いないんですよ！！！」」

「10km以内に…人間は私たち以外いないんですよ……」

「そんな…ばかなっ……」

地獄をくぐってきた。そう思えるほどの訓練や任務に就き、確固たる自信と力を入れたその部隊は気づけば索敵を行っていた二人と副隊長を残して物言わぬ死体となり辺りに散らばっていた。あり

えない報告を聞いた副隊長は、残った二人同様泣き出しそうなのを我慢する子供のような顔になり、頭の中が真っ白になった。「存在して存在しないもの」、「魔弾」、「音無き死」、この二つ名を最後に思い出し、残った3人の上半身もこの世から消滅した。

3 撃目(後書き)

なつぱエ・・・

4 撃目（前書き）

気づけばお気に入り100件を越え、200件に届きそうな勢いで
す。

まだ4話しか書いていないのにこんなにたくさんの人に見ていただ
いているとは驚きました。ご感想もたくさん頂き、画面の前で感想
を何度も見てニヤニヤしています。もう相当気持ち悪い人間になっ
てますごめんなさい。

筆者は、批判などもしていただけたら嬉しいと思います。そうして、
読み手様から見てダメだったところを直していき、よりよい作品に
進化させ、さらに楽しんでいただければと思います。

4 撃目

「この間のことは本当にすまなかったと思う。あれは私の部下の独断であって連合の本意ではなかったことを理解していただきたい。君は称号など望まないだろうからとりあえず金を用意してきた。話を聞いていただきたい。」

「部下の独断とかよく言うねえ。自分に尽くした部下を簡単に切り捨てるなんて怖い怖い。怖すぎて今すぐにもその口ごと上半身を消し飛ばしてやりたくなくなってしまふ。ああ、別にお前のことが嫌いだとかそんなことはないぞ？ここ50年ほどの癖でね、俺のささやかな幸せ（快眠）を邪魔するやつには、つつい地獄への片道切符をプレゼントしてあげたくなるんだ。」

現在、琢磨とリンクしている湖には初老の人間の男性が一人佇み湖に話しかけている。寝ぼけて話半分に聞いていたが、どうやらこの男、この間消し飛ばした連合の人間たちの上司に当たる人物らしい。自分の部下の尻拭いに着たのが、RDを味方につけるということをやってのけ出世を狙っているのかはわからないが、とりあえず前に生ゴミを持って話をしに来たやつよりは話がわかっていそうだったので続けて話をすることにする。

「君が言うつまつたく冗談にならないから怖いね。とりあえずここに5千万DPある。これでこの間のことは忘れて連合についていた
トラグマ
だきたい。」

「ほお」。たかが殺し屋に頼み込むなんてだいぶプライド捨ててる

じゃないか。だが5千万DPが契約金だと？それは話を聴いてやる代だろ？もしかしてお前ただか5千万DPで俺をコキ使おうなんて思っているのか？」

「君も知っている通り今は戦争中とにかく金が無いんだ。そんななか、数少ない資金を削ってでも君の力が必要だと我々は判断した。どうか正義のためにその世界中から恐れられている力を貸していただきたい。」

「ぶッ、正義を説く相手を間違ってるだろ。よりによって殺し屋に対して正義のためだとか…ギャグセンスあるなお前。」

（まあだが…そろそろ手持ちの金もなくなってきたしな……ちくしよ！あの妖銃改造するのに金使いすぎだな。これ以上は粘ってもでてこなそうだ。まあ契約金はこれで良いとしてせいぜい儲けさせてもらうか。）

「まあ…正義？のために闘うのもあれだよな…なんつーかあれだよ…キモチイーもんな。みんなの笑顔のために一肌脱ぐとするか。」

「おおおおお！我が連合と契約してくれるというのか！？君は望んでいないかもしれないが、戦争後に必ずや懸賞金を取り消し、”偉ギステル・マキ大なる魔法使い”の称号を与えるように会議を開くことを約束しよう…！」

「いやなんつーの？俺も最近正義？に目覚め始めてきてね。ぜひとも俺の力を世界のために役立てたいと常々考えていたんだよ。いやあーちようどよかった。こんなところで俺の力を奮う機会に恵まれるなんて…ああ今日は神様に一晩中感謝しなければならぬな！。

あっはははははは。」

この老人、RDを味方につけたという事実にはテンションが上がりにぎて忘れていたのかもしれないが先程まで死の綱渡りをしていたのである（快眠を妨げたという理由で）。ましてや正義？に目覚めたRDはつい数日前に自身の部下と連合のナツパ部隊^{エリート}200人を消し飛ばしている。冷静に考えなくても胡散臭さ100%の台詞に対し、見てて申し訳なるほどテンションが上がっている。勝手に懸賞金の取り消しなり、“偉大なる魔法使い”に對しての会議を開くことを約束する辺り、相当上の位なのかな？と考えるが、結局そんなのもうどうでもいいことだと思考を切る。

「そうかそうか。では早速契約を結ぶとしようか。私は、連合からこの件に関しての全権をまかされていてね。今すぐにも契約は可能なのだ。さあ条件を言ってみてくれ。可能な限り叶えさせてもらう。」

「では……………」

琢磨は、誰もいない森の中で懐から陰陽符を取り出す。『解除』と唱えると陰陽符は自身の愛銃へと姿を変える。陰陽の力は、存在、

概念を閉じ込めるのに長けていると考え知識を欲したが、考えは正しかった。100年で数え切れないほどの命を喰らい、陰陽符を手当たり次第張り巡らされ、まるで封印でもされているようなその様は、ただしく妖刀ならぬ妖銃であった。この妖銃、マガジンにも大量の札を貼り付けてある。札には、この妖銃で使用する弾が数え切れないほど封印されており（これに相当金がかかっている）、これを召喚することにより、この銃は装填を必要としない。封印された弾がなくなるまで、人の命を弾速140km/s、連射速度6発/秒で人の命を喰らい続けるという鬼畜使用だ。琢磨はあの後連合と正式に傭兵として契約を結んだ。

契約内容は以下の通りである。

・ 契約更新は1月毎。連合は毎月100万DPを支払う。これによりRDはその間連合に危害を加えない。

・ RDは誰とも組まず一人で仕事をする。仕事が入れば伝令役の者が湖に仕事を伝えに行く。それをRDは拒否する権限を持つ。だが月に1度は必ず仕事を請けなければならず、また連合側も1度は仕事を回さなければならぬ。

・ 仕事ごとに連合は毎月の支払い以外に別途で仕事料を支払うこと。鬼神兵、戦艦、人間等一つ一つに料金が設定されており、その戦でRDが出した戦果分を支払うこと。ただし、他のものが少しでも協力していたりした場合はこの支払いは認められない。

と、非常にリーズナブルなお値段で連合側の傭兵として雇われたRD。交渉に来ていた老人も、まさかこんな料金でRDを雇えると思っ
てはいなかったらしく、交渉が終わった途端、歓喜しながら帰っ

て行った。この交渉内容、何もRDのことがわかってはいないような連合からしたらとてつもなくありがたい内容に思える。毎月100万DPを支払うことによりRDの恐怖に怯えることはなく、月に一度は必ず戦に出てくれる。

別途料金に関しては、一応 鬼神兵 500万DP 戦艦300万DP 人間10万DPという設定になってしまったが、他のものが少しでも攻撃に参与した場合は、その支払いも認められない。と、ありがたい事づくめの設定であるように思える。実際、交渉人である男も、何度も本当にこの条件でいいのか？と確認を繰り返すほどあまりにも信じられないほどの破格な契約内容。仕方が無いとはいえ仕方が無いのであろう。今までRDは対人間の殺しが専門でそれ以外のことは何一つ知られてはいないのだから。

だが、琢磨からしてみれば別途料金の設定が決まった途端笑いが止まらなかった。なぜなら、彼はその別途料金の設定のみで連合の財政を傾けるほどの事ができてしまうからである。当たり前の話ではあるが、戦艦には必ず人間が何十、何百、何千と乗っている。つまり、戦艦一隻落とすだけで莫大な金が琢磨の元に集まるのである。ましてや、戦艦が一隻で戦場に出てくることはありえない。戦艦は絶対に他の船と艦隊を組んで出陣してくるのである。もう考えただけで笑いが止まらない。鬼神兵に関しては、100年間で初めてのことなのでなんともいえないが、まあ大丈夫だと軽く考える。

現在は、1度目の依頼を受け一人戦場になる場所から20kmギリギリまで離れた森の中で妖銃を愛でながら待機している。

なんか聞いてもないのに語りだした男の話によると、帝国が聖地奪還を掲げ突如進軍したことから始まった今回の戦争。現在連合は帝国の圧倒的な魔法軍勢力により結構やばい状況らしい。なるほど、興味が無いな。帝国側を見ると、いるわいるわ、空を覆いつくす艦隊、森を踏みしめながら進む鬼神兵たち。思わず笑いがこみ上げる。学校をろくに行っていない頭では暗算できないほどの軍隊。対する連合の方も結構な数なのだが、帝国には遠く及ばない。両者の距離は

15kmほどだろう。頃合いと見て銃口を帝国軍に向ける。

「やべえなこれ、全滅できたらそれなんてフラグムービー？じゃん。まあ1vs5でも冷静に。これCWの基本ネ。」

集中する。琢磨は最初に欲しかった魔法技能である転移、索敵、認識阻害のうち索敵を諦めた。自身を中心に150mほどしかどんなに練習しても索敵はできなかった。150mなど、一流の使い手ならば一瞬で詰めてきて見つかっておしまいの距離である。自身に才能が無いことがわかったので、他の二つを伸ばすことにした。転移の方では才能という才能こそ感じられなかったが、普通の使い手並には使え、これを利用した切り札を思いつくまでに至ったが認識阻害の方は相当のものであった。向こうで現実を捨て、偽りの世界で生きたのが原因なのだろうか、琢磨は認識阻害でかなりの才能を発揮する。超一流の使い手が横を通り過ぎてももしかすれば気づかないかもしれないほどの阻害。

琢磨はこの瞬間にこの世界から消える。残るのは自分と照準に写る敵の姿のみ。なれば撃つ以外の選択肢があるのであるのか？空を覆いつくす艦隊に向けて琢磨は撃つ。戦艦をさらに透過し、動力部がある箇所を正確に一撃で。One shot One killであるそれは、瞬く間に戦艦を火の海へと沈めていく。兆弾などの技能は無い。誰よりも早く照準を合わせ、誰よりも早く撃つ。極限まで研ぎ澄まされた琢磨の狙撃は、1秒間に6発の発射を可能にする。

撃つ

…撃つ

…ひたすらに撃つ

ものの三分もしないうちに帝国はわけもわからず撤退をしようとする。が、それをわざわざ見逃す理由が琢磨には存在しない。逃げようと必死になりながら船を動かしても無駄である。瞬動で動く標的にすら確実に着弾させる琢磨の動体視力の前では、動きの鈍い戦艦などまるで止まっているようにも見える。戦艦は一瞬で艦隊を崩され火の海へ、鬼神兵は体中穴だらけにされながら台地に沈み、帝国側の者たちにいたっては数え切れないほど死んでいるであろう。琢磨が全滅を確認し、眼を普通に戻すとそこは静かな静かな森の中。そこには誰もいない。戦争の喧騒も何一つ聞こえない自分だけの世界。銃を札に戻し、「ゴミ箱」へと帰る。

遠見で見ていた連合軍の重鎮たちや、戦場に命を賭けて闘う覚悟で赴いた兵士たちは開いた口がふさがらない。自分たちがまったく関与しないところで、帝国軍が崩壊しているのだ。それも、崩壊後を見ても戦力を見て取れるほどの数にも関わらずだ。

誰かが言った「RDが連合についた」と。RDという名の重さを感じ、顔を青くする。遠見で見ていた重役の一人が頭を抱えながら必死で暗算をしていたのには、誰も気づかなかった。

4 撃目（後書き）

6 発 / 秒で 20 km 先の敵に狙撃しているやつを見かけた片は、運
営に垢 BAN 申請をしてください。てか秒っておまつゝありえん
だる。やりすぎたかもごめんさい。

5 撃目（前書き）

バイトに明け暮れてる間にお気に入りや総合評価などがすごいことになっていました。もうやばいです。何かが発発してしまいそうです。

リアルのほうが少し忙しく、更新頻度はこのくらいになりそうです。

5 撃目

あの一戦が終わってから6日後、RDには連合より10億DPドラクマを超える莫大な金が支払われた。その後、連合はあれだけの帝国軍を瞬く間に倒すことができるRDが味方についたと、上層部、市民問わず喜びに満ち溢れた。

事実、RDが出てなければあの戦いも負けていたであろうほどの大規模な戦いになると予想された戦を、5分もしないうちに一人で終わらせたのだ。喜びは計り知れないものである。

ところが、次の日にRDと交渉に来ていた男に届いた特別手当に関するの通知により、上層部の顔が一転して暗くなる。届いた通知には、RDがああ戦で倒した鬼神兵 戦艦 人間の数が書かれており、それに伴う金を早急に支払えと書かれてあった。一人を除いて、喜びに溢れていた上層部たちの顔が、額を見たとたんに変貌する。

額を見て上層部の人間たちはふざけるなど憤慨する。たしかに、あの戦いには勝利したがとにかく金が無い状況である。特別手当などを含めた契約でも、精々いいところ月2000万DP支払うくらいで済むと思っていた上層部。一度に10億DPを超える金を支払うことになるなんて考えは当然あるわけもなく、また、傭兵にそんな額を支払う気もまったくなかった。

しかし、交渉人であったマクギルという名の男は、通知により書かれていた戦果が、自身の部下に探らせていた帝国の被害状況とピタリと一致していることに顔を青くする。

あれだけの数の軍であったにも関わらず、帝国にはなっているスパイの報告と、ほぼ重なっているのである。さすがに、人間一人一人まで数えられなかったのか、その数は大雑把ではあったが、鬼神兵 戦艦に関しては完璧である。あれだけの短時間で帝国軍を全滅させ、数すらしっかりと把握し、次の日には催促状である。もはや、驚きはしないがただただ恐れるばかりであった。

すぐに会議が上層部の間で開かれる。内容はRDに金を支払うべきか、といった内容である。少数の人間たちは、このまま使うだけ使って、戦争が終わった後にも片付けてしまおうと意見しているが、大多数の上層部の者たちはそんな考えは微塵も起きてこない。もしも、あの力が連合に襲い掛かってきたら？連合よりも強力な魔法軍事力を持つ帝国の大軍が、僅か5分もしないうちにあの様なのだ。もはや逆らう気も起きてこない。RDが気まぐれに連合に攻撃を仕掛けても多大な被害を受けることとなるのだ。

財政的にはかなり苦しい。ただでさえ、難民などの問題により、金がまったくないような状況で、勝利したとはいえ、僅か一戦で10億越えの金を要求してきたのである。少人数の人間たちは声を張り上げコキ使い暗殺者にも始末させようと提案しているが、その暗殺者の頂点がRDなのだ。差し向けるとしても誰を？という話になってくる。なによりもあの一戦でほとんどの上層部の人間は逆らう気がまったく起きない。撤退する意思を明確にし、元来た方向に逃げようとしている船すら後ろから攻撃するような男だ。もしかすれば今この瞬間も、ここの会話も聞かれているのかもしれない。何せ誰も見たことが無いような暗殺者だ。そんなことがあると全然不思議ではない。RDはあの一戦で連合の人間を恐怖という名の鎖で縛りつけた。

「僅か4、5分で10億か…割がいいどころじゃないな。まあ暗殺者の一人くらいくるもんかとおもってたけど……よつほどインパクトがあつたんだな。選んでよかつた。」

琢磨はあの戦いの前に2回ほど依頼を断っている。断った依頼はどれも小規模な戦いであり、どうしても始めの依頼で琢磨は自身の力を見せ付けなければならなかつた。こちらの世界で信用している人間など存在しない琢磨。契約なんてのも一応は設定したが、向こうが用意してきた誓約書である。その気になれば、向こう側で破棄できるであろうと考え、誓約書などではなく向こうの心を縛ることに決めた。人間をもつとも縛り付ける感情は恐怖である。100年間で恐怖の権化とも成り下がった琢磨は、そのことについては自信を持っている。

だから待った。帝国が大規模な軍を投入してくるのを。そして、それをなるべく素早く、かつ圧倒的に破壊した。そうして琢磨は、連合に対し戦いを通して脅しをかけた。

おそらく、何人かは払うのを拒否しようと思われるが、全員が全員そのような考え方になるとは思わなかつた。遠見で見ているわけがわからないであろう琢磨の攻撃。場所すら悟らせず、これだけのことができるという恐怖は、間違いなく上層部の心に根付く出し渋った場合は言わずもがな。こうはなりたくないだろうかと。

結果的に、死ぬ気でかき集めたであろう10億を超える金が、現在琢磨の手元にある。金を湖に持ってきたマクギルも、化け物でも見るかのような顔で湖を見続け、金を置いてさっさと消えてしまった。

「とりあえず弾の用意だな。しかし10億か…この戦争でもう1ラ妖銃ンクこいつのレベルを上げられそうだな。まあ生きていればだけどそれにしてもやっぱ本物の戦場はすごかつたね。ゲームとはまるで

違う……まあ戦場にいなかったけど……。まあ、もらった力でこれだけ好き勝手やってるんだ。生きていればなんてあるはずもないな。チートはいずればれて垢BANってね……。地獄で何回殺されることになるんだろっな俺……怖い怖い。」

初陣から2ヶ月がたった。現在、連合は帝国に負け続け、窮地に立たされている。連日の各地での帝国との小競り合い。時に大規模な戦い。結局コキ使おうとしていた者たちも無理やり納得させ、金を払いRDに参戦してもらっていたのが1ヶ月前。一度は、帝国をたつた一人で押し返すほどの活躍を見せるRDにより、帝国よりも有利に立つが、現在は再び窮地に追い込まれている。帝国は負け続け、なお、日に日に投入する軍を増やし続けてきた。琢磨自身、どこからこれほどの軍を得ているのか少し疑問に思うほどの大軍。たった1ヶ月で琢磨は数え切れないほどの鬼神兵、戦艦、人間を壊し、殺しつくした。連合には帝国の進軍を抑えるほどの力はなく、難民やそのほかの問題そっちのけでRDに金を支払うという選択肢が残されておらず、RDはこの1ヶ月で大富豪と名乗ってもなんら問題ないほどの金を得た。RDは常に最高の結果を戦場で出した。いや、出しすぎた。本格的にRDが参戦して僅か1ヶ月で、連合は琢磨にこれ以上支払うほどの金がなくなってしまったのである。そうなれば転落は早いものである。あれだけ殺しつくしてなお尽きない帝国の軍事力。他の予算から崩してまでRDに金を払い続けた

連合には、もはやまともに軍を編成する力すら残っておらず、ただただやられるだけ。

一度は帝国領内まで届こうかと思われるほどの進軍を見せた連合軍も、今やいつ攻めてくるかと帝国軍に怯えながら過ごす毎日である。連合は何度もRDに助けを求めた。曰く、「もう十分金は得ただろう」、「連合を助けると思って闘ってくれ」と。だが、琢磨からすれば、契約の内容に従った正当報酬をもらっただけ。出し渋りをすることもなかったのは立派だとは思うが、別にこの世界でつながりがあるわけではないので、助けるべきものも無いし、戦場も何度も見て渡れた。そうなれば、戦に出る必要がまったく存在しない。1ヶ月に1度はでなければならぬが、金を払うことができないとわかっていて戦に出るべき理由にはならない。連合の人間は最初こそ腰が低かったが、最後の方になると口汚く罵り続けて帰っていった。だが、まあなかなか的を得た罵りだったので琢磨自身は、感心して笑ってスルーした。

そうしてパツタリと琢磨は戦場に出なくなった。連合の言うとおり、金は十分過ぎるほど手に入れた。最近では、愛銃という名の禍々しいなにかを改造するのに明け暮れている。

（もう連合も終わりだな……まあ儲けさせてもらったし文句は無いかな。戦場というものも体験できたし。やりたいことやったし、世界旅行でもしてみるかな。）

「聞こえているかいRD？聞こえているなら返事をして欲しい。君を雇いたくてここにきた。話をさせて欲しい。」

（ああ？人が世界旅行のプラン立ててる最中に邪魔するなんて……）

湖とのリンクから声が聴こえる。見てみると、髪の毛が白いイケメンが湖に向かって話しかけていた。年は16〜20ほどであるうか。人形の用なきれいな顔をした学生服のような服を着ている男が一人、湖に佇み話しかけている。

「ぶっ…学生さんがこんなところでなにしてるんだ？早く帰って寝ないと明日学校に遅刻するぞ？ちゃんと学校いかねーと、俺のような屑人間になっちまうぞ〜ククク。」

「始めましてだね世界最高の殺し屋R.D。僕の名前はフェイト、フェイト・アーウェルリンクス。まあ”プリムム”と呼んでくれても構わないけどね。」

「なにシカトしてんだ？学生の分際でこんな夜遅くに出歩いていいと思ってるのか？補導されるぞ？おまわりさんに逮捕されちまうぞ〜あっはっはっはっは。」

「冗談はそれくらいで構わないかい？率直に言う。君に仲間になつて欲しい。そのための金も用意した。」

「んだよノリわりーな。お前誰だ？連合が金持ってるわけねーし…かといって亜人デミヒューマンにゃあ見えねーから帝国ってわけでもないだろうし…仲間といったな？殺しの依頼じゃねーのか？傭兵団の誘いならお断りだぞ。」

「君には、僕たちと共に世界を救う手助けをして欲しい。」

「ちょっとなにいつてるかわかりませんね〜。神様にでも祈り続けられればいずれ救われるんじゃない？残念ながら俺は精神科医ではな

いので……世界を救うとかちょっとそういうのは……。」

「……まじめに話を聞いて欲しいものだね。とりあえず、君のせいで連合の方はガタガタさ。もはやあちらは修復できないほど貧窮になつてしまった。僕たちの組織としては、この戦争がしばらく続いてもらわないと困るんだ。そのために君の力を借りたい。一応金は用意してある。」

青年がそういうと、物体転移によりアタツシユケースが5つ湖に召喚される。中を見るとなるほど、中にはDPの札束が所狭しとギッシリ詰まっている。

「とりあえず10億DP用意してある。これでしばらく僕たちの組織と行動を共にして欲しい。ああ、行動を共にといつても、依頼をこなしていくだけで構わないし、もちろんその都度報酬を出すよ。ただ、僕たちに雇われている間は余計な依頼を受けないで僕の指示にしたがっていてほしい。どうだい？悪くは無い話だとは思うが。」

(……………これすごくいい依頼じゃね？連合はもうだめだしな……まあ金よりも、愛銃強化の知識が欲しいところだが。)

「すばらしくいい条件だな。仲間になつてやってもいい。だがいくつか聞きたい。お前は何だ？なぜそれほど金を持っている？組織といったがまともな組織はこの戦時中にそんな金持つてるとおもえねーな。お前、死の商人武器商人か？」

「そんなのとは一緒にしないで欲しいね。なぜ金をもっているか……それはこの世界の大半が、僕のいる組織の支配下だからだよ。仲間

になってくれるということ。組織名も教えておこうか。僕の所属する組織は「完全なる世界」コスモエンテレケイア。この世界を救おうとしている、救済の組織だ。」

そうやって白髪の青年はぎこちなく笑った。

5 撃目（後書き）

大まかに話は作ってはいたんですが、いざやってみると難しい。矛盾とかあるかもしれません。一番の矛盾はこのチートの存在です。読者様より感想で1番目とは名乗っていないとのご指摘をいただいたので、そこだけとりあえず修正しました。

6 撃目（前書き）

なんか色々評価がすごいことになってますね…

こんな駄文に付き合ってくださいありがとうございます。

ちよいとリアルのほうが微妙に忙しくなりそうなので、更新頻度がちよっと読めません。

6 撃目

「まじこんなんであれだけの大金くれるとか……ばねえっす。」

連合からの支払いはもはやないと判断し契約を解除した琢磨。現在
は、白い髪の青年が名乗った自称救済（爆）の組織である「完全な
テレケイア
る世界」の一員として活動している。

活動内容は様々で、支給された変装に使う陰陽符を使用し、よくわ
からない人物になりきって国民を煽り戦争を激化させたり、救済の
組織（微笑）にとって邪魔な連合、帝国の上層部を暗殺したりと結
構色々であるが、思い返してみても誰一人として救済してはいない。
まず戦争を長引かせたいという考えの時点でもとてまじやないが救済
（暗黒微笑）なのだが、金の支払いは過去最高であり、時々わけも
わからず、「さすがRDだね。これも少ないけど持って行ってほし
い。」と謎のボーナスまでくれる有様である。こんな救済（？）な
らいくらでもこなしますぞ旦那！！と言わんばかりに任務をこなし
ている。

「まじ救済ばねえ…フハハハハハハつ貴様らも救済してやるうか！」

本日の任務は負けそうな連合の軍を助けること。連合にいたところと
変わらず一人で山の中腹に身を潜めながら、約20km先の帝国の
軍と連合の軍を見る。やりすぎて帝国の軍が減るのも問題になると
いわれたので、どの程度までやるか考えている最中に、20km先
で信じられないような出来事が起こった。

「……………はあ？」

ありえないことに琢磨の目には圧倒的軍事力を持つている帝国の戦艦や鬼神兵が次々と撃破されているのが写る。それだけならばこれだけ驚かないだろうが、それを行っているのが戦艦でもなくただの人間となれば話は別だ。

20km先の戦場で赤い髪の少年が魔法を唱えると、わけがわからないほどの暴風と雷が発生する。100年以上生きてきた琢磨が知る魔法とは完全に別物。今まで上位と呼ばれてきた魔法使いたちが放つ魔法とは完全に別格であるそれは、周囲を蹴散らすかのごとく進み続け、一撃で戦艦を3隻落とす。

彼の仲間たちなのであるのか？刀を携えた男、黒髪の優男、え？なんで小学生が戦場にいるの？と疑問に思うほどの小さな少年。この4人が圧倒的な力を持ってして、数で勝っている帝国をフルボッコにしている。

琢磨自身、一人である数を潰そうと思えばできるが、戦場に出ながらあれだけの数を相手にするのは当然ながら不可能であり、ましてや魔法一発で戦艦を3隻落とすなんてマネできるはずもない。余談ではあるが琢磨は転移と認識阻害だけで、後は基本的にダメである。この前無詠唱で魔法を唱えられたことに対して感激して喜んだ程度の魔法力しか持っていない。

その戦場の様子を見てポカーンとしていた時に、通信用の式紙から連絡が入る。

「RDかい？今帝国にいるんだがかなり暴れているそうじゃないか。あまりやりすぎるのは困ると言っておいたはずなんだが。」

「おおフェイトか。いや〜まじやばいぞあれ。どれくらいやばいか
というと例えようが無いほどやばいぞ。」

「相変わらず意味がよくわからないね。とにかくあまりやりすぎな
いで欲しいんだが…」

「ん〜それはあいつらに言ってくれないか？今回俺はなんにもしね
ないからな。」

「どういうことだい？君が帝国を相手にしているのだとばかり思っ
ていたんだが。まさか今の連合にそんな力は無いだろう？」

「連合ってか…始めてみるなあいつら。やってるのは4人。赤毛。
刀男。変な黒い玉を生み出す男。それから白髪小学生だな。特に赤
毛のやつやべーぞあれ。なんつーか魔力すげえ。俺にすらわかるく
らいすげー魔力持ってるわ。」

「君がやっていたわけではないのか…わかった。君は今回は何もし
ないで引いてくれて構わないよ。こっちはその4人について調べて
みるから。」

「あいよ〜。んじゃあまたなんか依頼あったら呼んでくれや。」

通信を切り、帰ろうとする。20km先の戦場では、連合の人たち
が4人の戦士たちを讃えながら勝利に酔っていたのが写っていた。

あれから、あの4人は戦場でかなりの活躍を見せたらしい。後に明らかになったが、組織名を「紅き翼」^{アラルラ}といい、リーダーである赤毛の少年はすでに連合で英雄に近い扱いを受けているらしい。「紅き翼」が出始めてからというもの、帝国はこの4人に苦戦を強いられ、数で勝っているものの「紅き翼」がでた戦場では負けが込み、「完全なる世界」的にはありがたい感じであるとフェイトが報告してきたが、琢磨的には依頼が減って暇をもてあますような感じであった。最近、戦場に出ることもなく、戦争をやめさせようとスピーチをしている組織の頭を暗殺したり、使い勝手がイマイチよくないと判断された上層部に潜り込んでいる「完全なる世界」のスパイの暗殺などを淡々とこないしていたが、フェイトから結構なレベルの依頼が入る。

フェイトの話によると、近々帝国がかなり大掛かりな作戦を始めるらしい。(ちなみに組織のスパイが入れ知恵したとも言っていた。)
そのためにも、「紅き翼」が非常に邪魔であり、帝国は作戦開始までに彼らを辺境まで追い詰めたらしい。会議の結果、近々帝国側よりRDに依頼が入るので、それを受諾して欲しいとの事。だが、今後のバランスのことも考えると「紅き翼」には消えて欲しくない、殺さないようななんとか辺境に追いやって欲しいというめんどくさい内容であった。

それから3日後には帝国より使者が現れその話を持ち出される。実際、琢磨は手加減できるわけではない。ただ照準を合わせて引き金を引くだけであるので、殺さないでという注文は結構難しい。足なんかを撃つたとしても、当たり所が悪ければ、勢い余って下半身ごと消滅させるような妖銃である。フェイトの注文は琢磨にとっては

非常に難易度の高いものであるが、フェイトと帝国が提示した金額を合わせたら、過去最高の金を賭けた依頼になるので受諾することにした。

別に、今更金なんて必要とはしない。自分がなんとなく暇だから、なんとなくやりたいたいからとよくわからない理由で琢磨は動き続ける。ごめん嘘。やっぱりお金は大事！

そうして、琢磨は今依頼をこなすために戦場から離れた森で待機している。琢磨は驕らない。場所がばれるはずが無いとは思わないので、常に隠れる場所が多いところからの狙撃を基本としている。戦場を見れば、数が少ない連合軍を引き連れて、最前線でがんばっている4人の姿が目に入る。だが、戦争が続いている疲れもあるのか、このまま手を下さなくても引いていきそうに見えるほど、疲労の色が見て取れた。

まあ、対象が疲れていようが疲れていまいが琢磨にとっては何一つ関係ない話である。考えた結果、赤毛ではなく仲間の一人を撃ち抜くことに決めた琢磨。フェイトから事前にもらった情報では、「紅き翼」は仲間を大事にするらしい。仲間の一人が瀕死レベルの重傷を負えば戦場から引く。あの4人さえいなければ数が多い帝国が進軍するのになんら問題はない。いくらあの4人でも、仲間をかばいながらあの数の軍の進軍を止めるのは不可能であろう。そうして、回復の暇も与えず辺境にでもどこにでも追いやればいいと考えた琢磨。

スコープを覗きながら赤毛を抜いた3人のどれにしようか吟味し、刀を持った男に目をつけた。

「戦争が終わったら、この依頼で手に入る金でオーストラリアに白い大きな家を建てよう。うん、そうしよう。」

そうして引き金をしぼる。辺りに誰もいないその空間から撃ち出された弾は、寸分の狂いもなく、狙い通りに対象の右肩から先を消し飛ばした。20kmも離れているこの場所に聴こえないはずの悲鳴が響いた気がした。

「うざってーぜ。よえーくせに数ばっか多くてよー!!」

「斬っても斬っても一向に減る気配が無いな。もうあまり体力も残ってないぞ。」

「だあーうざってえ!マンマン テロテロ……くらええ!!」
【千の
トラペー
雷】
キリブル・アス

ものすごい轟音と共に撃ち出されたその魔法は、戦艦に吸い込まれるように進む。一応は戦艦も魔法障壁を出しているはずのだが、そんなものはなかったとも言つかのごとく戦艦に直撃。火達磨になりながら戦艦は地上へと落ちていく。

普通に見れば、連合に勝ち目なんぞ微塵も無い戦場で、4人の男たちは必死になりながら連合軍を守り、帝国軍を撃破していく。だが状況が悪いことには変わりはなく、徐々に、だが確実に押され始め

る。

「ナギっ！ーもう撤退するぞ。ここはもう無理だ！」

「うるせーぞ詠春！ーここで俺らが引いたら戦争がさらに長引くだろうが！ー！」

「ふふふ、ナギ……あなたは本当にバカですね。自身のことも考えないと生き残れませんよ？」

「そのとおりじゃな。アホ弟子よ、ここは撤退するぞ。」

「うるせーうるせーうるせー。俺はナギ・スプリングフィールドだぞ！俺が負けるわけねえ！！戦争を一刻も早く終わらせるためにも、お前らの力を貸してくれ！！！」

「アホ（だな）（ですね）（じゃな）」「」「」

一人はどこからそんな自信が沸くのかわからないような台詞を言う。戦いのさなかで妙に悟った顔をしている3人。だが、どこか嬉しそうな顔をしているのは気のせいではないだろう。気合をいれなおし、戦いに向かおうかというときに、飛び道具に対して絶対の自信を持っていた剣士の右肩が弾け飛んだ。

「……………え？」

何が起きたかまったく把握できていない4人。4人の目には、撃たれた自身も含めてありえないと断言していい光景が映る。剣士の命とも言える刀を持った右腕が宙を舞い、重力に負けて下に下にと落ちていく。

「があああああああああああああああああああああ」

轟音鳴り響く戦場で、なぜかその悲鳴が万人の耳に届くほど響き渡る。右腕を肩ごと失った男は左腕で血が噴き出ている右肩らへんを抑えながら悲鳴を上げた。

「詠春！……！」

「一体何が……！」

「んなことはどうでもいい！早く治療してくれアル……！」

「お……俺の……夕凧……！」

「安心するんじゃ詠春。わしが絶対回収する！」

「俺も師匠と一緒にいく！頼んだぞアル！」

「あ……ぐう……！」

「しっかりしてください！あの戦艦まで戻りますよ。」

二人は激戦真つ只中の地上へと、吹き飛ばされた腕と刀を回収しに向かう。右腕を吹き飛ばされた男は、残った黒髪の優男に支えられながら数少ない連合の戦艦へと一度戻ろうとする。しかし、それを琢磨が安々と見逃すはずが無い。依頼は100%達成。今回は殺してはいにしる、確実に追い詰めるために連合の戦艦を次々と落としていく。RDとは入れ違いのように現れた「紅き翼」のメンバーたちはこのことに関してかなりうるたえる。

「一体何が…連合の船がどんどん消えていく。まずいですね……」

（ナギ！よくわかりませんが連合の戦艦が次々に帝国に落とされているようです。詠春も早く治療しなくてはなりません。ここは引きましょー！）

（ちくしょう……わかった。詠春の腕と刀は回収した。今から師匠と一緒にそっちにいく。）

そうしてポロボロに崩れ去った連合は撤退を試みる。琢磨はこれ以上することが無いと見てその場から消える。帝国は十二分に連合を追い詰めることができる戦力を持ってそのまま突き進む。この後、その場にいた連合軍は壊滅的なダメージを受け、「紅き翼」はアルギユレーの辺境へと辺境へと逃げるように消えたらしいが、琢磨からすればどうでもいい話であった。

6 撃目（後書き）

ラカンさんは辺境にて仲間になるものと考えて最初は入れませんでした。

てか原作で37km離れた距離に剣投げてるんだけどなにこれ……
……？

20kmでチートとか言ってたのアホらしく感じるほどこいつチートですね

だが…俺にはWHがある……っ！

7 撃目（前書き）

ようやく戦争も終わりそうな感じになっているかもしれない気はしています。今回少し話が長いかもです。文字数安定してなくてすみません。

7 撃目

グレート＝ブリッジ。それは連合の喉元300kmに渡って存在する強大な要塞である。もはや連合の最後の砦とも言って過言ではないその場所は、聖地奪還を掲げて進軍する帝国にとっては最大の要所である。

帝国は過去に二度オステイア奪還のためにここを攻めたが、二度とも失敗に終わっている。琢磨が腕を吹き飛ばした剣士の治療と、これまでの疲れを取るためであろうか。「紅き翼」はアルギュレーの辺境に追い詰められてから姿を見せなくなった。

聖地奪還のためにどうしても邪魔になつていた「紅き翼」が消えてからの帝国の行動は早かった。かねてより考えていた大規模転移魔法の実践投入により、突如グレート＝ブリッジに現れ、そのまま進軍。どんな堅牢な要塞でも、中に入られてしまえば後はそこにいる戦力の差で結果が出る。元々、数では圧倒的に劣っている連合がなすすべはなく、頼みの綱であった「紅き翼」もいなかったため、帝国はグレート＝ブリッジを陥落せしめた。琢磨ですらもう戦争は終わると考えさせられるほどの事件である。長引かせたいと言っていたフェイトに聞いてみると

「戦争終わりそうじゃね？もう大丈夫なのか？」

「まあそろそろ彼らも復帰するだろうしね。これくらいで大丈夫だと思つよ。いざとなれば、君もいるしね。」

と、軽く流された。

実際、このくらいなら琢磨一人でなんとかならないこともない。絶^{イコ}

「ルスビード」

対等速は、無機物にこそ本領を発揮すると琢磨は考える。人間相手でも、魔法障壁や体への強化魔法を気にしなくていいというすばらしいアドバンテージがあるが、無機物に関してはよける必要などすら考えなくていい。決して止まらず、反れず、狙った場所に進み続ける。正直、グレートブリッジだろうがなんだろうが、琢磨にとつてはその辺の石を撃つのと何一つ変わらない。1分ももらえれば、要塞の重要部分を根こそぎ破壊できてしまう。

まあいつかつと考え、今日も今日とて依頼をこなす。「紅き翼」ができてからというものの、琢磨の依頼がものすごく微妙になった。微妙というとなんか言い方だが、なぜか狙撃場所を指定されているような気がしてならない。狙撃というものは、どこからでも狙えるように思えて実はそんなことは無い。もちろん、狙撃手の腕の問題もあるのだが、対象の場所なんかによつてはかなり狙撃ポイントが限られてくる状況があったりもする。

無論、チート全開の琢磨にとつては、対象の場所なんぞ関係は無いのだが、「コスモエンテレケイア完全なる世界」からの依頼が妙に一般の狙撃ポイントのようなものを絞っているように思える。まあ勘違いであると思うし、絞られたところで自身の居場所がばれるわけではないので特に問題はないだろうと考え、和解派の帝国の上層部の一人に照準を合わせる。

これだけRDに和解派が殺されているにもかかわらず、未だに和解を大声で語るとなると相当な勇者である。スコープで対象の顔を見ると、なるほど勇者っぽい顔に勇者っぽい角が生えている勇者っぽいおっさんが写っている。勇者っぽいってなんやねんっと一人ツツコミを入れて撃つ。いつも通り首から上が消えていつも通り任務終了。もうおよそ人間らしい感情が死んでしまったのか、最近ではどんな出来事に関してもほとんど興味を引かなくなりつつある。

大パニックが起きている対象周辺を見る。仲間の首が急に飛んだのだ。あたりまえだが、みんなパニックに陥っている。発狂するもの、泣き出すもの、怯えているもの、反応が様々であるが、こんな光景

を見てもなんら心を揺さぶらない。

「いよいよ終わったな。色々と…元からだっけ？だめだ腐ってるわ。最近物忘れ激しすぎる。」

「フェイト終わったわ。金はいつも通り湖までよろー。」

「いつも通りスムーズだね。こっちも色々終わったところだよ。お金は後で持っていくから君はもう戻っていていいよ。」

「まあなにが終わったのかは聞かないでおくさ。どーせしょうもない悪巧みなんだろう？ほどほどにしとかないと警察にしょっぴかれるぞ。ぎゃははは。」

「まだそれを言うのかい？それに今僕が取り組んでいることに関しては、まぎれもなく世界のためさ。」

「はいはい。救済救済つと。」

「まったく…まあいいや。近々また依頼を入れるからそのときは頼むよ。」

「はあく。したら切るぞ？またな。」

連合のグレート＝ブリッジ奪還作戦。一度は帝国の大規模転移魔法で大軍を送るといふ大胆な作戦により、帝国に陥落させられるも、そのころから前線に復帰した「紅き翼」の活躍により、帝国はやつとの思いで落としたグレート＝ブリッジを奪還されることとなる。連合にもはや力はほとんど残っておらず、「紅き翼」がやられた時点で連合の負けとなるような戦。だが、彼らは負けなかった。数少ない戦力をつれて帝国を蹂躪する。気づけば、帝国は連合を領内に入れてしまうほどの進軍を許すこととなってしまった。どうでもいい情報かもしれないが、「紅き翼」はこれらの戦で個々のファンクラブなどができたらしい。特にリーダーの赤毛はとても人気で、「サウザントマスター千の呪文の男」やら「連合の赤毛の悪魔」やらよくわからない二つ名がついたらしい。イケメンはインフルエンザにかかればいいのに……

ちなみに「紅き翼」の抹殺の任務はこれまでになかった。RDに搾り取られて未だ経済が回復しきっていない連合が彼らを失うと戦争が終わるからという理由らしい。戦闘不能にしたとしても、回復魔法があるし、それすら利かない状態だと、それは死人と大差ないのでダメだというのが理由らしい。

フェイトによると、まだ帝国の方もなんとか持ちこたえられそうなのでしばらくはこのままらしい。小卒の琢磨には難しい話の内容ではあったが、ようするに依頼も特になく暇している状態である。気まぐれに、帝国が持ってきた「紅き翼」の抹殺任務でも受けようかと考えるほどに。金をくれるんで、一応「完全なる世界」の指示に従ってはいるが、依頼が無いとなると話が変わってくる。別に思想もなく、相変わらず繋がりなんかも存在しないので、どんな依頼もウェルカムだ。

割と本気で考えていた時に、フェイトから一本の通信が入る。その

依頼の内容と、対象を知り琢磨は一人笑った。

琢磨は対象から約20km離れた森で通信用の式紙をもって待機する。この式紙、フェイトにはつながっていない。フェイトに繋がっていないのにも関わらず通信の式を持つことは、普段ならばありえないが、この対象への感謝を込めて死ぬ前に少しお話をしようと考え、20km先にもう一つの式を飛ばす。対象は現在、部屋から出てすぐのテラスで一人お茶を飲んでいる。組織の人間なのだろうか？フェイトが、護衛に関しては気にしないでいいと言っていたので、気兼ねなく話せる。音声だけを届ける式が着いたことを確認し、琢磨は話し始めた。

「やあマクギル。元気そうで何よりだ。」

「お前は！RDか！？わしに何のようだ？お前は連合について、帝国について！一体何が目的だ！！？」

「おお、声だけでわかるとは。覚えていてくれて嬉しいよマクギル。いや、ちよつとお前に感謝の言葉を伝えたくてね。」

「感謝…？」

「ああそうだよマクギル。感謝さ。お前のおかげで俺は大金を得ることができたし戦争も体験できた。俺は普段対象としやべることな
んかないんだ。お前は特別だマクギル。ありがとよ…お前のおかげ
でさらに腐つたらしいぞ俺は。あははははははは。」

「誰かいなのか！RDがでたぞ！！誰か！！」

「なんかよくわからんが無駄らしいぞマクギル。お前はとうやら
完全なる世界」的に邪魔らしい。まあドンマイだな。」

「貴様…「完全なる世界」の者だったのか…」

「ん？俺はちがうぞ？ただ金をもらって撃つだけだ。太っ腹なんで
一応従ってるが…まあどうなるかね。」

「貴様は…悪魔がかわいくみえるわ…外道め。」

「まあお前ががんばったようん。何してたか知らんけど。そんじや
くまあ…ばいばいだ。」

そうしてマクギル元老院議員の首はこの世から消滅した。対象の血
だけを残してくれば、後はどう殺そうとも構わないと言われてた
ので、いつも通りに狙撃して終わった。そうしていつも通りに帰宅
しようとする。

ただ、いつも通りではないのは、琢磨の腹から石の槍が飛び出して
きたことだけだった。

「いてえ…くそい…てえ…はあ…はあ…がふっ…なん…でだ？」

「なんで？君は自分がどれほど危険か、自分でわかっているのか？お金と気分でどんな対象をも撃ち殺す。そこには、あるべきはずの思想も、善も悪もない。これがどれほど危ういかわからないか？」

「がはっ…はあ…あいにくと…はあ…小卒だ…くそつたれ…はあ…」

「そうか…元々君に近づいたのは、君を消すことが目的だね。僕を創った方も、君をとてても危険視している。」

「創った…？」

「ん？君ならとづくに気づいているかと思っただが…僕は人間じゃない。意思無き人形さ。造物主ライフメーカーに造られたね。それにしても残念だよ。君ほどの人物を消さなければならぬなんて。ここから狙える銃もすごいが、何よりすごいのは弾丸だね。障壁をまったく無視して飛んでくる。けど、それだけだね。たしかに、造物主が危険視するのもわかるが、見てわかった。君は闘えるような人物ではないね。見つければ簡単に殺せてしまう。その程度の存在さ。」

「その程度…だと？」

「その程度さ。現にこうして死にかけてるじゃないか。その仮面…息が苦しそうだね。首ごととってあげるよ。」

膝をついて、血を必死に止めようとしている琢磨の目の前の地面が

「くたばれよBOT^{人形}があああああああ

「君がね。」

ざしゅつと嫌な音が響く。いつの間にか連射は止まり、トリガーにかけていたはずの右の人差し指がなくなり血が噴出していた。FPSでもこっちでも一番重要な、心臓よりも大切な部分が切り取られた。琢磨は呆然と地面に落ちている自分の指を見続ける。

「式紙さ。東洋の技術も役に立つものだね。」

「はあ…はあ…はあ…」

「ようやくあきらめてくれたかい？なにもしなくてもその体じゃ30分持たないだろうけどね。念のために確実に殺させてもらうよ。」

「はあ…俺はよ…はあ…別に死んでもいいと…おもってたんだわ。」

「どうしたんだい急に？」

「だってそうだろ？…はあ…これだけ…はあ…好き勝手やったんだ…殺されて当然さ…がはっ…。」

「そうだね。僕ももし行くとしたら確実に地獄だろうね。」

「でもよ…はあ…お前にだけは…殺されるわけにはいかねえわ…はあ…」

「まだ抵抗する気かい？どのみち君は助からないよ。」

「BOTによお…はあ…その程度なんて言われてよお…がふっ…そんなの…プロじゃねーだろ？」

「なにをいつているんだい…？」

「こんな…もらった力じゃない…はあ…俺は最高のSRだ…はあ…俺には…それしかない…はあ…それでいい…」

「さつきからなにをいつているんだい？」

「BOTになめられたまま死ぬるかってことだよおおおおおおおおおおおお」

落ちていた人差し指を取り、それを懐にしまう。そして、人差し指の無い右手で札を取り出す。取り出したのは超長距離移動用の転移符。アホのように高い値段ではあるが、金はあるしなによりこのままでは終われない。氣を込めて転移の用意を開始する。

「させるとおもうかい？」

当然いかせまいとフェイトは肉薄する。完全に息の根を止めるために、自らの手で確実に殺そうと。

確実に近くには来るだろうと読み、左手で陰陽符から物を取り出す。取り出すのはFPS3点の一つである手榴弾。ショットガンと合わせて微妙に改造してあるそれは、威力と爆発までの時間をいじっている。ピンを抜いて目の前に投げ、得意でもなんでもないような氣

を全力で込めて体を守る。

「なっ!？」

「ぜってー殺しに戻ってくるぞ。」

爆発。それも、ミサイルでも落ちたのではないのかというほどの大火力。生物が生きられない環境の中で、学生服を着た白髪の青年が、体に微妙にやけどを負いながら淡々と報告を始める。

「造物主、申し訳ありません。RDに逃げられました。」

そこには学生服の青年以外の生き物はおらず、青年の足元には、粉々に砕けた仮面が落ちていた。

「はぁ…はぁ…ぐうづづ…いてえ…息が…はぁ…」

フエイトの攻撃が当たるかという瞬間に、琢磨の手榴弾が爆発。生きてはいるが、もうなぜ生きているのかわからないような状態である。体は槍でつらぬかれたにも関わらず、肉が焼け、傷がふさがり血が止まっている。体中酷い火傷を負ってはいるが、顔はもはや言葉にならない。左目をえぐられ、右目も周りの火傷が邪魔でほとんど開かない。唇や鼻も焼けただれ、もはや人間なのかどうか疑わしい風貌で、それでも琢磨は歩く。超長距離転移により、帝国のどこかにいるはずなのだが、周りを見渡しても森しかなく、自身が今どこにいるのかもわからない。傷をどうにかしないと終わりだが、人がいそうな気配もなく、とうとう足が動かずその場で倒れこむ。

「BOTに負けるプロとか…はぁ…無様すぎるな…俺にはこれ以上ない屈辱だ…はぁ…」

(いい気味だな俺…。これで終わりか…長かったような短かったような…。)

「グルルルルルルルル」

人間の匂いを嗅ぎつけたのか、ほとんど開かない目に僅かに映ったのは、黒い獠猛そうな魔獣であった。

「ははっ…お前が俺を殺すのか…BOTよりましだな…がふっ…食べよ…こんがり肉だぜ？」

「ぐおおおおおおおおお」

雄たけびを上げる魔獣を目に焼き付けながら琢磨は意識を落とす。
意識がなくなる直前に「く」のじゃ」と聞こえた気がするが、限界を
超えて琢磨は、死に向かってその場で落ちていった。

7 撃目（後書き）

というわけで今回はおしまいです。

筆者はどうしても3つのルートを同時に経験した主人公を作りたいくなり、この作品を始めました。

連合 破綻一歩手前

完全 鬼フェイト

帝国 のじゃ〜

がやりたくてしようがなかったのです。学園生活のこととかまったく考えてないですどうしましょう。

BOTにすら負けていたころの自分なんかを思い出して書いてみましたが少々おかしかったですかね？

ただ、FPSプレイヤーは基本的にある程度まで行くと、誰にやられても文句と言いついしか言わなくなる。これはガチ。

そしてそれを超えるとどうでもよくなってるんですね。

BOTにプライドが高いプログラマーが負けたら切れるんじゃないかな？かな！？

8 撃目(前書き)

前回こっぴどくやられましたね。

これ以降、筆者が考えていた限りのチートを出していく予定です。

いつ出すかはわかりませんが…

ご都合主義入りますが、許してくださると幸いです。

8 撃目

体が酷く重たい。たしか意識を落とす前はB O Tにフヘイトやられてボロボロだった気がする。その後、B O Tにだけはやられたくない一心で逃げて…どっかの森をさまよってたら魔獣に出くわして…その後は思い出せないな。

暖かい。体を何かが覆っているような感覚がある。布団であろうか？だとすれば、今寝ているのはベッドということか？てことは生きてる？こんがり肉G状態だったはずんだけど…てか魔獣からどうやって生き延びたんだ俺。助けてもらったのか？こんがり肉を助けるなんて腹でも減ってたのか？何言ってるんだらう俺…起きるか。

「知らないてんじ」目が覚めたか「…おのれ…。」

「たいした生命力じゃのう。お主、生きているのが不思議なほどの瀕死だったのじゃぞ。たまたま、あの森に出かけていて助けられたからよいものの。」

せつかくの台詞を遮られる。遮った人物が、興味深そうにこちらを眺めている。見ると人間で言うと10歳前後くらいであろうか？褐色に銀髪に角と贅沢な組み合わせ。元気いっぱいといった亜人の少女が、ターミネーターに角を生やしたような護衛2人と一緒にこちらを眺めていた。

「ふむ。大丈夫そうじゃの。童はテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア。帝国の第三皇女じゃ。名前は長いからテ

オと呼んでよいぞ。」

「そんなお偉いお方だったのですか。テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア様ございますね。あなた様が私のようなこんがり肉をお救いくださいだったのでございますか？」

「む、テオでよいと言ったじゃろう。それから、なんかその口調似合わない気がするのじゃ。」

「あ、そう？じゃあ普通にしゃべらせてもらおう。いや、敬語とか意味わからん。俺敬語でしゃべったことまったくないから助かるわ。」

「かわりすぎじゃろう…それよりもお主！童にだけ自己紹介させるのなんてあんまりじゃないかの？」

「あ…そうだな。まあすぐに出て行くし別にいいんじゃない？」

「その体でか？」

そうテオドラに言われてから、部屋にあった姿鏡で自分の体を見る。まず、姿鏡にたどり着くまでに、ひどく重たい体を動かして疲れたが、鏡を見てから全てが吹っ飛んだ。全身包帯まみれである。どこかココ？とでも言いたくなるほど包帯だらけだ。

顔にあった包帯をはずしてみる。琢磨自身、鏡を見ることなどあまりなかったのだ、あまり前の顔を鮮明に思い出せないが、それでもこのような顔ではなかったのだけは確かだといえる。

現れたその顔は、左目がえぐりとられ開かない状態、鼻も手榴弾に吹き飛ばされたのか、左の部分が欠けている。口にいたっては、左

側の皮がなく、裂けてしまい剥き出しの状態だ。とつさに右目を庇うように顔を背けたからであろうか、被害は基本左側だけであるが、顔の右側も完治し切れなかった微妙な火傷が目の下らへんに広がっていた。切るのが面倒で、伸ばし放題だった髪の毛は、燃えた部分を切り取られたのであろうか、ショートカットに近い状態まで切られていた。体の包帯をはずすのはめんどくさいのでやらないが、おそらくこれに近い状態であろうことは容易に想像できる。

「ぎゃはははは。無様すぎだろ…いい様だなあほんと。」

「童にはよくわからぬが…おぬしの体は大部分の細胞が死滅してしまったような状態で、上位の治癒術師でもそれが限界じゃそうじゃ。最上位の術師ならば治せたかもしれないが…すまぬ。」

「ああ？なんでおまえがあやまる？別にお前にやられたわけじゃん。そもそも、なんで助けた？俺は人間ヒューマンだぞ？普通は連合の人間だと思っただけでいいだろ。それともあれか？ぐちゃぐちゃすぎて人間だと思わなかったってやつか？だとしたら傑作だな、ぎゃはははははは。」

「おぬしも戦争の犠牲者なのじゃろ？すまぬな…戦争さえなければそのような体になることはなかったであろうに。」

「何勝手に決め付けてる？悪いが戦争とはまったく関係のないことだ…いややっぱあるっちゃあるわ。けど、別に戦争のせいどころなつたわけじゃねえよ。遅かれ早かれ俺はこんな感じになってた。むしろ、この程度で済んで良いのかってな具合さ。」

「この程度って…おぬしその先その体で生きなければならぬのじ

やぞ？それに顔も…術師が言っておつたがまだ若いそうじゃな。それなのにそんな。」

「俺は永遠の少年だ。冗談はこれくらいにして、行くとすつか。悪いねテオ、助けてもらつて。まあ望んだわけではないけど。」

「もうちょっとくらい休んでおれ！ほんと、なんで生きておるのか不思議なほどの大怪我じゃぞ？」

「いやいや、俺としてはまだ生きてていいのかが不思議だよ。魔獣に食われておしまいかと思つてたからな。まあBOTが最後じゃなくてよかつたわ。ざまあみる。」

「BOTというやつにここまでやられたのか？」

「あゝ…説明めんどくさいわ。てかさ、記憶が確かなら俺何か握り締めてなかつたか？」

「これかの？」

BOTにどれだけ攻撃されようが、手榴弾で吹き飛ばうが、魔獣に食われそうになるうが、最後まで手放さなかつた妖銃がセットしてある陰陽符がテオドラから琢磨に返された。ところどころ自分の血で滲んでいるが、見た感じはちゃんと使えそうである。

「これはなんなのじゃ？氣を通すことで発動するものらしいが…なんだか複雑すぎてよくわからなかつたらしいのじゃ。」

「ええ〜。持ち主に断りなく調べちゃう感じなんだ。まあ知識だけ無駄にあるしなあ〜。普通のやつらじゃ解けないだろ。てか、俺じゃないと使えないしな。」

「おぬし、こんなもの作れるくらいじゃから強いのか？」

「まさか。冗談もほどほどにしてくれ。俺なんて後ろのターミネーターに瞬殺されるくらい貧弱だぞ？そもそも、強ければこんな体になってないだろ。人を殴るとかマジ無理。」

「まあもつしばらくここにおれ。その体に慣れるまでは、童の名に賭けて面倒を見てやるのじゃ。」

「なんで無駄に偉そうなんだ？悪いが生活する分には困らない程度の蓄えはある。とっととその札よこせ。お前が持っけていても意味のないものだ。」

「お主は…この戦争に関わってそんな体になったのじゃろ？」

「俺の意思で関わったんだし、お前には何一つ関係ないだろ？いいからそれをよこせ。」

「関係なくないのじゃ！帝国が始めた戦争じゃぞ？それでそんな体に…無関係なんていつて良いはずないじゃろ！」

「悪いが別にこの体になってなにか思うこともない。強いて言うなら無様くらいだ。お前を恨むこともないし、この先関わることもない…とは一概には言えないが、まあなんでもいいや。返せ。」

かなり強めに、半ば脅すように言う。まあ脅したところで、武器もない、体が重い、そもそも戦いつて何？の三重苦の琢磨が、後ろのターミネーターに勝てる可能性は0に近い。それでも、AWPが組み込まれている、自分の半身を人が持つのはあまり我慢できるようなことでもない。BOTにやられて自暴自棄になったのか。別に殺されてもいいやくらいの気迫で迫る。

「それになんで俺だ？戦争の被害者なんて腐るほどいるだろ？ここ宮殿だよな？宮殿から見える町、あそこに住んでる人たちも全員多かれ少なかれ被害を受けてるだろ？こんな見ず知らずの男じゃなくて、まず国民助けてやれよ。」

「この戦争はじまつてからの…童はこの帝国領の、首都から離れたところに連れて行ってもらえなかったのじゃ…おぬしを拾った森がギリギリの範囲かの…戦争に赴く者を見たことはあっても被害者を見ることはなかった。戦争なんて本当は起きてないのではないのかと思うほどじゃった…おぬしを見て怖かった。こんなボロボロになつてまで闘っているものがあるのに、童は何もできない。人一人くらいなら、童の力で守れるのじゃ…安静にしておれ。」

「だから戦争で受けた傷じゃないっていつてんだろ？別に俺は帝国も連合も戦争も恨んじやない。てか、守るとか何言つてんだ？はつきりいつてやろうか？お前が助けた目の前の包帯男はな、本来お前の手で処刑されてもなんらおかしくないような事を今までやってきた男だよ。ざまあねえな、俺が助かって喜ぶやつなんて誰一人いねーんだよ。それどころか、なんで俺を助けたんだつてお前を恨むやつの数は莫大なものになるだろうさ。」

「そうか…童が恨まれるだけで一つの命が救えたのじゃから、それ

はすごくよい結果じゃな。」

「頭に蛆でも沸いたか？魔獣におとなしく食わせとけばよかったのにな。アホだろお前。」

「なぬ！？アホじゃないのじゃ！テオなのじゃ！蛆も沸いてないのじゃ。というかおぬしさつきから聞いていれば何をいっとるんじや！…！」

「お、おおう？」

「おぬし自分のこと死んだ方がいいとか思っておるようじゃが、死んだ方がいい命なんてないのじゃ！…！例外を除く。」

「おい、何ぼそつと例外を除いてるんだ。俺がその例外だって言うてんだろ？牢につなぐか、さつさとここから出すかしろよ。」

「自分から牢に行きたいとか…おぬしMってやつかの？」

「なにさらりと変なこと言ってるの！？そついうことじゃなくて！…！だあああああつ、さつさと札よこせ！」

「だめじゃ。絶対安静じゃ。」

「あんまり俺をなめるなよ？てめーら3人ぶつ殺して出て行くくらいわけないぞ？」

「む、あくまで出ていくつもりかの？せめて体が慣れるまではここにいる気はないのかの？というか、さつき瞬殺されるっていったばつかなのじゃ。」

「うるせえな。BOTになめられたままじゃイライラしてしょうがねーんだよ。」

「じゃあやりかえすためにも、とりあえず安静じゃな。」

「だーから！なんで俺にそこまで構うんだよ。」

「見てみぬふりなんて絶対できないのじゃ！！童は帝国第三皇女じゃぞ？なめるな！！」

「なんで怒るんだよ。いみわからねー。」

「どうしても安静にしないというなら…」

テオドラが勝ち誇った顔で指を鳴らす。このやり取りの中、微動だにできなかったアーノルドさん（仮）とシュワさん（仮）が琢磨の両脇を固め、ベッドに固定する。そして、耳に息がかかるほど顔を近づけ…

「「ねえ〜むるえ〜ねえ〜むるえ〜」

「ぎゃあああああああああ、きもいきもいきもいきもいきもい。あれ…でも俺の顔の方が…やっぱりこっちのがきもい。」

「あははははははは。帝国名物、死の子守唄なのじゃ。」

「唾が…唾が顔にいつぱいかかる。ちょむりだつて！夢に出る！！夢に出るって。」

「絶対安静するまで歌い続けるのじゃ。ほれほれ〜どうじゃ？安静にしたくなってきたのでないかの？」

「わかった！とりあえず安静にするから！！するからやめてっ、やめろっつってんだろ！！」

「うむ。ご苦労じゃった。」

テオドラがもう一度指を鳴らすと、アーノルドさん（確定）とシユワさん（確定）は、元の位置に戻り微動だにしなくなった。

「カオス…」

「あれでおとなしくならない者は皆無なのじゃ。ちなみに、父上がメイドに色目を使っていたときは母上が怒りくるって死の10時間子守唄コースを父上に行ったのじゃが、あの時の父上のやつれようは今でも鮮明に覚えているのじゃ。」

「だめだ…テオの言葉が全部アーノルド語にしか聞こえない…。」

「何言ってるのかよくわからぬが、しばらくここに居ることだし自己紹介するのじゃ！」

「あ〜…名前か…琢磨だよ。榊 琢磨…それが俺の名前だ。」

「うむ！琢磨じゃな！！遅くなったが…帝国へようこそ！ゆっくりしていくのじゃ。」

あたりまえの話ではあるが、いつまでも帝国に留まる理由が存在しない。隙を見ては逃げ出そうと何度も試みた琢磨。始めは、素直に廊下や窓から逃げ出そうとしたが、廊下を走っていると角から食パンを加えた美少女ではなく、サングラスをかけた2m近いターミネーターに出くわし、窓から脱出しようとするれば、下で花嫁を迎えるかのように両手を広げたターミネーターに捕まる。空を飛んで逃げようとするれば、飛行石を持ったヒロインではなく、一人で戦うができそうなマツチヨが二人降り注ぐ。そして、それがテオドラに伝わり、死の子守唄コースに直行する。

後半は、何が何でも逃げ出そうと、部屋に転移魔法陣を敷いてみたが、転移の瞬間になると、どこからともなく二人のターミネーターが現れ、ラグビー選手も勢いで死んでしまうようなタツクルを同時にかまされ、また死の子守唄コースと散々な目にあつた。

転移で万策が尽き、そもそも妖銃を返してもらってもいないことに気づき、おとなしく部屋で過ごす日々が続いた。テオドラは、暇さえあれば琢磨を訪問しに来た（ターミネーター付で）。琢磨と話して何が面白いのか、琢磨自身はさっぱりであったが、テオドラはとても楽しそうに毎日、わずから5分でも空気があれば琢磨の元に通っ

ていた。しゃべる内容も、あつてないようなくだらしないものばかり。琢磨が不適にしゃべり、テオドラが笑う。なぜか『アホ』の単語で毎回マジギレするテオドラ。

一度、なぜ自分にここまでこだわるのか聴いた所、しゃべってみたら面白かったと、よくわからない理由を言われた。

そんなくだらしく過ぎる日々が続いたある日、テオドラがいつにもまして機嫌よく部屋に入ってきた。なんで機嫌がいいか聞かないと子守唄じゃ！というわけわからない脅しに、しぶしぶ従って理由を聞いた。

曰く、もう戦争が終わる。自分と連合にいるアリカ、長いのでアリカ姫が秘密に会議を行い、戦争を止めるといった理由であった。なんでも、アリカ姫はすごい人らしく、あの「紅き翼」^{アラルラ}を従えている人物らしい。

まあよくわからないがおめでとつとだけ言つてあげると、テオドラは満面の笑みを浮かべ、その日のうちに会議が行われる場所に向かつていった。

ほどなくして、新聞の一面が驚愕の事実で飾られた。あの「赤き翼」が反逆者であったと。襲撃されたマクギル元老院議員は怪我もなく無事な体であるが、あの「赤き翼」が帝国のものであり、元老院議員を襲撃したという事実が、旧世界中に知れ渡る。

琢磨は、何言つてるんだみたいな顔で微笑んでいたが、何も知らない者からすれば「紅き翼」は反逆者。おそらくやつたのはフェイトであろう。これで「紅き翼」の事実上おしまいである。このタイミングでこれということは、おそらくテオドラとアリカ姫とやらも終わった。心の中でドンマイと黙祷し、いい加減この体にも慣れたし、さっさと出て行くかという時にターミネーターの二人が部屋の出口をふさぐ。

「あゝ…もう体も治ったわけだしね。いい加減出て行くわ。」

「……………」

「まあ、テオにあいさつはしてないけどさ。別にどうでもいいっしょ？俺なんかいてもいなくても変わらんし。」

「……………」

「慣れるまでが条件だったしね。もうこの通り、いい感じさ。てなわけで、あの札返してくれ。」

ターミネーターの片方が札を差し出し、そしてすぐさま片方が琢磨を腕でガッチリと押さえた。

「まだなんかするの？悪いが子守唄は勘弁だ。俺は何もしてないぞ？」

「テオドラ様と連絡が取れなくなった。助けて欲しい。」

「はっ、こんなミイラ男捕まえて何言ってる？」

「テオドラ様の居場所はノクティス・ラピリントゥス「夜の迷宮」と表示されている。」

「いやいやいや、あんたらいけばいいじゃん？場所までわかってるのになんでここにいるの？」

「我々ではおそらく救えない。だが、お前なら救える。」

「意味がわからない。アーノルド語はちょっと理解できません。」

「あれほどの札を作り出せるお前が無能なわけがない。」

「買いかぶりごと。それに、こちらこれからの予定で忙しいんだよ。復讐的な意味で。」

「テオドラ様は死にかけだったお前を救った。」

「別に望んでいたわけではないだろ？魔獣にならやられてもいいと思つてたしな。」

「だが救った。これが事実だ。お前はテオドラ様に借りがある。」

「ねーよ。なにふざけたこといつてんの？勝手に救つて借りとか意味不。」

「宮殿に治療術師がいなかったかった。テオドラ様は治療を依頼してお前を救った。お前の傷はでかかった。かかった金も結構なものだ。」

「ん、金額言えよ。後で耳そろえて支払つてやるから。」

「テオドラ様は数少ない自身の金を使つてお前を治した。お前がどれだけ金を持っているかは知らんが、その中から同じ金額を出すのとはわけが違う。」

「はあ？1DPは1DPだろ？いいからさっさと札よこせ。」

「なによりたぶんテオドラ様はお前に助けて欲しいと思っている。
…そんな気がする。」

「ないない。なにがそんな気がするだよ。ちょっとセンチメンタルな雰囲気だすなよ。映画思い出すだろーが。」

「テオドラ様と話しているお前は楽しそうに見えた。」

「まあな〜VCに女の子がいた時の俺の強さやばかったからね。」

「よくわからないが…少ないがこれも用意した。」

ターミネーター二人が取り出したのは封筒。中には一つの封筒につき50万DP、合わせて100万DP入っていた。

「これから命を賭ける事になるかもしれないお前に、この額では不服だろうが我々に払える限界だ。」

「いやいやいや…こんなんでも依頼受けるやつとか「ゴミ箱」の連中くらいだろ。ていうか、なんで依頼って発想が出てきたんだよ。」

「戦争に参加せずにそれだけの傷を負っていたとっていただけな。ということとは、依頼された何かをこなしていた人物に当たると考えた。それがトレジャーハンターか便利屋か、それとも殺し屋か…そこまではわからなかったが。」

「はあ…てか100万とか史上最低に近い金額だよこれ…無事つれて帰ったら追加報酬をテオの親父から搾り取るからそのつもりで伝

えとけよ？」

「「!?!?いつてくれるのか!?!?」」

「きもいきもいきもい！鼻息荒く近づくなよ。よく考えればあいつお偉いさんだしな。親父の方から搾り取るわ。」

「すまない…頼んでおいてなんだが大丈夫なのか？「夜の迷宮」といえばかなり危険な場所だぞ？」

「あゝ大丈夫。俺は戦わねーし。それに…依頼達成率はなにげに100%だ。」

微妙に頼りない感じを出しつつ、琢磨は「夜の迷宮」へと向かう。久しぶりに手に持った、己の半身を握り締めて。

8 撃目（後書き）

CCO∴ししお まこと

アーノルド&シュワ∴いわずもがな。シュワはネガーと迷った。

VC∴ボイスチャット。FPS必需品。これに女の子が混ざると、
なれない時はやたらとテンションが上がります。俺は上がる。

テオとのからみでした。萌えキャラとかまじむり。文才皆無。赤
き翼出現フラグ立ってますが、仲良くすることはないです。ネタバレ
レのようですが言いたかった。戦争でこいつらはすと、ストーリー
ー思い浮かばないんだ。

9 撃目(前書き)

安定しない文字数 O R Z

9 撃目

「これとこれと…これだな。BOTの時も、フヘイトこの準備時間さえあればあんなことにはならなかったのに…ああ〜イライラする。撃ちてえ〜超撃ちてえわ。」

テオドラの奪還を、半ば押し付けられた琢磨ことRDは、現在「ゴミ箱」にある自宅に一度帰り、必要になりそうなものの準備をしている。今回の任務は、遠距離からの狙撃ではなく、奪還であるので対象に合わなければならぬ。戦場に行くのはちょっとないです…な思考の琢磨は、それなりな式紙や、必要なものをフードにしまっていく。

実際、琢磨の思考の10割を占めているのは、いかにBOTに復讐してやるかである。この任務、コスモエンテレイア「完全なる世界」が関わっている可能性が非常に高い。ていうか、実際やったのはあいつらであろう。だとすれば、BOTがいる可能性もなきにしもあらず。テオドラの奪還は、おまけ程度のおつかいになっている。

「100万DPで…今更ながらありえないだろ。皇帝陛下様様に期待せざるをえないな。てか出させるから期待も何もあつたもんじやないんだけど。そういえば、どこにいったっけ？…やばい普通に思いません。」

元々SRのことと、FPSの事以外では輝きを放たない脳が最近さらに腐り始めてきたのを実感する。1時間かけて、ノクティス・ラビリンソントラップス「夜の迷宮」だった気がする程度に思い出して、家を出る。準備は万全。BOTと

やりあった時にはできなかった戦法も、遠距離ならば問題はない。確殺の意思を持って、RDはその場を後にした。

「普通に遠かった。1日以上かかるとは…もうちょっと空を飛ぶの早くしたいな。でも練習とかめんどくさいし…ドラゴンでも飼おうかな…でもな…それはそれで飼育が…。まあ帰ってから考えよう。明日から本気出す。」

某掲示板の名言とも言えるべき決意を胸に、たどり着いた「夜の迷宮」を見る。たどり着いたのは視界だけで、いつも通り遠く離れた場所で待機中であることは、もはや言わなくてもお分かりであろう。少し小高いところにある「夜の迷宮」。そこよりも高い位置が取れなかったので、大分離れた平地から、やや見上げるような角度で観察する。

「えつとあのガキは…いたいた。誰か女としゃべってるな。話し声も聞きたいけど遠すぎて無理だな。なんだろうこれ…テオドラ以外やってもいいのかな？BOTも見当たらねーし萎えるわ。ああ…もうだめだめだ…考えるのめんどくさすぎる。とりあえずあの二人以外は殲滅！その後めんどくさそうならあの二人も殲滅だな。BOT

いない時点でどうでもいいわ。」

あんまりこの二人重要ではないのだろうか？二人とも拘束もされていなければ、見張り役も少なく、見渡してみても戦えそうな使い手が少ない。もうBOTがいるものと思つて殺す算段まで立ててきたのにこれである。

気持ちは萎え萎え、体はダルダルで力がまったく入らない。とりあえず、片っ端から狙撃を開始する。もう誰が味方かとかは何も考えしていない。そもそも、RDに仲間などいないので、仮に今殺している人々がこの世界で重要だろうが、何一つ関係ない。まあテオドラとしゃべってるやつはさすがにまずいのかなと、そこだけは自重するがそれ以外は殲滅である。

元々数も少なく、なんか強そうな見た目のやつもいなかったからか、「夜の迷宮」は3分前からRDの手によつて殲滅され、残つたのは周りの悲鳴でしか現状を把握していない女が2人と、穴だらけになつた建物のみであつた。

「よし、ここでテオドラがこつち来てくれればありがたいんだけどな…迎えに行くパターンだよなこれ。めんどくせ〜いくら要求しようかな。えつとあれどこいったか…あつたあつた。いけ！RD2号！！！」

懐から小さな人型の紙を取り出し、氣を込める。現れたのは琢磨そつくりの何か。割と初歩的な陰陽術の一つだが、それゆえに奥が深い。達人が使えば、本物とまったく見分けがつかないほどの式ができあがるが、別に琢磨はそんなものもとめていないので、とりあえず自身だとわかるようなものを生み出す。一応、最高の知識の元、

自身でものを考えられ、琢磨と思考のリンクもできるように作られた式であるが、他は普通の使い手の式と何も変わらない。神からもらった能力や目は、式には移せなかった。

作られたRDも、本人じゃないとはいえ、本人をベースに作られた式である。ものすごくめんどくさそうな顔で生まれてきたそれは、「行け！」という命令を聞いた途端、露骨に嫌そうな顔を向ける。

「いや〜ちょっとそういうのはやってねーわ俺。そんなことをやるために俺を生み出したの？バカなの？小卒なの？」

「いいから行けよ。俺だって帰りたいんだから。マスター俺だぞ？黙って迎えに行つてこいよ小卒。」

「遠いもんこつからあそこまで。もう金もあるしよくね？あれも撃とうよめんどくさいから。」

「お前こつからじゃ撃てないだろ。ざまあみる。さつさと行つてこいよ。」

「いやいや、お前が撃てばいいじゃん。てか撃たなくてもいいや、放置でいこう。どうせたかが知れてるだろもらえる金なんて。」

「誰が貰うなんていったよ？奪うんだよ。ただし、奪うことにはなるが、結果的には皇帝陛下様が皇女様を想つてお金を出すんだよ。」

「意味わからん。さすが俺、意味わからん。」

「いいからさつさと行つてこいや！俺はその間安全な場所ですつても狙撃できるようにしとくから。」

「もうヘタレの極みだもんなほんと…はあいつてくるわ。」

だるさの塊のような式がトボトボとテオドラの所へ向かう。一応、ある程度の氣や魔力を持たせてはいるので、飛んで向かっているが、全力の琢磨ですら飛ぶのは早くない。そんな琢磨からできた式、さらに魔力と氣の制限ありである。

フラフラと、心の中を表すかのように飛んでいく。もう、その光景だけでどれだけ嫌なのが丸分かりであるが、結局のところマスタ―である本人には逆らえず、グチグチと文句を言いながらも「夜の迷宮」に辿り着く。

「はあく迎えに来ましたよテオドラ様。さっさと帰りましょう。音速で。」

「琢磨…！お主どうしてここにおるのじゃ…？」

「まあ〜成り行きてかなんというか。」

「琢磨！伏せるのじゃ…！何者かがこの迷宮にいる人間を皆殺しにしているらしいのじゃ！」

「ああたぶんもう平気だと思っ…うん平気だよ！大丈夫大丈夫。俺がここに着たからには安心してくれ。」

「お主そんな強かったのか？」

もう撃って終わりでよくな？と散々言っていた琢磨（式）がこの場にいることで、とりあえず銃撃が始まる心配はない。何一つ嘘は言っていないが、テオドラは勝手に琢磨が強いと勘違いしてしまっただけらしい。

そして、勘違いをしてしまった人がもう一人。

「貴様何者じゃ？」

「誰お前？」

「お、お前…私の名はアリカ。ウイスペリタティア王国の王女じゃ。貴様はテオドラ第三皇女の護衛か何かか？」

「何言ってるんだお前。頭おかしいのか？」

「き、貴様…無礼な！テオドラ！！こやつは何者じゃ！？」

「琢磨は童の護衛じゃ。」

「角折れる。依頼で捕らえられたテオドラを迎えに着たんだよ。もう帰っていいよね？テオドラ早くこっちこい。」

「え？ア、アリカはどうするのじゃ？」

「どうするってなに？どうもしないけど？」

「そういうことではない！アリカだけ置いていくつもりか！？」

「いや…なんで俺がそんな面倒見なきゃいけないの？依頼でもなん

でもないのに。」

「お、お主ふざけておるのか！？こんなところにアリカ一人置いていくなどできるはずないのじゃ。」

「ええ〜…そこらに船くらいあるだろ。それで勝手に国に帰ればいいじゃん。もう行くつよ〜。」

「だめじゃ！お主は知らないだろうがこの戦争には裏があるのじゃ。それを知るものは少ない。ここでアリカ姫に生きてもらわないと、連合の方に手出しできなくなってしまふのじゃ。」

「それと俺の依頼と何の関係があるの？」

「なっ…話を聞いておったのか！？もはや依頼どころの話ではないのじゃ…！」

「なんで戦争に裏があつたら依頼どころの話じゃなくなるの？」

話が噛み合わない。アリカはこのやり取りを聴いていて、薄ら寒い思いに捕らわれる。一応、男が言うことも間違つてはいない。

だが、この世界に生きているものとして、常識的に考えたらテオドラの話に耳を傾け、何とかしようと動くのではないだろうか？しかし、目の前に全身を巻き、フードをかぶっているこの男は微塵も耳を傾ける気がない。というよりは、テオドラの話を初から聴いていない風にすら見える。

テオドラは自身の護衛だと言ったが、アリカには目の前の男はともそのようなものには見えなかった。幼いころから、地獄のような宮殿内で信じられるものもほとんどいない世界を生きてきたが、こ

れほど恐怖を覚えるような男に出会ったのは初めてだった。

たぶん、見た目だけで判断するなら戦闘能力はあまりないだろうと思われる。怪しい風貌をしているが、別に見た目で怯えているわけでもない。アリカは戦えるわけではないので判断は確実ではないが、確実に自身の剣であり、盾である「紅き翼」^{アラルウラ}よりは弱いと断言できるであろうその男。

男は、怯えさせるような気は微塵もなく、おそらく全て自身が思ったことを言っているだけであろう。だからこそ怖い。人間を機械にたとえるなら、とても大事な、人間であるために必要なための歯車がないかのような、そんなことを連想させる男。だが、どれだけな事を連想させようとも戦闘能力はないと判断し、そこで考えをやめる。

「とにかく！アリカを置いていくことは許さないのじゃ！！」

「んじゃあ行こうかテオドラ。」

「話をちゃんと聞くのじゃ！！」

「いや、別に許されなくてもなんら問題ないし…どうせもう会うことも無いしな。」

「それはどういふ…」迎えに来たせ姫さん。「」

テオドラが琢磨にどういふ意味か聞こうとしたときにそれは起きた。3人がいた部屋の壁が轟音を上げて吹き飛ぶ。土煙を上げている壁の穴から一人の青年が現れる。赤髪に端正な顔立ち、今は反逆者として追われている身だが、ほんの少し前までは連合の英雄と謳われ

たナギ・スプリングフィールドが仲間を引き連れながらアリカ姫に話しかける。

アリカ姫も、来るのがわかっていたのか、軽口を叩きながらそれに答える。

「おそいぞ我が騎士。」

「そりゃあ悪かったですね。それにしても、俺らの前に誰か着たのか？敵が一人もいなかったんだが。暴れ損ねたぜ。」

「おぬしたちの前に来たのがいるにはいるんだが…」

そういつて、空気になっていた琢磨にアリカの視線が行く。それに釣られるように、英雄たちもぞくぞくと琢磨を見るために集まる。

「お前がこれやったのか？」

「はあ…テオドラ帰ろう。割とガチでもう帰ろう。」

「シカトすんなよ。お前誰だ？人間…だよな？」

「うむ！童の護衛の琢磨じゃ。」

「おや、テオドラ様もご無事でしたか。それは何よりです。」

イライラが限界を超えそうだ。勝手に護衛にされるし、今来たやつ

らが勝手に話し始めるし。本体のせいでこんな所にいるが、実際は一刻も早く消えてしまいたいぐらい萎えている琢磨（式）。なんでこんなことになってんの？と思いつき返そうとしたら、またもや赤髪から質問が飛ぶ。

「へえ〜人間なのに帝国側なのか。結構珍しいやつだな。俺はナギ・スプリングフィールド。知ってるだろうが「千の呪文の男」サウザント・マスター、連合の英雄だ。まあ今は反逆者ってことになってるけどな。後ろのやつらは俺の仲間だ。んで、琢磨だっけ？これお前がやったのか？」

「…いや、俺ではない。俺が来た時には、もう既にこうなっていた。テオドラ、もういいだろう？行くぞ。」

「ナギ、とりあえず隠れ家まで戻りましょう。色々お話もあることですしね。」

「そうだな、姫さん！とりあえずオリンポス山の隠れ家までいくぞ。」

「うむ、テオドラよ。そなたとそこにいる男も一緒に来い。」

「意味わからねーし。おいテオドラ、もういいこうぞ。」うむ！とりあえずそこで話すのじゃ。」

もういい加減限界が来た式は、本体に念話を飛ばす。

（いますぐこいつら消し飛ばせ。いますぐだ。）

(ん〜、隠れ家とか言うところでもやるっぜ？こいつら反逆者だし、隠れ家わかれば金になるだろ。その後消せばさらにドンってやつだ)

(普通に無理だわ。よく我慢したと思うよ俺？いいからさっさと撃てよ。)

(てか、なんでお前が命令してるんだ？いいから黙って着いていけよ。)

(ほんと…お前二度と俺を作り出すなよ？まじめんどくせえ)

(はいはい、琢磨君はやればできる子ですね〜。)

本体におちよくられ、一段と萎える式。テオドラや、アリカ姫、「紅き翼」と一緒に隠れ家へと向かう。テオドラは、琢磨が助けに来てくれたと思い、ずっと上機嫌であったが、式のほうはBOTがない、めんどくさいことを強制させられてる、テオドラが言うこと利かない、変な連中とわけわからない状態になっていると、萎えまくりである。

姫様を助け出せて、上機嫌な英雄たち。その英雄たちに助けられて、まんざらでもない姫様。意外な人物に助けられてテンション上げ上げ状態の皇女様。もう目が腐り始めた包帯男。その包帯男を見て、行かなくてよかったと心底思っている男。それらの人物たちは、オリンポス山にある隠れ家へと向かっていった。

「さーて、姫さん。助けてやったはいいけどこっからは大変だぜ。連合にも帝国にも…あんたの国にも味方はいねえ。」

「恐れながらその通りです王女殿下。殿下のオステイアも似たような状況で…最新の調査では、オステイアの上層部がもっとも黒い…という可能性さえ上がっています。」

「やはりそうか…」

(消えたい…何で俺ここにいるんだろう。)

隠れ家に着いたはいいが、テオドラは着いて早々、褐色の筋肉ムキムキの強そうな大男とじゃれ付き始め、他のメンバーはなんかよくわからないことを言っているが、一つ判ったことがある。こいつらどうやら「完全なる世界」の事を既に知っているようである。まあ、マクギルの時にそもそも誰かにはめられているのはわかっているの。今更ではあるが、これでこいつらの使い道も見えてきた。

(もう消えてもいい？俺いらないだろこれ。)

本体に念話で話しかける。本体は現在山を挟んだ向こう側で、狙撃体制を取っているらしい。

(こいつらにBOT探しさせよう。消してもいいかと思ってたけど、なんか使い道あったな。)

(もう俺いらないよね？後は自分でやれよ。)

(もうちょいがんばれよ。てか会話聞いてみ？面白くね？バランスとるためだけに生かされてたのに、なんかはっちゃけてるぞ？)

「我が騎士よ。」

「だから、その我が騎士って何だよ姫さん。」

なんか本体が面白いとか言っていたので、目の前で繰り広げられているお芝居のようなものをしばらく見ることにする。

「もう連合の兵ではないのじゃろ。ならば、主はもはや私のものだ。」

「なっ…」

「連合に帝国…そして我がオスティア。世界全てが我らの敵というわけじゃな。じゃが…主と主の「紅き翼」は無敵なのじゃろ？」

(一体何を言ってるんだろっ…)

この辺りで、話を聞いていなかった者たちもリーダーとお姫様の元

何が面白いのかわからないが、明らかに自分たちのことを笑われている。ナギ・スプリングフィールドは怒りをあらわにし、琢磨に迫る。見れば、何か雰囲気を感じ取ったのであるうか、最強の7人は姫様を後ろに下がらせ、警戒をあらわにする。

「あつはつははははは。あゝ怒ってる感じ？まあまあ、俺に何かしたってしょうがないし落ち着けば？」

「てめえもしかして「完全なる世界」のやつか!？」

可能性はある。もう味方がいないような状況なのだ。ましてや、こいつの態度は最初から明らかにおかしかった。敵としての可能性が上がった途端、「紅き翼」の全員が戦闘態勢を取り、警戒レベルを最高まで上げる。

「あゝやめといたほうがいいんじゃないかな…？今回は準備万端だ。そんでもってもう準備も終わった。このまま反逆者として突き出してもいいんだが…お前たちにやってほしいことがある。」

「俺たちは反逆者じゃねえ!！」

「知ってるさ。知ってるよ」「赤き翼」のみなさん。ニューズ見て笑っちゃまったよ。マクギル元老院議員には怪我は有りませんでしたとか…あつははははははははははは、まじ笑えるよね？怪我どころかとっくにこの世にはいねーのにさ。」

「てめえ……」

「まっってください。」

ここで、黒髪の優男。大魔道士アルビレオ・イマは一つの疑問を覚える。なぜ、この男がそれを知っている？本当に「完全なる世界」の刺客なのだろうか？だとすれば無謀すぎる。仮にもこちらには最強クラスの使い手が7人いる。そこに一人で来るなどありえないと考えたのだ。

「あなたは「完全なる世界」の者ですか？」

「んにゃ、違うわ。」

「では、なぜマクギル元老院議員が死んだことを知っているのですか？」

「ああ、一応知ってるやつはここにいるやつらと「完全なる世界」の連中だけなんだっけ？なら勘違いも無理ないな。答えは簡単だよ。俺が殺したから。」

静寂。淡々と大ニュースになることを言い放った男。そしてそれを誰よりも信じられないのがテオドラである。あれだけ楽しくおしゃべりしていた相手が、普通にありえないことを言い放った。もう、目の前に写る男がこの前まで楽しくおしゃべりしていた人物なのか疑うような内容。目に涙を溜めながらすがりつくように琢磨に問い

かける。

「あ、あははは。琢磨は冗談がうまいのじゃ。すごいぞ琢磨！ここに
いる英雄たちも騙されておる。」

「テオドラ様！お下がりくださいー！」

「黙っておれー！なあ琢磨、そろそろ冗談でしたと言わないと、み
な本気にしてしまうぞ？」

「……………」

「あ、あんまり長引かせてもみんな本気にしてしまうだけじゃぞ？
そうだ琢磨よ！ここから帰ったら童は正式にお主を護衛にしたいと
考えていたんじゃ。どうじゃ？報酬もたんまりじゃぞ？琢磨はあま
り強くないとおったが、楽しくおしゃべりできればそれでよ
いのじゃ。」

「テオドラー！そやつはまずいー！早く下がるのじゃー！」

「うるさいのじゃ！琢磨よ、どうじゃろうか？」

「…テオドラには結構感謝しているんだぞ？この後もらえる金のこ
ともそうだが、なによりも…」

一瞬の静寂。この場にいるのは偽者であるが、一応実態がある。そ
して、溜めている最中に懐からとり出したそれは、右手だけ実体化
していれば、簡単に人を殺せてしまうもの。ベレッタM92、おそ

らくもつとも人気があるハンドガンではないのであるうか？何の力スタムもしていない、ただのコレクションの一品をテオドラに突きつける。

「なんか俺の分の恨みを背負ってくれるんだろ？あんがと…おかげで気兼ねなく暴れられるわ。…まあ気負ったことなんてないけどさ。」

「た、たくま…」

パンツと乾いた音が響き、その後、テオドラが自身の太ももを押さえながらその場に倒れこんだ。それを合図に英雄たちが自身の魔力や氣を練り上げる。確定、目の前の包帯フードは敵。英雄と呼ばれた者たちが、一斉に攻撃を仕掛けようと動き始める。

「ああああああああああああ。」

「てめええええええええええええ。」

「言い忘れてたけど、俺我慢苦手なんだよね。だから帰ろうって言っただじゃん。これ背負っていくのめんどくせーよ。まあそれは俺じやねーからいつか。」

崩れ行くテオドラを尻目に、誰よりも早く行動したのは先ほどテオドラとじゃれ付いていた筋肉大男。自身のアーティファクトであるうか？馬鹿でかい大剣を振りかぶり、一刀のもと、包帯男を切り捨

てた。

「はあ？」

あつけない幕切れ。この場に乗り込んでくるといふことは、それなりな強者と踏んでいた6人は呆然とする。唯一人、かつて腕を吹き飛ばされた陰陽術に長けた剣士は異変に気づき、声を張り上げる。

「じゃああああああああつく」

「え？」

一瞬の油断。呆然としていた思考の隙を突かれ、筋肉男の右腕と左足が胴体から外れた。

「がつ？あああああああああ」

「ジャックー！！」

ボンツつと、切り捨てた男が式紙に戻り、大男が血飛沫を飛び散らせながら崩れ行く。それを合図に、誰も知らない辺境の一角の隠れ家で一方的な殲滅が始まった。

9 撃目（後書き）

すみません、長かったので分けます。

そして、次いつ更新できるかわからないです。ほんとごめんなさい。アンチのタグ入れたほうが良いんですかね？この主人公だから、金さえ払えば誰とでも仲良くしそうな感じがするし微妙なところです。

10 撃目（前書き）

教習所でキャンセル待ちをしつつ、バイトをする日々。めんどくせえ。

グロ&外道成分がかなり強めになっているとおもいます。苦手な方は20km以上逃げてください。

「あのバカ…。」

英雄達の集まりから遠く離れた山の中腹で、一人愚痴をこぼす。今視界には自分の式がアホみたく笑っている光景が目映っている。面白いから聞いてみるとは言ったが、馬鹿みたく笑い転げるとは一言も言っていない。

テオドラをさつさと連れて帰る予定が崩れ、次は適当にBOTの捜索でもやらせようかと思っていたが、あれではお願いしても無理と判断し、即座に準備を開始する。式のほうは完全にやる気が崩れ、どうなつてもいいかのごとく英雄達を小馬鹿にして笑っている。

殺しても問題はないといえればそれまでなのだが、「コズモエンテレケイア完全なる世界」の存在を知る唯一の人物達であり、隠れながら行動するあの者たちの行方を探し出せそうな可能性がある者たちなので、生かして捜索はさせたいところである。

「これやると酔うんだよな。だけど普通にやっても通じるかわからんしな…一応あいつらは英雄つてやつだもんな。」

淡々と準備を始める。マガジンにとある陰陽符の力を込めた弾丸を装填する。この陰陽符は非常に高価なもので、琢磨自身使うのはかなり久々な一品。その力を込めた弾丸を、英雄達からかなり離れた場所に撃ちはじめる。

当たり前ではあるが、秒速140km/sなんて速度は、人間の目で追えるような速度ではない。それに加え、琢磨は20km先まで

しか視界が届かない。【絶対等速】^{イコールスピード}で、いつまでも弾丸を保ち続けられるが、標的を視認できなければ意味はない。しかし、距離や速さで追えずとも、時間でなら琢磨はこの弾丸の行方を追える。20 km先の標的に着弾するまでの時間が、0.14秒。40 km先ならば0.28秒。これだけの時間があれば、琢磨でなくとも、プロゲーマーなら余裕で反応できる時間である。プロゲーマーでなくとも、戦いに優れているものならば反応は簡単であろう。つまり、琢磨の弾は、撃ちだすタイミングさえわかればある程度避けることは可能なのである。

ゆえに、生物の反応など感じ取らせない距離からの狙撃である。タイミングさえわかかなければ、あの速度で飛来する弾丸を防ぐことはできはしないだろう。

今回は、英雄相手の、屈服させることを前提とした狙撃であるので更に念を入れる。陰陽の力を込めたリーズナブルではない弾丸を、英雄達を中心に半径20 kmで囲むように撃ちだしていく。標的が決まっているわけではないので、およそこれくらいで対象から20 kmほどであろうというポイントで【絶対等速】を解除。着弾地点に陰陽の弾丸により陣が敷かれるといった具合を繰り返す。正確に0.28秒を計れるというわけではないので、とても歪な、術師の心を表すかのような円が完成した。最後に、英雄達のはるか上空に撃ちこみ、自分の足元にも同じものを撃ちこんで、陣を敷いて完成である。

転移魔法。魔法の中でも、高難易度の魔法として知られるものである。何かを媒介にし、術師が転移可能な距離と距離を0にするというこの魔法、高難易度というだけあって、非常に強力かつ、便利なのだが消費魔力が結構なものである。転移で必要な工程として、一番魔力を消費するのは入り口と出口を作ることであろう。この入り口と出口を作り出すのが非常にめんどくさい、空間の座標の指定やら媒介に使うものの用意やらで大変なのである。

琢磨は転移が得意というわけではない。一応100年以上やってきたので、それなりな距離はできるが、それでも出口を自分でこじ開けながらの転移はいいところ5〜6kmが限界であろう。これが、600年生きた大魔法使いと呼ばれるような存在であれば、埼玉から京都の距離を一瞬で転移し、魔力切れも起こさずピンピンしているかもしれない。

しかし、琢磨には当然そのような技量も魔力も存在しない。ゆえに面白い。FPSと狙撃にだけ働く頭をフル稼働させ、思いついた最高の狙撃。足りないものを、最高の陰陽符を用意し、補う。この敷いた陣でのみ、転移で足りない分の魔力を補う転移を行える。なにより力を入れたのが、媒介にするものである。一般的な転移で媒介に使われるものは、影か水辺りであるが、それでは潜るまでに僅かな時間がかかってしまう。タイムラグを0にしたくて作り出したこの陣限定での媒介は空気である。これにより、転移というより、指定した陣と空間ごと入れ替えるというタイムラグ0の転移が完成した。

「あいつ…テオドラ撃つとか何考えてるんだよ。背負って帰るの俺なんだぞくそが。あれわざとだなあいつ。めんどくせえ。」

式を見ると、ベレッタでテオドラの太ももを撃ち抜き、ものすごくでかい剣をもった、ものすごくでかい筋肉男に、ものすごい速度で切り捨てられているシーンであった。

「ざまあ。後でまたよんでやろう。したらば殲滅戦を開始しますか。あ、違った。殲滅しちゃいけないのか。8分殺しをはじめますか。」

とりあえず、式だったことに気づかず動揺していた筋肉男の腕と足を飛ばし、転移を開始する。敷いた陣の数は足元の陣と合わせて21。陣を維持しつつ転移を可能にする限界がこの数である。英雄達を囲むように敷かれた、円錐型の歪んだ殺陣。超高速での狙撃が始まった。

「がっ？あああああああああ」

「ジャック！！」

この場にいるのは、それぞれが最強といっても過言ではない英雄達である。その中で、バグキヤラとまで言われた無敵の剣闘士 ジャック・ラカンが、察知できないような攻撃により片腕と片足を吹き飛ばされ、血の海の中に沈んだ。

「詠春の時と同じ…じゃあ、あいつがああRDなのか？」

アルギユレーの辺境に追い詰められるようになった原因。後に連合

に復帰した際に聞いたRDの戦果の数々。あの時もRDによる攻撃
であろうと聞いた「紅き翼^{アラルプラ}」。まさか、テオドラの護衛と称して目
の前に現れるとは思っておらず、動揺が広がる。

「姫さん！タカミチ！あのちっこい皇女と一緒に伏せてる！！」

「ナギ！固まるのは得策ではありません。逃げないとまずいことにな
ります。」

「姫さんやジャック置いて逃げ切れないだろ！ここでRDをぶつ
ぶすぞ。」

「くっ…詠春。今の攻撃を感じ取れましたか？」

「ダメだ。何をしているのかすらわからん。氣も魔力もまったく感
じなかったぞ。わかったのは何かが飛んできたということくらいだ。」

「詠春ですらわからんとは…あやつは一体なにをやっておる！？」

「何をやってるのかなんか関係ねえぜお師匠！！ここであいつは必
ずぶつつぶす！ジャックは大丈夫か？」

「いてえ…ちくしょう俺様の体吹き飛ばしやがって。」

「アルは皇女様とジャックの治療をしてやってくれ！いくぜ、詠春。
ガトウ。お師匠様。」

あてもなく4人が別々の方向に移動し始める。残った一人が筋肉男の腕と足を回収し、魔力を練り上げ始める。それを転移しつつ確認した男は微笑む。このタイミングで残ったということは、あの黒髪が「紅き翼」の回復役なのであろう。それさえ潰せば、この先潰しても蘇ってくるというめんどくさい状況にはならない。脇腹と両腕をかすめるように銃弾を放ち、また転移を始める。

「ジャック！平気ですか？今治します。」

「あのやろう…ぜってえゆるさねえ。」

「ふふっ、それだけの元気があれば平気ですね。準備ができました。それじゃあ治療を開始しますよ。」

大魔道師 アルビレオ・イマは、落ちていたジャックの足と腕を回収し、治療を開始しようとする。この狙われている状況で、仲間を治療しようとするのは普通ならば考えられない。しかし、月並みな言葉だが、彼は仲間を信じきっているのであらう。彼らが負けるはずない。どんな攻撃が来ようとも、きつと防いでくれると。だからこそ、安心して治療を開始する。両腕を倒れている仲間に向け、魔力を練り上げた時、自身の両腕の一部が消滅した。

「アル！！アル！！！！！！」

倒れている仲間がしきりに大声で自分の名前を呼んでいる。彼に向けていた両腕の二の腕の辺りから血が噴き出ている。あまりに現実

「まずは居場所の把握から始めるぞ。」

「くっそが！コソコソしやがって。気に入らねえぜ。」

「固まるのはまずい！とりあえず別れるぞ。」

「落ち着いてタバコが吸いたいもんだ…いくぞ！」

合図と共に4人がバラバラに動き始める。それとほぼ同時に琢磨の殺陣をフル稼働させた超高速の全方位狙撃が始まった。転移を繰り返しながら、逃げ道をふさぐように弾丸を放ち、また転移。歪みによつて、対象から近いところもあれば、遠い陣もある。この歪みにより、ほぼタイムラグ0の全方位、上空からも狙撃が可能になった。目の前の弾を避けたと思えば、後ろから来た弾に撃ちぬかれるような空間。僅かな判断ミスが、即死に繋がる空間で、それでも英雄達はRDを潰すために動く。

だが、視認もできず、魔力や氣の反応もしない、おまけに飛来物に攻撃の意味なんてものもあるわけもなく、殺気なんかを察知できるような距離にRDがない。こんな条件に加え、高速での全方位からの攻撃である。ある子供は、体中を抉り取られ血の海に沈み、あるタバコが似合う男は、自身の命とも言える両腕を吹き飛ばされ倒れる。残ったのは、英雄の勘とも言える何かを頼りに、直撃を避け続けた赤毛の青年と、飛び道具に対して絶対の自信を持つ剣士だけであった。

その二人も、いまや血まみれの状態であり、おまけに居場所なんか欠片もわからない最悪な状況である。

「ガトウ！お師匠！！ぜえ、ぜえ、なんなんだあいつは…どこにい

やがるちくしょう!!!」

「神鳴流が…飛び道具相手に何もできないなんて…」

「詠春：まだいけるか？」

「当たり前だ！このまま終われるはずがない！！」

「俺達は「紅き翼」。最強無敵のチームだ！あんなやつに負けちゃいけないんだ！！」

「ナギっ!!!」

生まれてから、ずっと剣を振り続けてきた。人の役に立つために、少しでも強くなるために。そうしているうちに、いつしか当代最強の剣士となっていた。飛び道具に対して、絶対の自信を持っていた。『神鳴流に飛び道具は通じない』。どんな飛び道具でも、必ず斬るという自信の表れ。

極限まで集中していたその男は、親友に向かって進む何かを感じ取れた。とっさに親友の前に体を乗り出し、刀に氣を込める。自身が今作り出せる最高の氣、それを刀に纏わせ振るう。本来ならば、感じ取れるはずもないようなそれに反応し、剣で迎撃体制を取るといふことをやってのける。英雄のうちの一人だからできることであるうか？この殺陣の中で、確実に進化を果たした剣士。

そこからは、まるでスローモーションのような光景であった。自身の最高の一振り、初めて視認できたそれがぶつかる光景が、なぜかゆっくり見れた。飛んできたそれは、意思無き弾丸。なんの魔力も氣も感じない、普通の銃弾よりはるかに大きい、ただそれだけの弾丸。それが、自身の最高の一振り、とぶつかる。

「うえええええええ。まじ酔っわこれ…しかもめっちゃ疲れるし。」

8分殺しを、最後の英雄の背後20km地点で確認する。目まぐるしく変わる視点に移動。それらにより酔っつてしまっているRD。おまけに、入り口と出口を決めていても、転移には魔力が必要である。人並み程度の魔力しかないRDにとっては、陰陽符の力があってもまだしんどい。しかも今回は、殺さないように気を使いながらの狙撃である。集中力も魔力もかなり使い果たし、大の字になって倒れこんでいる。

「こんな時こそおまえの出番だ！いけRD2号！！」

先ほど切り捨てられた式をもう一度この場に呼び出した。ボンツと音を立てて現れた式は、相変わらず憎しみの視線を琢磨に向け続けていた。

「なあ？俺言わなかったっけ？もう二度と呼ぶなって。言ったよな？なんなのお前、ほんと死ねばいいのに。」

「お前があそこでアホみたく笑ったからこんなことになってんだよ。マクギルのことまでばらしやがって。テオ連れて帰って来い。つい

でにこの映像見せて、搜索をお願いして来い。」

そういつて、自身の記憶から抽出したBOTの映像を持たせ、英雄達の近くに転移門を作る。

「もう無理。まじ魔力無い。帰り歩いて帰って来い。」

「……ちよつと一回話し合おうぜ？な？ほんとお前のこと殺せるなら殺してやりたいわ。めんどくさすぎる……。」

なけなしの魔力を使って作った転移門により、式は英雄達の近くに姿を表す。生で見るそこは、人の腕や足が転がっており、血の池がそこらじゅうにできているグロさで一杯の場所であった。

「うえ〜、これ近くで見るとグロすぎだろ……てか匂いやべえよ。」

「てめえ……」

「うおおおおおおおおお、お前まだ意識あんの！？びっくりした…びびらせんなよほんとにさ〜。」

もう死んでいてもおかしくないほど、体中えぐられ、血まみれな赤毛の青年が話しかけてきたことに心底驚く。もうほんと、なんでまだ生きてるの？って状態である。周りを見ると、似たり寄ったりの英雄達がまだモゾモゾと動いている。もう英雄というよりも、英雄

状態であるが、こんな状況でも敵意を剥き出しにしているのはさすがだな」と、気持ち悪い反面、感心してしまう。

「なるほど、これが英雄つてやつか。ぱねっすね。ところで英雄さん達にお願いがあるんだが、聞いてもらえないっすかね?」

「…ぶっ殺すぞてめえ。」

「ああ、そういうのはいらんから。黙ってお願いだけ聞いとけ。このお願いは双方利益あるぞ?」

「てめえの願いなんか聞くくらいなら死んだ方がましだ!」

「ナギツ!!!」

この死んだ方がましだという言葉に怒りを表したのが、回復を行ううとしていたアルビレオ・イマである。

「私達がここで死んだらこの世界はどうするんですか!?」
「完全なる世界」のことを知っているのは私たちだけなんですよ?」

「…ちくしょう。」

「えっと…もう終わったかな?俺の話始めてもいい感じ?」

「貴様は一体なんなのじゃ…。」

赤毛が納得してくれたと思えば、今度は伏せていたお姫様が話しに入り込んでくる。

「貴様も…話は聞いていただろう。いや、聞いていたどころではない。「完全なる世界」のことも知っておったな？それだけの力があって…なぜ何もしない!？」

「いやいやいや、なんで俺怒られてるの？何か知ってたら、何かしなくちゃいけないなんてルールはないだろ？俺からの依頼こなしてくれんの？どうなの？」

「貴様先ほどマクギル元老院議員を殺したとほざきおったな。何故じゃ!？こやつらのことを仮初の英雄とでも言うかのように笑っておったな。貴様一体この戦争のなにを知っておる!？」

「今それがなんの関係があるんだって言いたいところだが…それじゃあ話が進まないんだよな。俺頭良いから学んだわ。俺が答えてやるんだから依頼は受けるよ？まずなんで知ってるかって言ったら、俺が「完全なる世界」の依頼を受けてこの戦争を激化させたからだよ。ああ、俺が黒幕ってわけじゃないぞ？俺はただ依頼をこなしたただけだ。マクギルもその一人だっただけ。んで、こいつらのこと笑った理由か…ぷっ、お前らさ、生かされてたんだよ。わかる？生かされてたの！連合が俺のせいで財政難になっただろ？んで、帝国が強すぎてどうしようもなかったわけ。「完全なる世界」的には、戦争を長引かせたかったんだってさ。お前等強いじゃん？おまけに連合のためだ！とかいってがんばってくれるし、見返りも要求しなかったらしいじゃん？」

「使いやすかったんだってさ。うまくバランスを取るのに。お前等辺

境に逃げた時、俺追わなかっただろ？あれは帝国がつかい作戦こなすのにお前等邪魔だから、一時的に退場させるって依頼だったわけ。わかる？お前等は最初っから「完全なる世界」の筋書き通りに動かされてただけなんだよ？お前らが勝っても予定調和。辺境に逃げても予定調和ってやつさ。それなのにゴチャゴチャと…やっべ、思い出しただけでも結構くる。」

その場にいる誰一人として信じられない、信じたくないような内容がRDの口から語られる。英雄と呼ばれる働きはしてきた。財政難の連合につき、人々のために戦に出続けてきた。それが全て予定通りだったと、苦しむ人も戦いで死んだ人も全てが予定通りだったと言いつつ放たれた。

「貴様つ…どこまで腐っておる…。」

「説教はもういいかな。んで俺のほうの依頼だが…。」

式は本体から貰った映像をこの場に流す。流れてくるのは、「紅き翼」を嵌め、反逆者に仕立て上げた白髪の青年。それがRDに依頼している映像が次々と流れる。その中には、「紅き翼」を退場させて欲しいといったものや、帝国の重鎮を殺して欲しいといったものや、マクギル元老院議員を消して欲しいといったものなど、国も何も関係ない内容のものばかりであった。

「この白髪BOTを見つけて欲しいわけ。こいつ一応幹部らしいぞ？見つけたら俺が殺してやるからさ。どうせお前等はこれから「完

全なる世界」について調べるんだろ？だったら丁度いい感じだろ？よけいな戦力も使わず、幹部を殺してやるんだからさ。てか、早く決めないとお前等死ぬんじゃない？血やばくない？」

「てめえ…ぜつてえ許さねえ。この戦争でどれだけの人が苦しんでるのか知ってるのかよ！？なんでこんなことするんだよ！」

「それも別に今関係ないよな？てか俺からしたらお前らのほうが信じられねーよ。金稼ぐだけ稼いで旧世界にいけないのに。もったいなさすぎだろ。そして血やばくね？」

「ふざけんな！！この世界に住んでる人は今も苦しんでるんだぞ。」

「いやいや、だからさ。そいつらも旧世界いけばよくね？なんで戦争で苦しい思いしてまでこっちにいるんだ？」

「お前…殺してやりてえぜ。」

「とりあえず自分の体心配すれば？血やばいぞ。結局依頼つけるの？」

「…うけなきや殺すんだろ？」

「いやいや、お前らが”生死問わず”デッドオアアライブならそれでもいいけど、確認してないから今はまだかな。でも弾代と転移符代は支払ってもらおうよ。そうだな…そこのお姫様なんてすんげー美女じゃん？こんなのはどうだ？」

『現役王女様の痴態。敵国に連れ去られて…』どう？かなり売れると思うんだが。堕ち物は人気ジャンルだし、美女だし、現役だし。しっかり返済できると思うんだが？」

ニタァっと包帯だらけの顔を歪ませて笑う。寒気を通り越して身も凍るような笑い。この提案と笑いだけで、英雄達の心は完全に折れてしまった。気丈に振舞っていた王女様も、元より世界を救えるのは自分達だけであることは承知しているので、言われたい放題になるしかなく、血がでるほどごぶしを握り締めながら耐える。

「うっし、テオドラこい。交渉の時間だ。」

「痛いじゃ…歩けないのじゃ。」

「ああ？わがまま言わず歩けよ。言っとくけど背負わないからな？俺の一張羅に血がついちまう。」

「お主絶対許さないからな！童を騙しおって。何が殴りあいなんて無理じゃ。何が瞬殺されてしまっじゃ。この外道が。」

「いやいやいや、殴り合いとかまじ無理だから。見てただろ？俺殴りあいなんて一度もしてないじゃん。弱い弱い俺は、コソコソと生きていきますよ。」

「」のっ…。」

「勝手に助けて、勝手に許さないとかさ、テオドラのほうがよくばど鬼畜じゃね？だから言ったじゃん。俺なんか助けられない方がいいってさ。まあ助かったからには死ぬまでがんばりますかね。恨みのほうはよろしくな？俺は清く生きていくからさ。ぎゃははははははは。」

「

式には魔力も気もほとんど残されていない。テオドラと歩いて帰るのはめんどくさすぎるので、先ほどの転移門にテオドラだけに乗せ、自身を構築する全ての力を使って転移させ、式は消えていった。テオドラが着いた場所は、RD本体が寝そべっている森の中であった。

「琢磨…。」

「おお〜お久しぶりだね〜。どう？元気してた？」

「絶対に許さぬぞお主！！よくもあんなマネ…。」テオドラよ！無事か！！」「つ父上！」

森の中で流れた声は、ヘラス帝国現皇帝であり、テオドラの父でもある男の声。琢磨は、式が連れてくるまでにヘラス皇帝との交渉を開始していた。内容はテオドラにいくら出すかといったものである。

「あの反逆者の「紅き翼」に捕らえられていたんですよ。いや〜助け出すのは大変でしたね。」

「お主…ふざけるのもいい加減にするのじゃ！！父上！こやつあのRDなのじゃ！！！」

「知っておるよ…先ほど自分で名乗りおったわ。」

「聡明な皇帝陛下様にお問い合わせがあるんですがね〜。俺としてはこれ

以上難易度が下がるのは勘弁なので、顔や特徴を出すのは控えて欲しいんですよ。」

「テオドラは人質か…。」

「いえいえ、私は助け出しただけでございますよ？ちゃんとお返しするつもりですよ。ぎゃははははははは。」

「父上！こやつ言うことなんて聞く必要は「それから！！！」

「なぜか私の首には1500万\$という大金がかかっているのですよ。こんな薄汚い首にですよ？あなたの娘さんの首はともきれいですね。さながら宝石のように輝いております。さて、あの反逆者たちから第三皇女様を助け出した私に、聡明な皇帝陛下はいくらほど報酬をお出ししてくれるのでしょうか。あつはははははははははははは。」

聞く者全てを不快にさせるような笑いが、森の中に響きわたった。

10 撃目（後書き）

実際のプロゲーマー達はこのように時間を感じながら反応するのは無理です。ですが、反応速度はここでかかっているよりも速いです。現実世界の人間チートです。

この銃強すぎないようにも見えますが、原作で最強ネギ君にラカンさんですらまもとに反応できてませんよね。

速度があまり変わらず、魔力や気も感じさせない弾丸ならこれくらいはできるものと思います。

他の書き手様は、一話にどれくらい時間をかけているんでしょう？
自分5〜6時間かかってしまうのですが、普通なんですかね？

11 撃目（前書き）

今日キャンセルがでたのですが、乗りたいと名乗り出たのが、筆者と柔道4段です！みたいな方でして…

僕は何もなかったかのように、そのお方にお譲りしました。

11 撃目

「お前は…一体何がしたいんだ？」

「みんなそんな質問しますね。そんなのどうでもよくないですか？それを陛下が知る必要はないのではないのでしょうか？こんな下賤な人間の行動を知ったところで、陛下の大事な脳細胞を無駄遣いさせてしまうだけでしょう。私は自分の立場をわきまえていますので、ヘラス帝国の皇帝陛下の記憶に残ることなんかするつもりはないのですがねえ。」

「もうすでに貴様のことを忘れることなんぞ不可能だ…。」

「ありや？始めて話したはずなんですがね？それほどまでに、私が魅力的で、衝撃的で、記憶に残る人物ってことでよろしいのでしょうか？ぎゃはははははははは。」

琢磨とテオドラ以外、生物の気配がしないような森で、現在琢磨はヘラス皇帝とテオドラの件で交渉している。「紅き翼^{アラルプラ}」のみなさんに、自分への報告の仕方とかまったく教えていないし、それどころか獲物をぶつ壊すということまでしてしまっただが、まあ英雄だし…という理由で片付け、さっさと交渉に移した。

「父上…痛いんじゃない？」

「もう少し待っておれテオドラよ。貴様よくもテオドラに傷をつけたな…。」

「タイム！俺はさっさと連れて帰ろうとしたんですよ！いや、まじで。だけどこのジャリ…じゃなくてテオドラ様が言うこと聞かなくて…あの反逆者である「紅き翼」と一緒にいていつっちゃったんですよ。これはあれですよ…そう、しかたなく！てか、俺じゃないしね！？これやったの俺だけど俺じゃないってか。」

「なにをゴチャゴチャと…さっさと欲しい額を言え。この屑めが。」

「ありや、屑とか結構酷いこといいますね。俺って結構繊細な感じなんで、傷ついちゃったつすよ。あゝこりゃ責任とって貰わないとな。結婚でもします？」

「いい加減にしろ！テオドラの治療もしなければならぬんだ。さっさと要求を言え！！」

「いやいや、人間これくらいじゃ死なないよ？さっきだって、ゾンビみたいになっても生きてるやつらいたしさ。亜人ヒューマンについては、保障はできかねますがね？報酬なんですが…そうだ！陛下はテオドラ様に値段つけてください。その額でいいつすよ？」

「貴様っ…。」

「なんでそこで怒るの！？陛下が思う、テオドラ様の値段でいいって言ってるんですよ？今はさぞ戦争で財政が苦しいでしょう…1DPとかどうつすか？陛下は娘が帰ってきて満足。俺は飴が買えて満足。お互い大満足ってやつじゃないつすか？ぎゃははははははははは。」

「どつまでもふざけおって…。」

「まじめだよ。大真面目だよヘラス皇帝。つけるよ、てめーの娘に値段をつける。その額で返すって言ってるんだよ。さあ、娘の目の前で値段を宣言しろ。」

先程までの、ヘラヘラした雰囲気が一変。ヘラス皇帝に、重い選択がのしかかる。目の前の包帯男は、ここにきて最悪に鬼畜な選択肢を迫る。父親でいることをとるか、国の頂点でいることをとるかである。安値でテオドラを取り返せば、テオドラよりも国を取ったとなり、その逆もわかりである。

「こんなありがたい話は無いのじゃ！父上、童なんか1DPで十分なのじゃ！！」

「なるほど、自分の愛した女性と、自分との愛の結晶が1DPと… やつすい恋愛してるな。その女、俺が10DPで買ってやるうか？」

「貴様は黙っておれ！父上！迷う必要なんか無いのじゃ。1DPと言われても、父上が童を愛してくれてることはわかっておるのじゃ。」

「1DP分な。」

「いい加減黙るのじゃ！この外道が…童はなんでこんなやつを…。」

「まあまあ。後悔しても時間は戻らないよ？それより今を生きようぜテオ。」

「童を二度とテオと呼ぶな！汚らわしい。」

「うはー、逆玉失敗ってやつ？ぎゃっはははははは。んで…ど
うすんの？おっさん。」

「……………」

「あゝ、一応テオドラ様には命を救われたし？なんか俺の変わりに色々背負ってくれるらしい？3割引で譲ってあげるよ。1DPの3割引っていくらだ？計算できねーわ、ぎゃはははははははははは。」

「父上！こんなやつ言うことに耳を貸すこと無いのじゃ！童は国のためなら命だって惜しくないのじゃ。」

「あゝでも…1DPの3割引で渡すくらいなら、AV業界にでも殴りこむか？あの王女様でもいいけど、こつちもこつちで需要はあるだろ。純情系でいくか、褐色を活かしてロリビッチな感じでいくか…AVでも死ぬわけでもないし、依頼は達成されるしな。」

「どこまで…。」

「まあ冗談ですよ？おっさん。ちゃんと言い値で返します。そろそろお値段つけてもらえないっすかね？あんま引き伸ばされてもダルいんすけど。」

「……………」

「父上…童はわかってるから大丈夫なのじゃ。」

「な〜んか迷ってるようなら、軽く傷物にでもしちやいます？クレームつけやすいでしょ？これ！傷ついてるじゃない！！傷ついてるんだから安くしてよね！みたいな。」

懐からコレクションを一つ取り出す。取り出したのは、妙に曲がったナイフ。このナイフ、一 Gurkha グルカナイフ knife という名前で別名をククリ刀という。大分昔に、一部の地域の白兵戦で使われていたナイフである。達人が使えば、余裕で無双が可能という物騒なナイフというより小刀の部類に入りそうなものである。あたりまえであるが、琢磨はまったく使いこなせはしない。コレクションの一つとして、なんとなくカッコイイからもっているような一品を取り出し、テオドラに向かって歩き出す。

「っ！何をするつもりだ！？」

「いや…話の流れでわかるでしょ。1DPって言いやすいくらいまでいきますね。つっても、どれくらいやればいいのかわからないな。」

「よせ！わかった！払う。払うからよせ！」

「いくら払うのかを聞いてるのに…俺より頭悪いのはまずいとおもいますよ？勉強のしなおしを提案します。それじゃ〜いつてみますか。」

「やるならさっさとやるのじゃ！お前なんか全然怖くないのじゃ！」

「すげーなー。生まれがたまたま皇族だったってだけで、ここまで強くなれるものなのか。俺だったらちよつと考えられないな。てか、やるならきれいに解体しないと…健康な臓器なんか、すげー大金になるもんな。解体とかしたことねーや…まあ、なんとかなるつしよ。」

「貴様は命をなんだとおもってるんだ!!!」

「命か。すげー重いものだと思うよ？だって、その人は世界で一人しかいないわけだしね？でもさ、だからこそ…。」

「金になるんだろ？」

一瞬考え込むようなしぐさをし、すぐさま笑顔で言い放つ。ニタァつと、万人が嫌悪感を隠せないような笑い。包帯で、右目と口元しか見えていないような状態ですら、笑顔と簡単に判断できるような腐った笑い。見たもの全ての心をへし折るような笑い。もう、皇帝はなんで自分がこんなに迷っているのかすら思い出せないであろう。金を支払うという選択肢しか与えないような、本能で理解できる笑いを向けられ、皇帝は完全に折れた。テオドラのほうといえば、先ほどまでの威勢がまるで消えており、震えながら必死に手を使って後ずさっている。

「ち、父上…。」

「払える限界まで払う…だからテオドラを返してくれ。」

「まじで？でもいいんすか？たった一人のために国を犠牲にして…トップとしてやばくない？」

「頼む…テオドラを無事に返してくれ。」

「いやいや、ちゃんと返しますよ？てか、テオドラ様震えてるじゃん。大丈夫？」

「ヒツ…い、いやじゃ…こないで…。」

「ん？なんで急に泣きそうになってるの？威勢がよかつたり泣きそうになつたりと、忙しいですね。」

本人は、別になんとも思っていないが、すでに価値観などは常人とかけ離れている。思考回路が完全に人間のそれではなくなっている。笑顔は心を表すと、昔誰かが言っていた気がするが、まさしくその通りではなかるうか？自分の笑顔は、鏡でもない限りは見ることはできない。琢磨は鏡を頻繁に見るような男ではないのは、言うに及ばず。

だから気づかない。自身の笑顔がどれだけ歪んでいるのかを。万人の心を、根元から叩き折るような、何ともいえない恐怖に駆られる笑顔の人に向けているとは思っていない。どんなハツタリも、この笑顔の前には真実になる。そう本能で理解させるような笑顔。急に態度が変わって、？状態になるも、まあいつかと考え、話を続ける。

「ああ、それと…この傷だらけの顔と体を知ってるのは、ここにいる2人を除けば「紅き翼」だけです。くれぐれも、これ以上増やさないでいただきたいんですが。」

「わかった…約束する。金も払えるだけ払う。だからテオドラを…。」

「もうそれ前フリにしか聞こえないんだけど？返すって言うてるじやん。急に態度変わりすぎだろ。それともなに？そんな前フリを繰り返してさ。バラしてほしいわけ？なんか脅してみたいだなこれ。」

「よせ！もう何も言わない。交換場所を指定して欲しい。」

「皇帝陛下呼び出すとか…俺TUEE。んじゃあ湖まで来てくれ。俺とリンクしてある湖な？わからなければ、調べて来い。そこにテオドラ置いておくからさ、金だけ置いて連れてっていいよ。金額は聞かないでおくわ。ちなみに、結構血でてるから早めにこないとやばいかもね。」

「悪魔め…すまないみんな…。」

「ん？みんなって帝国民のこと？だいじょーぶ！おっさんはかなり支持されてるらしいじゃん。戦争に行くやつらも、あんたと国のためならタダで死んでくれるだろうさ。」

「貴様とはもう二度と言葉を交わしたくない。金の用意をするから、通信を切らせてもらう。」

「おっけー。まいどあり。またのご利用おまちしております。
ぎゃははははははは。」

「すばらしい。帝国万歳！何度でも言おう。帝国万歳！」

あの後、何事もなく皇帝は金を置いてテオドラを連れて帰っていった。自身の娘の大切さを刻み込むかのように強く抱きあい、湖を一瞥もせずに消えていった。残った金を見ると、まだこんなあるの？といたくなるほどの金。

具体的に言くと、連合での出撃15回分前後になる大金を、娘のために差し出してきた。

「はあ〜プライドってやつなのかねー。ばっかだな〜、1DP差し出して、帰ってお菓子と玩具でもあげるときゃ子供なんてなにも気にせず懐くのに。これで父親でいられるってやつ？意味不明ですな〜。」

2度の生涯を通じて、絶対に理解することはできないであろう感情。そういえば、昔は母親が大好きだった気もするな〜と、少しセンチメンタルな感じになるが、それも束の間。目の前の大金を見て、そんなセンチメンタルな感情は大金という名の大型トラックに轢かれてグシャグシャになった。

「これで欲しいものが買える。準備もしてあるし…そろそろ報告がきてほしい。てか早く来い。今すぐ来い。」

そして現在は、あれから3日後。この戦争で稼いだ金の大半を使っても手に入れたいもの。その手に入れたいものを、手に入れてくることができそうな人物を情報屋を使って探させていた（脅して）RD。まあ、手に入れることができそうだからといって、おそらくやってはくれないだろう。今琢磨が欲しいものは、金なんぞいくらだしても絶対に手に入らないもの。

もちろん、普通に手に入らないものを手に入れようとしている。はつきり言わなくても、これが見つかると即死刑レベルの、超重要アイテム。これを手に入れることができる実力者を探させている。

むろん、リスクに見合うだけの金は支払うつもりである。ゆえに金にこだわって生きてきた。仕事には、それに応じた対価が支払われるのは当然。踏み倒すなんて事は、絶対にあってはならない。こんなのは、小卒ですらわかるものである。サービス残業なんてものは、絶対に認めない！

「待たせたなRD。」

「遅くね？俺我慢苦手なんだが…。」

「ま、まっつてくれ！ちゃんとそれに見合う者たちを選んで、探し出したつもりだ。」

「ふむ、まあいつか。その後ろにいる10人がそうか？」

湖に一人の男が現れ、RDを呼び出す。それを皮切りに、ぞくぞくと人が集まり、遂には情報屋を含め11人の大所帯となった。

「ごころうさま。俺は働いたものには対価は支払われるべきだと考えている。少なかつたら文句を言ってもいいぞ？ ぎやはははははははは。」

転移陣があらわれ、アタツシユケースがいくつも情報屋の目の前に現れる。情報屋の男は、命を助けてくれればいいとすら考えていたので、頭の中が真っ白になっている。しばらくして、アタツシユケースを開き、中を見てまたもや頭の中を真っ白にする情報屋。フリーズしたままで、やっとの思いで言葉をつむぎだした。

「こ、こんなに…?」

「ん？不満？」

「い、いや…20億D Pだと…?」

「『20!!?!?』」

「一人2億で考えたんだが…もつと見つけるの苦労したか？」

「とんでもない！もらっていいのか？」

「もちろん。後ろの10人は安心してくれ。お前らにはその倍以上支払うことを約束しよう。」

さらつと、とんでもない額を情報屋に渡すRD。RDの依頼料が基本的に法外なだけで、他の人間ではまずお目にかかれないような大金を普通に情報屋に渡す。後ろにいる10人は、実力があるから連れてこられただけで、なにをこなすかは何も聞いていないが、20億DPの倍以上の額を支払うと約束され、なかば呆然としている。

「失礼、RD殿。」

「ん？どした？」

「始めまして。私は、ボスポラスのカゲタロウ。噂は聞いているよ。良いものはないがね。」

「そつすか。んで？そのカゲタロウさんは何か言いたそうな顔だな。」

「我々に何をさせるつもりかはわからないが：はつきりいつて信用ができない。あなたほどの男なら、依頼を達成した瞬間に、私達を殺しかねない。ここにいるものたちは、私を含めそれなりに名が通っている者たちだが、あなた相手ではおそらく殺されて終わりだろう。まあ、噂で聞いただけだからわからんがね。」

「ふむ…噂なんて信じなくていいよ…じゃあこうしよう！先に支払ってやる。そして、それを隠す時間までくれてやる。そのかわり、俺の欲しいものを1週間以内にここに持ってきて欲しい。」

「…なにをさせるつもりだ？」

「まあまあ、まずはこれを受け取れ。俺からの依頼金だ。」

今度は、10人の目の前はかなり大きめのアタツシユケースがいくつも召喚される。先ほどの情報屋のサイズで20億DP。それよりも明らかに大きく、数も多いケース。腕の立つ10人は目を見開いて驚く。

「一人50億。これで命を賭けてもらう。これほどの依頼はないだろう？お前らは、大なり小なり命賭けてここまでの実力を手にして名を売ったんだ。」

「50…。」

「すげえ…。」

「本物かよこれ。」

「…RD殿。我々に何をさせたいか、いい加減教えて欲しいんだが。」

「おっし。みんなやる気になった顔になってるな。とりあえず、俺からリーダーを決めさせてくれ。実力とかはわからないが、カゲタロウにリーダーをやってもらう。異論は？」

「…」
「…」
「…」

「よし、期限は今より1週間。金を隠す時間を含めてだぞ？それを過ぎた場合…てめーらはそれなりに後悔することになる…とおもっよ。」

「…依頼を。」

「おーけい。したら俺からの依頼だが…世界に数本存在する『世界樹』。どれでもいいから一本まるまるここに持って来い。」

「……なっ!!?」「」「」

世界樹。莫大な魔力を内包する、神木とも呼ばれる木である。それが内包する魔力は、人間なんかは言うに及ばず、魔力だけで見れば、ハイ・テイライトウォーカー真祖の吸血鬼や、古龍龍樹をも凌ぐと言う神木である。

「ふざけるな!お尋ね者どころじゃすまないぞ!!」

「何を考えてるんだ!?'世界樹』を取って来いなんて…いかれてやがる。」

「俺達に死ねと言うのか!?'」

「…RD殿。この依頼は断らせても」「ああ、もうお前らの命は買ったからな?後は命令したことをこなしてこい。」「」

「大丈夫だ!『世界樹』を切り倒してはいけないなんて法律は存在しない!!しらんけどさ。胸を張って取って来い。」

あいつは頭がイカれてる。RDの噂で一番最初に聞く言葉は間違はなくこれであろう。噂で幾度となく聞いた。その所業も全ては所詮

噂。噂には、総じて尾ひれがつくものである。ここにいる10人は、この世界でもかなりの実力者達である。10人でまとめてかかれれば、「紅き翼」とすらいい勝負をするであろう。

だからこそ、できることとできないことの区別がある程度はついてしまう。ゆえに、目の前の存在が信じられない。噂が全て当てはまっても、なんらおかしくないような男。無論、『世界樹』に関しては、この世界の人間からも法律からも手厚い保護がなされている。当たり前すぎるが、ばれたら終わり。この世界全てを相手取ることになる。

「自分で行けばいいだろう。」

「姿晒したくねーもん。あんなもん持つてくるような魔法しらねーし。」

「噂では聞いていたが…間違いなくあなたはイカれてる。」

「ちなみに次に行かないって言ったやつには消えてもらうから。お前らはもう俺に買われたんだ。後は支払った分働いて来い。これは正当な対価だろ？50億だぜ？「ゴミ箱」の連中なら泣いて飛びつくぞ。まああいつらは自爆しかできないからあれだけどさ…うん…。」

「冗談じゃねえって言ってんだよ！俺は行かねーぞ。悪いが降ろさせてE」

「「「「な！？」「」」」

10人いれば、「紅き翼」とも対等に戦える戦士達の内の一人。R
Dの言ったことを守らなかつた亜人の戦士の首から上が消え、けた
たましい血飛沫をあげて崩れ落ちる。この世界でも有数の実力者で
ある彼ら。その彼らが、誰一人反応できなかった。今までに、色々
な命がけの場面で戦ってきた戦士たちですら、まったく反応させず
にこれだけのことをする。

世界最高の殺し屋。『存在して存在しないもの』の二つ名。言い得
て妙だと、恐怖に駆られ、その反面感心すらしてしまう残りの9人。

「さて…50億浮いてしまったわけだが。別にお前らにはあげねー
ぞ？これはあいつにあげた金であつて、お前らにはもうあげただろ
？ボサボサせずに、さつさといけよ。これ以上人数減ると、大変に
なるだろ？」

もう乾いた笑いしかでてこない。今殺した男のことなど、微塵も気
に留めず、余つた金のことについて考えるRD。他の9人は、誰も
言葉を発しないまま湖を後にした。

11 撃目（後書き）

ほんと…俺ネギま好きですよ？特にテオとかアリカとか好きです。

これはなにかの間違いなんです。主人公の台詞だけすらすらでてくるとか、きつと疲れてるだけだと思っんです。

決して、FPSで培った煽り文化が活きているとか、そういうことじゃないんです。

よくご感想で、歪みねえ主人公と人気のRD君ですが、筆者はもう自分で何を書いているのかよくわからない状態です。

浮かんだ台詞を片っ端から入れている感じですね。一周回って歪んでいます。末期です。

12 撃目（前書き）

回り道もしましたが、筆者が本当に作りたかった銃が作れました。ポルトアクションは唯一つの正義。やっぱり一撃に全てを込めるのがかっこいいよね。見る人が見れば見劣りするかもしれないが、筆者はこれが作りたかったんです。今回は普通の話です。たぶん普通です。

12 撃目

「RD殿！RD殿！！」

「こんな真夜中に誰だよって…カゲタロウ先輩じゃないっすか。どうしたん？」

「約束の品だ。確認をして欲しい。」

「まじでもってこれたの！？すっ」。

依頼をしてから一週間。諦めて金の回収にでも向かおうかと思っていた矢先に、リンク先から声がかかる。琢磨ですら目を奪われる光景。自身とリンクする湖に、ありえないほどでかい樹が聳え立ち、わずかに発光している。時がたつのも忘れるような神秘的な光景に目を奪われ続けていたが、焦っているような声がかかり、現実世界に戻される。

「これから私は潜る。もう二度と呼ばないでくれ。」

「他のやつらどうした？逃げたのか？」

「とつくに死んだ。持ってくる最中に次々とやられた。あそこいた中で生きているのは私だけだ。」

「さっすがリーダー。やることが違う。そこに痺れる！憧れるう」

「…！ビュービュー」

「ふざけるな！もうまとも生きていくことは無理だ。外にすらでることができないかもしれぬ。」

「まあ今までもまともとはいえない感じだったろ？10年もすりゃみんな覚えてないって。10年で50億だぞ？なかなかつまい話だっただろ？」

「くそっ…こんなところにこなければ…。」

「まあ、裏じゃ間違いなく有名になるわな。そのイケメンな顔も、近いうちに知られるだろ。仮面でもつければ？俺もそうだが、意外といけるもんだぞ？」

「仮面か…考えておこう。」

「それから、カゲちゃんを殺してくれとか、そんな感じの依頼がきたら持ってきたやつ殺しといてやるよ。どうだ？いける気になってきたんじゃない？」

「そんなことではどうしようもないほど取り返しのつかないことをしてしまった…。」

「まあ大変だろうけどがんばれよ？」

「白々しく言ってくれる。いつか殺してやりたいくらいだよ。」

「おう。探し出してみ？その時は、精々華々しく散ってやるっじゃないん。」

「そろそろ追っ手が来てもおかしくない。私は潜ることにする。」

「『世界樹』まじ助かった。あんた「アラルブラ紅き翼」よりすごいんじゃない？」

「だといいのだがね。」

「いやいや、俺が言うんだから自信持つとけ。最後に一つ。この『世界樹』はどっからとってきたやつだ？」

「？そんなことを聞いてどうする？」

「んにゃ、俺にとって必要な部分は少ないし、そこだけ取ったら返してやるうかなくてさ。」

「それで私の罪が少しでも減ればいいのだがね。アリアドネーから取ってきたものだ。」

「おおう。いいチョイスだね！」

「どこの『世界樹』を取ってこようが、世界を敵に回すことはかわらない。」

「あははは。カゲちゃんほんと冷静だな。まあまた会えることを願ってるよ。」

「私は二度と会わないことを願ってるよ。」

そう言い残してカゲタロウは影の中へと消えていき、残ったのは、

月夜に照らされながら僅かに発光している巨木だけであつた。ニヤニヤが止まらない。AWPが相棒ならば、これから作り出す物は憧れ。
さっそく転移で湖に飛ぶ。間近で見ると、感動は更に増す。首が痛くなるほど見上げないと、上まで見ることができないほどの巨大さ。期待をはるかに上回るほどの膨大な、太刀打ちしようとすることが自体が愚考であるほどの、圧倒的な魔力量。樹の中でも、とりわけ魔力がある場所を選定する。

「ここかな？なんかここだけすげー魔力あるわ。貯蔵庫的な場所か？」

見つける。おそらく、溜めた魔力を貯蔵している一部分。一部分といても、巨木の中での一部分なので、結構な大きさになる。懐からGurkha knifeを取り出し、解体していく。琢磨の^{イコールスピード}程度ではおそらく傷つけることはできないが、【絶対等速】は何気に応用力が広く、Gurkha knifeをゆっくり振り下ろしつつ、能力を発動すれば、ミスもなく解体が可能である。かなりの巨木なので、時間はかかったが解体を終え、貯蔵庫を取り出す。

「フハハハハハ。まじやばい！これはやばい！俺が神だ！！」

テンションが上がりすぎて、わけのわからないことを一人で叫ぶ。取り出した塊は、一般人が見ても何かあると思わせるほどの、神秘性が高いものである。一応魔法使いにも当たる琢磨の感動は、何かあると思わせるどころではない。英雄すら目の当たりにしたが、こ

れはそんなものでは済まない。否、比べる対象にすることすらしてはいけない。それほどの神秘と魔力の結晶。世界が生み出した奇跡と言っても過言ではないもの。それだけ言っても、まったく褒め足りないと思わせる四角い樹の塊。

「さっそく製作に入ろう！つとおもったが…。」

目を落とす。解体するために、根元からなぎ倒し、解体の時に邪魔な部分を片っ端から斬って捨てた残骸が目の前に広がる。一応、カゲタロウ君にあんなことを言ってしまった手前、放置はな〜と考え、適当な大きさに『世界樹』を解体していく。

「まあ焦らなくても、時間はあるさ。先にこいつを返してあげよう。」

後日、アリアドネーに100近くにばらされた木片が届くこととなる。誰が見ても、奪われた『世界樹』だと判断できるほどの巨大な樹。一言”もういらないのでお返しします。”と書かれた紙と共に事情を知らないアリアドネーは、激昂して犯人を追い、カゲタロウは更に厳しい状況におかれることとなる。だが琢磨は、約束を守つたとホクホク顔で銃の世界に入り込み、外のことなど一切気にせず、黙々と作成を始めた。

あれから半年以上たち、琢磨は一つの芸術を作り上げた。自身が憧れた唯一人の人物。その人物が使っていた狙撃銃。モシン・ナガン M28。それを、『世界樹』と自身が持つ陰陽術の知識、『世界樹』の塊から作り出した陰陽符を持って作り出した狙撃という概念の結晶。それ自体が、まるで世界であるかのような銃。スコープもないような、いつの時代の銃だ？と思わせるような風貌。陰陽符が適当に張られている中でも、ところどころ顔をのぞかせる木のフレーム。

向こうの世界で、まるでゲームでもやっているのでは？と思わせるほどの戦果を、現実の戦争で叩き出した”白き死神”。琢磨が、唯一ゲームにこの人がいたら勝てねえと思わせるほどの天才が使っていたその銃。それを、『世界樹』を使って作り上げた。

無論、そのままだとこの世界では3流にしか通じない。AWPに施した陰陽術を使った改造を、最高の陰陽符を使って施した、制作費500億円以上の神から貰った知識の結晶。サイズはまんま”白き死神”が使っていたものと同じ。違うのは、適当に陰陽符が張り巡らされていることだけ。音も、反動も本物と一緒に。リロードはボルトアクション、装弾数はたったの5発。使用弾は7.62mm x 54と、前まで使っていた妖銃と比べると、どう考えても見劣りするスペックのM28。

求めたのは速さ。誰も避けることはできず、反応もできず、撃たれたことすら気づかない最高の一撃。余計な破壊痕もなにもない、狙った物の狙った場所のみを絶対に貫く一撃。すべてを賭けて作り出した古臭いそれは、初速280km/sという、ありえない速度で狙った箇所のみを貫く最高の狙撃銃となった。

「ダヴィンチ？ピカソ？はっ、あんなのは2流だね。これが！これこそが最高の芸術だ！！あっはははははは。」

何度見ても美しい。1.3mほどに全てを収束した金と知識と渴望の結晶。誰よりも早く、何よりも早く頭を打ちぬくことに全てを注いだ兵器の終着点。相棒と憧れを手にし、夢心地で愛でていた時に通信が入る。

「おい。」

「ん？おお！お久しぶりじゃん。」

湖の方に目を向ける。そこにはかつて完膚なきまで叩きのめした英雄達が集結していた。全員が全員、ゴミを見るような目を湖に向けている。その中でも、話しかけてきた赤髪の男、金髪の王女様、へし折ったはずの刀をなぜか持っている剣士の目は、もはや言葉では形容できないほどの物となっていた。

「どした？依頼？」

「てめえ、自分で依頼しといてそれか？」

「ん？ああ〜！！！！そうだった。BOTフヘイトの居場所わかったの？」

「忘れてたのか…?」

「最近忙しくてさ。なんか思い出したらイライラしてきた。」

「…まだあんなことしてんのか?」

「あんなこと?」

「とぼけんじゃねえよ!戦争で色々やってたことだよ!」

「いや、依頼は結構あったけどシカトしてたわ。ちょい『世界樹』使って色々やってた。」

「やはり…アリアドネーの事件は貴様がやったのか。」

「おお、王女様もおひさ。後、やったのは俺じゃないぞ?」

「またそのような言葉遊びを…。」

「まあそんなこと言われても事実だしな。んで?場所どこよ。」

「…「墓守り人の宮殿」だ。もうすぐ戦争が始まる。」

「まじで?聖地の最奥じゃん。お前等踊らされすぎだろ。戦争の原
因の場所で作戦とか立てられてたのか。なめられすぎ!ぎゃっはは
はははははは。」

「……。」

「だんまりかよ。つれないね。てかもうそれだけわかればいいや。」

早く帰れよ。」

「…この戦争でこの世界の行く末が決まる。」

「うえ？」

「あやつらはこの世界を無に帰す儀式を行おうとしておる。そのための準備時間に貴様を使っていたのじゃ。」

「ほえ〜。」

「くやしくないのか！？貴様は私達に言いおったな？手のひらで踊らされてただけだと。貴様も同じように踊っていただけなんじゃぞ！？」

「いやいや、無理あるんじゃない？依頼なんてそんなもんだろ？金払うから手のひらで踊れって言うのと同じことだもん。」

「この世界を消すのに使われておったのじゃぞ！少しは罪悪感が沸かぬのか！？何億の人が苦しんだと思っておる！苦しむだけならまだ救いはある。これで負ければ終わりなのじゃぞ！」

「仮に俺に罪悪感があつたとしてさ、どうして欲しいわけ？」

「私達と共に戦え。」

「ん？普通に依頼くれれば、その通りにやってやるけど？」

「…依頼ではない。」

「まさかタダ働きしろって!？」

「罪悪感が少しでもあるなら、戦争に出て一人でも多くの命を救うのじゃ!それだけで許されることではないが、少しでも罪を償えはする。」

「タダとか…。んじゃあ、罪悪感ねーわー。超ねーわー。」

「…もう一度言うぞ?この世界が消えてなくなるかもしれないんじやぞ?殺した人たちの分、少しでも背負って戦おうとは思わぬのか!？」

「ああ、大丈夫。DPはもうほとんど残ってないから。後は\$だけしかないから、特に問題はない。」

この言葉をアリカ姫が理解できたかどうかは定かではない。仮にも自分が今住んでいる場所である。それが消えるといわれているのに、金も使いきったからどうでもいいと切り捨てられた。一人で「紅き翼」を圧倒できるほどの力。それを味方につければ、勝率は大きく上がるであろう。こんなやつに頼むなど、吐き気がするような行為であるが、この世界を思うアリカは説得を試みる。

結果としては、惨敗どころではない。もう言っていることの意味を理解するのに時間がかかるレベルの発言。どれだけ壊れれば、これだけの思考になるのか。もう今話しているのが人間なのかどうなのかわからなくなる。

「姫さん。こいつになに言っても無駄だぜ。」

「その通りですね。あなたの言葉を聞いていると吐き気がしますよ。」

「ひつでえ言われようだな。でもさ、そんな不思議なことでもないと思うんだよね。タダで死地に行けって言ってるわけだろ？そりゃあ抵抗するでしょ。」

「貴様：あれだけ好き勝手やっておいて、自分が死ぬのが怖いと言うのか？」

「ん？だからさ、金さえ払えば雑魚狩りだろうがなんだろうがやってやるって。兵士ですら金もらえるのに、俺がもらえないのおかしいだろ？」

「償う気はまったくないのか…？」

「償うってなんだ？俺が泣いて謝りながら死ねば死んだ人が浮かべれるとか本気で考えてるのか？だとしたらお前等俺より頭悪いだろ。大体お前等だつてそうじゃねーの？踊らされて殺しまくったわけだけど…まさかとおもっけどさ、ぷっ、心の中で懺悔しながら生きていれば、俺よりはましだとも思ってるのか？」

「「「……。「「「」

「ぎゃはははは。かわらねーよ。俺もお前らも同じ人殺しだろ？お前等は俺を見て、こんなやつよりは俺のほうがましだとも思ってるのか？頭悪すぎだろ。人のこと腐つてるとか屑だとか言ってるけどさ、そんな思考回路のやつよりは俺のほうがよっぽどまともだと思っけどな。はつきりいつてやるのか？お前等頭いかれてるよ。背負って生きるとかわけわかんねーことほざいてるけどさ。そんな

もんお前らが自分を正当化するための言い訳だろ？」

「だまれ…。」

「俺はそんなことは微塵も考えないよ。やりたいことやって生きるさ。俺さ、何回かお前らの出た戦争を全部見届けたことあるんだけどよ、お前らも楽しそうにしてたじゃん。自分の魔法で敵の戦艦沈めてさ。なんかノリノリで殺しまくってたよな？あれで俺よりましとか言われても説得力なさすぎだろ。吐き気がするって？その辺で吐いてこいよ同類。」

「てめえなんかと…てめえなんかと一緒にするんじゃないやねえ！！！」

「まあお前らがどんな風に考えていようが、俺にとってはどうでもいいことなんだけどな。んで、依頼するの？どうすんの？」

「誰がてめえなんかに頼むかよ。」

「そつすか。んじゃあもう消えろよ。お前らとしゃべっていると面白すぎて腹がきついんだよね。まじ英雄さんは言うことが違うわ。さすが連合の救世主！帝国のことなど歯牙にもかけず、ノリノリで戦艦落とすだけはあるね。」

「てめえが作り出した戦争だろうが！！！」

「いやっほーう。見た？見た？俺魔法一発で戦艦3隻落としたぜ？これが”千の呪文の男”サウザントマスター！踊らされて、作り出された連合の英雄だぜ！みたいなの？あつははははははは。」

「ゴチャゴチャうるせーんだよ！言いたい事あるなら出てこいや臆

病者がよ！」

「おお筋肉さん。相変わらずすげー筋肉だな。」

「さつきからゴチャゴチャとうるせーんだよてめえ。」

「なんか楽しくなってきたやつて…まあ反省はしてません。」

「隠れてしかものを言えない臆病者と俺らを一緒にすんじゃねーよ。」

「

「うはー、シンプルだけど痛いところつきますね。たしかに、その点については違うかな。」

「RDよ。」

「おお王女様。どうしたん？」

「貴様を雇う場合はいくら必要じゃ？」

「「「姫さん（アリカ様）！？」」「」」

突如、アリカ姫がありえない言葉を口にする。自身が嫌悪する全ての要素をつめたような男を雇いたいと。この言葉の意味するところは、英雄たちだけでは力が足りないと言っていることと同じ。当然、その場にいる英雄達が聞き流せるような発言ではない。

「なんで…なんでこんなやつに頼るんだよ！あんたには俺達がつい

「てるだろー!!」

「アリカ王女…私達では力不足だといいたいのですか？」

「いくらこいつにやられたとは言ってもよ。ちょっと俺らをなめすぎてねえか姫さん。」

「……。」

「(とりあえず空気を呼んで黙っておこう。)」

「RDよ…どうなのじゃ？」

「あ、ああ。そうだな…まあ連合と同じ価格でいいぞ？ただ、今まで一番でつかい戦争になるんだろ？したら10億、20億じゃ済まないかもしれないけど…払えるのか？言っちゃ悪いがあんたの国は小さいだろ？とてもそんな金が出てくるとは思えないんだが。」

「…一つ確認がしたい。貴様は、魔力や氣に頼らずあれだけのことができるのか？」

「ふむ、その刀男からでも聞いたのか？そいつだけだもんな、まともにあれに反応したのは。まあポツキリ折られてたけど。どうしたんだ？その刀。」

「……。」

「しゃべりたくもないってか？嫌われてるね。」

「どうなのじゃ？」

「ん？できるね。単純にあの攻撃だけならできるよ。」

「そうか…この戦争が終わった後に、依頼を受けて欲しい。」

「おっと、まじか。てか戦争の後？まあ、金の用意があるなら受けるけど。」

「おい姫さん！俺らがなんとかしてやる。だからこんなやつに頼るのはやめてくれ！！」

「アリカ王女、戦争が終わった後とはどういうことですか？」

「…話はこれで終わりじゃ。」

「あいよ。お待ち申しております。ぎゃははははは。」

王女は、周りの男達に問い詰められるも、終始無言のまま足早に去っていった。英雄達は、全員納得がいかない顔をするも、何もしゃべらない王女を見て諦め、同じく去っていく。

「意味がわからないな。まあいいや…覚悟しろよBOT。この最高傑作で最初に撃ち殺してやる。」

握り締めるのは古臭い狙撃銃。戦争が始まるのは「墓守り人の宮殿」である。遠くね？と思いつつも、最近忘れていたこのイライラをぶつけるため向かう。世界がどうなるうと知ったことではない。B

OTへの報復のため、準備を終え自宅を後にした。

12 撃目（後書き）

なんか説教はいつてますね。そろそろ戦争終わりそう。原作開始どうするかな…。カゲタロウさんはドンマイとしかいえません。

13 撃目(前書き)

PV50万、総合評価3000を超えました。
なんかよくわかりませんが、みなさんいつもありがとうございます
!

13 撃目

「ああ、ルームサービスを頼みたいんだけど。なんか適当なカクテルとウォッカとコーラ持ってきて。それと適当なつまみお願い。金に制限かけないから、いいやつ頼むよ。」

空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』で戦争が始まると教えられ、琢磨は現在、その1万メートル以上、つまり普通の大地にあるホテルのスイートルームで一人くつろいでいる。琢磨の視界とWHは効果範囲20km。2万メートルまでなら上空を網羅できる。ぶつちやけ、雲の上に存在しようが、まったく関係ないのである。新たに手に入れたモシン・ナガンにより、着弾のタイムラグもほぼ存在しなくなり、わざわざ空中都市まで行く必要性を感じないので、こうして地に足つけて戦争を見届けている。

「連合側でたら、いくら貰えるんだこれ。もったいね。」本気出せば1億\$以上貰えそうだな。数多すぎてわけわからん。」

「お待ちせしました。ルームサービスです。」

「はいはい。今開けます。」

頼んだルームサービスが届く。せれぶりていな感じがするカクテル、戦争には酒だろ？とウォッカ、これなら確実に飲むことができるコーラというよくわからない理論のもとに選ばれたチョイス。配膳してきた女性はなかなかの美人で、テンションは3割り増しであ

る。

「うはー。美人なおねーさんだ！ラッキー」

「こちらがご注文頂いた物でございます。」

「うんうん、そんなことより今夜どう？」

「大変申し訳ございませんが、仕事が残っておりますので。」

「そんなのどうでもよくね？どうせ客なんていないしょ？」

いきなり気持ちの悪い、全身包帯で包まれ右目と口元しか見えないような男に言い寄られるも、プロ根性で表情を崩さず冷静に対応する美人スタッフ。だが、琢磨も食い下がらない。確かに、今は戦争中。こんなことをしている間にも、上空では世界をかけた戦争が繰り広げられている。

ここ何ヶ月かで、「^{アラルブラ}紅き翼」の疑惑も晴れたらしく、彼ら英雄を筆頭に、この戦争を終わらせるために裏で操っていた組織と戦争をしている。そんな状況の中、ホテルに泊まるうなんて客が多いはずもなく、現在は客が琢磨を除いて数人ほどしかいない。

「大変申し訳ございませんが…。」

「あちゃー、ふられちゃったってやつか。残念だなあ。まあいいや！これチップね。」

「こ、こんなに!?!」

配膳したスタッフの手に握られているのは10万DP。スイートー泊並の値段を、配膳しただけで手渡された。女性は当然困惑する。いくらなんでもこれだけのチップは受け取れないと返そうとするが、目の前の包帯男は笑いながらそれを拒否する。

「もらつときな。どうせDPなんて必要なくなるかもしれないだしな。」

「どういう意味ですか?」

「そのまんまの意味だよ。あつははははは。んじゃあ配膳ありがとね。次もなんか頼むとしたら指名しちゃうかも!じゃあね。」

ボタンつと扉が閉じられる。女性は男の言っている意味がわからず、呆然と10万DPを握り締めていたが、しばらくして仕事に戻っていった。琢磨は運ばれてきたものをテラスに運び、リクライニングチェアを倒し、横になりながら空を見上げて索敵に入る。

「てか数多すぎて、^{フエイト}BOTどこにいるのかわからね。撃ちてえ、けど見つからね。イライラする…とりあえず…。」

手に取るのはウォッカ。戦場に酒は付き物でしょ!と頼んでみたウォッカ。100年以上生きてるが、未だに酒に無縁であるので、ち

「どこよあいつ。宮殿の中か？…なにあれ？」

宮殿の外から、内部へと視線を動かす。視界分しかWHはできず、ウォールハック左目もだめになってしまったので、視界は結構狭い。探しているとひとつの部屋が目に残る。小さな女の子が、鎖で一人つながれている。無機質な目、感情がまったくないような、全てを諦めているかのような顔。そんな顔をした少女が、一人寂しく部屋につながれている。

「うひゃー、あんな小さい子を繋ぐとか…変態ですね。わかります。まあどうでもいいんだけど。」

今探しているのはBOTなので、幼女がどうなるかと欠片も興味がない。さっさと視界を動かし、BOT探しを再開する。なかなか広い宮殿内で、ようやく発見した。発見してからは早い。目の倍率をBOTのみまで絞り込む。

もはや、今琢磨の目に映っているのはBOTの体のみ。それ以外はいっさい見えないし、見る必要も欠片もない。標的が見えていて、銃の照準さえ合わせれば、確実にそこに飛ぶ。たったそれだけの、けれどもとても強力な力。その力を持ってここまでの存在となったのだ。

『解除』の合図と共に現れるのは、全てを賭けて作り上げたモシナガン。まずは弾を一発込める。カシャンという音と共に装填を完了し、備え付けの照準をBOTの一部分にあわせる。

「みいつけたあ〜。タダで死ねると思うなよボットオ。お前には俺

と同じ目にあってもらうぞ。」

ターンツという音と共に、狙撃という概念の結晶。その結晶より放たれた一撃が飛ぶ。何もかもを速さに変換した、一箇所を貫くエネルギー以外を速度に当てた最高速の一撃。おそらく、撃った音が琢磨の耳に聞こえたと感じた時には、対象に着弾しているであろう。もはや、避ける避けないの話ではない。

この一発は寸分の狂いもなく、BOTの左目を抉り取る。照準を合わせ、引き金を引いたときには当たる事が確定している弾丸。途中には、おそらく遮蔽物があるだろう。ものすごく堅い建物もあるだろう。もしかすれば、その途中に英雄がいるかもしれない。だが、琢磨には途中にあるものまで見る力はないし、仮に見れたとしても、きつと撃つのをやめることはないだろう。

その弾丸は、遮蔽物を貫き、ものすごく堅い建物も難なく突破し、たまたま一直線上に居合わせた英雄をも簡単に貫きながら、寸分の狂いもなく着弾する。

BOTは何が起きたかわからない顔をしていたが、次第に左手で傷ついた左目を覆い辺りを警戒する。琢磨はそんな様子のBOTを見て、半笑いで次の弾を込める。

「これが最高の狙撃だ！なにがその程度だ！BOTのくせにあんなめたこと言っつてんじゃねーぞ！！」

ターンツと、次の弾丸が放たれる。超速で飛ぶ死の軌跡。この弾丸は、辺りを警戒するBOTの右手人差し指を貫き、吹き飛ばす。全て予定通り。完璧な狙撃。少しして、BOTが自身の右手の指が血を噴いていることに気づき、半ば呆然としていたが、不意にWH越

しに目が合う。データを調べていたBOTだからできるわざである
うか？居場所まではばれていないだろうが、だがたしかに目があっ
ている気がする。傍から見れば、諦めて地面を見続けているように
見えるだろう。

だが、そこから1万メートル以上下にいる男は笑う。

「ぎゃはははは。間違いなくてめーはエキスパートだったわ。最
後だ、行って来いRD2号改！」

「ふははははは。私が神だ。」

「どうだ？俺と同じ景色は？」

「さいつこーだ！AWPのほうでいいから貸せ。」

「ほいよ〜。」

でてきた2号改は、『世界樹』より生成した、最高の陰陽符により
作られた、最高レベルの式紙。生成に必要な気が半端ではなく、ま
だ同時に出すことはできないが、神から貰った能力も込みで、ま
ま琢磨と同じ。解析などかけられても、死なない限りは人間で通せ
るほどの、最高レベルの式である。
それが、妖銃を受け取り、BOTに照準を合わせる。無音で放たれ
た一発の弾丸は、呆然としていたBOTの上半身と下半身を分かち、
もう一発で転移陣を敷く。

「いってくるわ。」

「お前には金かかってるんだからな？頼むから即死とかやめろよ？」
「いいからいいから。まだ足りないだろ？あ、これ返すな。」

謎の言葉を残し、2号改はAWPを置いてその場から転移をして消える。向かうは戦いの場。これで、ほとんどやられたことをやり返した。腹をえぐり、目を潰し、命であった人差し指を吹き飛ばし、まだ足りない。最後の工程を終えるため、式は英雄と大悪党が集う場へ飛ぶ。

戦場となっていた場に、一つの陣が浮かぶ。現れたのは、「紅き翼」にとつても、「完全なる世界」にとつても、邪魔でしかない存在存在していて欲しくない存在が、全員の目の前に姿を現す。

「よお。BOTちゃん。ずいぶんコンパクトになってますがどうしちゃったのかなあ？下半身はお家に忘れちゃったのかなあ？だめだぞ、学生は忘れ物の確認をしてから家をでなきゃ！」

「ふふふ…久しぶり…だね。」

「てめえ…。」

「なんかお前はいつつも傷ついてるな。」

「てめえがやったんだろっが…！」

「はあ？わけわからん。どうした急に。む？さてはそうやって治療代を要求するつもりだな？あめーよ。この前テレビでやってたしな。」

そんなのに騙されると思うなよ。あまくみてんじゃねーぞ!！」

到着して、辺りを見渡す。上半身と下半身を分断され、内臓が飛び出し直生きているというグロイBOTと、その近くで、なぜか左肩と右の太ももから血を流し、倒れこんでいるナギ・スプリングフィールドが目に入る。

BOTは、相変わらず冷静に、けれどもほとんど意識がないような状況で対応している。ナギ・スプリングフィールドのほうも相変わらず。だが、今回ばかりはなぜこんなに怒られているのがよくわからない。

琢磨は本当に意図したわけではないが、琢磨が狙撃を開始したのはすでにナギとBOTの勝負がついた後。ナギが止めをさす前に、話を聞こうとしたときに狙撃は行われ、結果的に左肩と右太ももに穴があけられた。だが、琢磨はお前のせいだといわれてもピンとこない。まあどうでもいいかと、すぐさまBOTとの話に戻る。

「てめえがそいつごと俺を撃つたんだろうが!！」

「まじか!どんまい。それよりBOTちゃんよ、無様だなあおい。どうだ?あれだけのこと言った相手にやられるってのは。テンション下がるだろ?」

「ふっ…そうでもないよ…。君ならまあいいかとすら思うかな…。」

「耐性ありすぎてつまんね。もっとこの赤毛たちみたいになつてくれなきゃつまんねーわ。」

「それに、もう儀式は終わる。この世界ももう終わりだよ。」

「そんなことは俺達がさせねー!!」

「ちよっ、うるさい。その儀式遅らせることできねーの?」

時間が止まる。あのRDが。あれだけのことをのた打ち回っていたRDが。人が嫌悪する要素を全て詰め込み、外付けでさらに付け足しているようなRDが。儀式を止めると言った。「紅き翼」の面々はもちろん、あのフェイトですら目を見開き驚いている。

「今更どうしたんだい…?君には似合わないよ。依頼かい?」

「いや、今は依頼入ってないわ。」

「…本当に今更だと思わないのかい?君はむしろ僕達側だろう?」

「お前…俺達の言うことが通じたのか!」

「ん、いやさ。スイートで一泊取っちゃったんだよね。もったいないから明日にして。」

またもや時間が止まる。意味がわからない。ワケガワカラナイ。何がどう転んだら、ホテル代がもつたいないからという理由で説得が始まるのか。「紅き翼」の面子は、完全に再起不能な状態である。フリーズからの復旧まで時間がかかるであろう。だが、感情がないかと思われたBOTが、不意に静かに笑う。

「フフフフ。やっぱり…君はいつまでたっても君なんだね。」

「上半身だけで笑うなよ。キモイよ。」

「フフツ。安心したよ。僕が言うのもなんだけど、君は絶対いい死に方はしないね。」

「だろうな」。拷問とかは嫌なんだけどな…痛いのが嫌いだし。」

「どうだろうね。僕は、一足早く地獄って場所を体験してくるよ。」

「おう。ざまあみる。だが、これで終わりにしたら俺の本体が怒るんだわ。」

「…驚いたね。君はどこからどうみても本物にしか見えなかったが…。」

「まあんなことはどうでもいいだろ。それより…。」

会話を一旦止め、2号改は懐からこぶしほどの大きさの何かを二つ取り出す。BOTにとっては、見覚えがありすぎるそれ。RDを逃す原因となったそれ。琢磨にとっても、思い入れのある物。CCOさん状態になる原因となった物。それを二つ取り出し、見せ付ける。

「やられたら倍返し。これ常識。」

「フフフ。君は…本当に君だね。」

「言い残すことあるか？聞いてやらないこともないよ。」

「儀式は止まらないよ。僕が黒幕だと思っているならとんだ思い違いだね。」

「いや、お前自分で昔幹部って言ってたからね。てかぶっちゃけそんなのどうでもいい。ゲームオーバーってやつだな。」

「…君としゃべるのが思ったよりも面白かったらしいね。関係ないことまでしゃべってしまふなんてね。」

「威力は更に上がってるこのお手製手榴弾。特にご賞味あれ。」

にたあつと笑い、ピンを抜いて起爆する。爆音、爆風、爆熱、爆炎が聖地の最奥を襲う。宮殿の一角は、完全に吹き飛び下へと落ちていく。当たり前だが、至近距離でくらい、魔力もほとんど切れている。なおかつ死にかけのBOTが生きていられるような炎ではない。BOTは、一瞬で火傷どころか消し炭となり、灰になって消えていった。消し炭になる寸前、なぜか今までになかったはずの穴が、額に開いている。本体かつと、2号改は笑う。

予想外なのは、なぜかそれを至近距離で見っていた2号改も消し炭となり消えていったこと。1万メートル以上下の、ホテルの一室で叫び声が聞こえる。

「ぎゃはははは。ざまあみるBOT！てかおまつ！なんで！？なんであそこで逃げないの？なんなの？あの陰陽符どれだけ大事かわかってねーの！？」

数に限りがあり、なにより下手したら億円単位の値段が1枚についてしまう符でつくりあげた式。その式が、わけもわからずテンションが上がって自爆したという事実。受け入れがたい。どれだけ馬鹿なのかと。式は自分の思考と大差ないので、ここまでくると自分の思考回路をさすがに疑ってしまう。

「いやいや…いくら俺でもあそこまでひどくないだろ。あれダメな意味でバグキヤラだもん。まあいいか。すげースツキリした気分だ。てかB O Tも終わらせたし…どうしょ。旧世界に逃げるかな。なんか儀式止めないとか言ってたし。てか儀式って何だよくそがつ。」

なんか色々な依頼がきていたような気もするが、モシンちゃんの手でスルーしっぱなしである。もうこの魔法世界がどうなっているのかなど欠片も知らない琢磨。当然、この世界を無に帰す儀式と言われたところで、何を言っているのかさっぱりである。

まあ、説明したところで理解できるほどの頭脳は持ち合わせていないであろうが。その儀式って言うのが始まると、この世界がやばいということだけはわかっていたので、明日まで延ばして欲しかったが、それも無理だったので困っている。この後、いつになるのかさっぱりわからないが、金を用意した王女様が依頼に来るとい話なので、いないとまずいのかな？という考えが足を引っ張る。金があるなら受けるけど？と言ってしまった手前、よけいに悩むところではある。

「うーむ、約束を破るのはよくないよねー。まあ終わりなら終わり

でいつか。てか大体こういうのはなんとかなるようになってるんだよな。スイートルームを満喫しますかね。」

上を見上げながら寝っ転がる。上では、「紅き翼」御一行と、突如現れた黒いフードの人物の放つ魔法がぶつかっている最中であった。見ているだけでわかる。あの黒フードの魔法はすさまじい。きつとボスであろう。あの英雄達が、拮抗もできず吹き飛ばされている。目の前に現れたらどうしようもないであろう圧倒的な力の持ち主だが、これだけ離れていればさほどでもない。依頼があれば1秒で終わってしまうであろう。下から見分には、まるで何かのショーを見ているような、エンターテイメント的な楽しさがあった。

「うおおおお。なかなか熱いな！特撮ものを思い出すね。がんばれ。応援してるぞ。」

一撃で吹き飛ばされた英雄達。見ればほとんどの人間が瀕死まで追い込まれている。少しだけ傷が軽かった赤毛と白髪の少年が、回復魔法で少しだけ回復した後に、黒幕へと向かっていく。なかなか熱い。RDの弾に唯一反応した剣士は、赤毛を庇ったせいかな、誰よりも重症で瓦礫に寝っ転がっている。

「おおい。俺の弾に反応したのにそりゃあないでしょ。もうちよいがんばれや〜。まあやっぱり主役はレッドなのかね〜。」

赤毛の青年と、白髪の少年が達人レベルの攻撃を仕掛けてはいるが、

なんなく捌かれ、隙を見た一撃によりホワイトはダウンしてしまつた。ホワイトなんていたっけ？とおもいつつも、残ったリーダーの証であるレッドを応援する。

「熱い！！いけ！そこでキックだ！！必殺技を使うんだ！5人の力をあわせてみたいなのとかねーの？」

押されている。こういうのは大抵、5人そろつての必殺技で終わるものだと相場が決まっているが、まず味方でまともなたてるやつがない。これもう詰みじゃね？と思いつつも、行く末を見守る。

「うおおおお。なんかすげー！！！てか最後アッパーとか斬新すぎだろ。あれじゃあ売れねえわ。なかなか熱かったけど2流の脚本だな。最後はやっぱ必殺技じゃなきゃねー。その辺わかってねーもんなーほんと。お約束だろうがなんだろうがやんなきゃいけないんだよね。」

最後はなぜかアッパーカットで沈んでしまった親玉。あそこまで盛り上げてこれかよーっと思いつつも、なんだかんだで満足したものが見れたとホクホクしている琢磨。親玉が倒れたと思えば、馬鹿でかい魔法陣が展開され始める。なんかよくわからないが、真下にいるのはちよつとまずいんじゃないかね？とおもいつつも、せつかくのスイトルームだしなーという考えが頭によぎり、葛藤する。

「いやーてかあの陣なんだよ。わけわからん。陰陽のほうに書き換

えろよくそが。どうしよっかな…寝るか。」

上空で、何万、何十万、何百万、何千万と数え切れないほどの人が
がんばっているなか、琢磨はテラスから部屋に戻り、やわらかいス
イートなベッドに体を預け、BOTへの報復を果たし、健やかな気
分で眠りについた。

13 撃目（後書き）

なにげにこいつ約束守りますよね。

約束は守るもの！という謎の理論が頭にあるんですかね。

戦争終わりましたね。これからどうなるんでしょうか。あまり期待しないでお待ちいただければと思います。

14 撃目(前書き)

ささやかな自慢ですが、筆者は50メートル走で5.8秒 100
メートル走で11秒前半くらいで走れます。結構早いです。最後に
走ったのはいつだろう…サッカーしてえ。

外道成分ないと思います。求めている人はすみません。

14 撃目

「おい！おい！！」

「ん〜…後100時間…。」

「ふざけるな！早く起きろ。時間がないのじゃ。」

「誰だよって…王女様じゃないっすか。どうしたの？あの英雄達も連れずに一人で来るなんてやるじゃん。」

「…あやつらはもう私と関係ない。お前を雇いに来た。」

「…？？関係ないって何？剣となり盾となれ！とか言ってたじゃん。なるほど。中国産だったんですね。だめだよ〜不良品見極められるようにならなきゃ。それとも最初から使い捨てにするつもりだったのかな？怖い怖い。」

「今はそんな事は関係ない。今すぐ私と一緒に来てもらう。」

「来てもらっつてどこへ？」

「オスティアに今すぐ来てもらう。時間がない。早急にでてもらう。」

ナギ・スプリングフィールドのアップーカットからの10連コンボにより、黒幕を倒し戦争が終結した。その後、気持ちよくスイートなベッドで寝ていたときに、アリカ王女から通信が入る。なぜかは

わからないが、依頼はオスティアにて行われるらしい。戦争以外で
なんかすることあるの？と疑問に思うも、とりあえず絶対に聞いて
おかなければならないことを聞くことにする。

「まあなんでもいいんだけどさ。依頼内容と金額を教える。」

「私は…この世界を救うために…自分の国を犠牲にした。」

「へ、へえ〜。それで？（質問に答えてない…。）」

「貴様もあの場にいたなら見ただろう…あの世界を覆いつくすよう
な魔法陣を。魔力を消し去ってしまう魔法陣を。あれを世界に向く
前に、我が国に向けて封印した。まもなく国の崩壊が始まる。」

「あ、あ〜あれね。いやーまじやばかったよねあれ。（あれってそ
ういう術式だったのか。）」

「もう魔力消失現象は始まっているかもしれん。貴様はそのような
ものがなくとも、あれだけのことができるのであろう？民を一人で
も多く助け出すために、オスティアに出向いて欲しい。それが依頼
じゃ。」

「それって俺危なくね？確かに攻撃とかはできるけどさ、移動とか
どうすんの？走るの？俺50メートル走 8・5秒だよ？」

「…危険がないとは言わない。だが、お主は依頼は100%達成さ
せてきたんじゃろ？私の願いも聞き入れて欲しい。」

「あれだけ言いたい放題言っておいてこの手のひら返し…さすがは

王族。てか、俺の達成率が100%なのは、俺ができそうな依頼しかしてないからだ。俺は自分の身の程を弁えてるからな。できなそうなものは全部却下。だからこそその100%だ。んでこの依頼は無理だな。浮いている島が落ちてくるんだろ？そこにいる人間助けるとかまじ無理。そんな便利な能力持つてないわ。」

「飛んでくる岩を破壊してくれるだけでも大助かりじゃ。あれだけのことができるお主じゃ。できるであろう？」

「できるけどさ…俺の力じゃ全域はカバーできないな。いや…中心に行けばできるかもしれないけどさ…こっわ。」

「ともかく、こうしている間にも民が危ない。早く向かってくれ。」

「いやいや…なんでこれだけ言っただけで俺が依頼受けるって考えてるんだ？無理だろ。依頼は拒否させてもらっわ。こえーもん。」

「な！？今度こそお主にしかできないことなんじゃぞ？お主が来てくれれば、何千何万の命が救われるかもしれないんじゃないぞ！！」

「うーん…俺って言うイレギュラーに頼ってる時点で、あんたの国は終わってるよ。本来、俺ここにいたべき者じゃないからね。てかさ、今更だけど金どうすんだ？国滅ぶのに金なんかないだろ？」

「……………」

「ありやくだんまりか。良心に訴えても無駄なのはわかりきってるだろうに。うっし、この依頼は無理だ。俺は旧世界に渡るわ。世界終わると思ってDP使い切っちゃったんだよね。まいったまいった。」

「

「…たし…じゃ。」

「あん？」

「私が報酬じゃ。」

ポカーンと口を大きく開けたまま止まってしまった。あれだけ嫌って置いて自分を差し出すといつてきた王女はさすがだと思う。民を一人でも多く救うため、自分を差し出すという行為は王族としては立派なのであろう。その回答も予想外であったが、なにより大分勘違いをしている王女の思考についていけずに呆然としてしまっている琢磨。

王女の顔を見てみると、顔を真っ赤にしながらも、大真面目な顔をして湖を見ている。これを大真面目で言えてしまえる時点で、目の前の人間も大分頭がおかしいとすら思う。

「いい感じに頭おかしいな〜お前。」

「な！？私は正常じゃ。いきなりなにを…。」

「いやさ、あんたの国に何人の人間がいるのかしらねーけどさ。あんたは自分とその国民全ての命が等価であると言ってるんだぞ？」

「ちがつ…私はそんなつもりじゃ…。」

「だってそうだろ？自分の全てを出せば、その国民の命を助けられると思ったからこそ、自分を報酬として差し出したわけだ。ちが

うのか？」

「そんなつもりで言ったわけではない！！私には、それ以外に差し出せるものがないのじゃ……。」

そういつて、心底悔しそうに王女は下を向く。琢磨としてはさっさと諦めて欲しいので、さらに追い討ちをかけるかのごとく、王女に質問を飛ばす。

「てかさ、なんでお前そんな必死になってるの？」

「必死になるに決まっておろう！民が苦しんでおるんじゃぞ！！」

「ばっかだなーお前。お前が民の何を知ってるんだ？顔と名前も一致しないような人間達をさ、なんで生まれが王族だったっただけでこんな必死に助け出そうとしてるんだ？」

「……。」

「ほら、何もいえないだろ？あんだだつて今旧世界逃げれば自由だぞ？よくわかかんねーけど王族ってストレスたまるんだろ？向こうに行けば全てのしがらみから開放されるぞ。逃げちゃえ逃げちゃえ。あんた美人だし、仕事なんていくらでもあるさ。」

「……。」

「それから、頭おかしいと思うが俺はあんた間違っていないとは思っぞ。命は平等だなんて嘘だね。笑っちまうくらい嘘だよそんなの。」

命は重いものだと思うが、それでも平等だなんて絶対ありえない。視点によって重さが変わっちゃう曖昧なもんだよ命なんて。見る人から見れば、あんた一人の方が国民全てより重く見えちゃうもんさ。

「……………」

「てか、案外これが普通なのかもな。なんかさ〜普通の人間は命は平等だつて考えてるなんて回りは言うけどさ、絶対そんなことないよな。人間なんてみんな、大なり小なりおかしなところがあるもんさ。完璧な人間なんていねーよ。俺があんたなら、さっさと見捨てて消えるけどな。せつかく美人に生まれたわけだし？楽しく人生謳歌できそうじゃん。」

「……………」

完全に黙り込んでしまっアリカ王女。一体頭の中で何を考えているのか。しばらく下を向いていたと思ったら、徐に顔を上げる。先程までの悔しさや、戸惑いの消えた顔。毅然とした、いつもの王女の顔で一言ずつ言葉を紡ぎ出す。

「…それだけか？」

「ん？」

「言いたいことはそれだけかと聞いておるのじゃー！」

「うお！いきなり怒鳴るなよ。まあ言いたいことは言ったかな。」

「ならばそつちとくるのじゃー！」

「はい？」

「お主がどう思っただいようが、そんなのはどうでもよい。私はあの国が好きじゃ。民が好きじゃ。だから助きたい。」

「うんうん。」

「だから力を貸すのじゃ。」

「うんうん…へ？」

「お主の力があれば、より多くの民を救える。いや、お主にしかできないことじゃ。」

「うんうん。」

「だから早くオスティアに向かうのじゃー！」

「うんうん…あれ？なんか途中から文が繋がってないようなあれ？」

「報酬は私の全て。それでオスティアの民を一人でも多く救うのじゃー！」

「いやいや、だからそれはさっき拒否したじゃん。」

「お主今どこにおる？」

「いやいや、いうわけないじゃん。」

「どこにおるのじゃ！！！！！！」

「うるさっ。そんな怒鳴るなよ……。どっつて……。あの最終戦があった場所から遙か下にあるホテルだけだ……。」

「今から迎えに行くから待っておれ。拒否や逃走は絶対に認めん。」

「ええ〜…ええ〜???」

「返事！！」

「う、うん……。」

「30分以内にそこへ行くから待っておれ。」

プツンツツと通信が切れる。終盤のわけのわからないやりとりのなか、絶対に俺間違っていないよね?と考えながらも、なぜかその場を動かずに、スイートなベッドで寝っ転がる琢磨。ま、まあ前向きに考えれば、割と楽な依頼で美人をゲットできるじゃんといった内容なのだし、なによりホテル名までは言っていないし来ないだろうと考え、琢磨は仮眠につき始めた。

「なにがどうしてこうなったし…。」

「空中王都の崩落拡大中！！本艦の周囲にも強力な魔力消失現象！
即席の対抗呪文塗装装甲がいつまで持つか…。」

「泣き言はいらぬ！！あと数時間持てば十分じゃ。」

仮眠についているさなか、特殊部隊のごとく琢磨をさらっていった
アリカ王女の部下達。部下達は、目の前の男がRDだとは知らない
らしく、アリカ王女から民を助けるのに絶対必要な人物だと聞き、
光速で戦艦に乗せ、現在は崩壊するオスティアを目の前に、全力で
民を助けるために動いている。ホテル名までは教えていなかったの
で、まさか見つけられると思わず、起こされたら岩が降っている
という意味不明な状況。ほえ〜と目の前の光景を見続けたとき
に、アリカ王女が話しかける。

「お主も早く動くのじゃー！」

「強引過ぎだろ…てかさ、なんで俺を殺さなかった？憎き世界の敵
なんだろ？」

「お主を殺せば、助かる民も助からん。」

「自分で一度見捨てておいてそれは偽善か？あんだこの世界のために、目の前の光景を作り出したんだろ？ひつでえな。」

「その通りじゃ。私は絶対に地獄に落ちる。じゃが、だからこそ救える命は救いたい。」

「意味がわからん。矛盾ってやつつすな。見捨てておいて、救うとか…。まあいいや」。報酬はあんたって事で間違いないよな？」

「間違いない。」

「んじゃあ適当に行きますか。俺こつみえてまだどーでーだからさ、優しくしてくれよ？ぎゃっははははははは。」

懐から陰陽符を2枚取り出す。この戦艦の周りには、魔力消失現象を抑える魔法がかけられているらしく、戦艦の周りだけならば、一応魔法を使うことはできる。『世界樹』より生成した陰陽符と、常にRDと共にある、もつとも古い陰陽符。この依頼は、妖銃のほうに適していると考えAWPの札を。もう一枚は『世界樹』より生成された符の式のもの。

2号がとんでもないものだったので、ひそかに作っていた3号。性格を少しだけいじり、従順な式になっているはずの3号を呼び出す。この符により生み出される式は、生み出してしまえば人間と何一つ変わらない。こいつならば、王都にいても中からなんとかできるであろうと考えての召喚である。

「いでよ！3号！！」

「なんていうかほんと…生まれてきてすみません。」

「……。」

琢磨とアリカの時間が止まる。お互いに式を知っているだけに、それから遠くかけ離れたものが召喚されたことに驚き、崩壊中にもかかわらず、しばらく無言で見続けてしまう。琢磨の方は、なぜ？つと疑問を隠しきれない顔をしており、アリカの方はただただ呆然としている。

「あの…その…すみませーん！」

「お、おう。よく出てきてくれた3号。さっそくだが、王都の中心辺りに行って、でっかい岩なんかを何とかして欲しい。手榴弾を背負えるだけ背負って、行ってきてくれる？」

「もうほんと…俺なんかですみません。すぐ行きますすみません。」

「う、うん…別に怒ってないんだけどさ。んじゃあ頼んだわ。」

「すぐ行ってきます。なんかもう色々すみません。」

手榴弾を封じてある符を解除し、それをもてるだけリュックに背負い、3号はさっそうと出かけていった。そもそも、飛べもしないのに、どうやっていくんだろう？と考えるも、それよりも衝撃的な何

かを見てしまったので、半ばどうでもよくなってしまふ。包帯を全身に巻いた男が、オドオドしながらひたすら謝る光景は、なかなか気持ち悪いものがあった。

「……まじか〜。」

「RDよ…。あれで大丈夫なのか？」

「どこミスったんだろ。なんだよあれ。」

「アリカ様！貧民島スラムの避難が難航してます。」

「理由は!？」

「街の構造が複雑なうえ…不法移民が多く、全住民の把握が…。」

うなだれているRDを尻目に、眼鏡をかけた少年がアリカのもとへ報告に来る。それまでの雰囲気が消え、王女の顔に緊張が戻る。琢磨の方は、そんな報告などどうでもよく、何が起きればあれが生まれ出されるのかを考え続けていた。

「わかった。ここはまかせる。」

「陛下!どこへ!？」

「貧民島には童が直接赴き、島ごと不時着させる。」

「しっしかし…。」

「（3号どうなったかな）。思考をリンクしてもひたすらすみませんって…意味わからん。」

「ゴルアアアアーツ！こんのバカ姫！」

アリカと眼鏡の少年が言いあいをしている中、3号のことばかり考える琢磨。自分なりにしようかなと考えていた時に、王女宛に一本の通信が入る。かけてきたのは、世界を救った英雄ナギ・スプリングフィールド。アリカの剣であり盾である存在。この事態に気づき、急いで王女と連絡を取ろうとかけてきた。

「やい、アリカてめえっ！！どういうこったコレは!？」

「ナギ…見ての通りだ。世界を救う代償に、自らの国を滅ぼした。案ずるな、童もいずれ遠からぬうちに地獄へ堕ちる。」

「…ッ！なんで話さなかった唐変木!!！」

「話しても無駄であろう。戦いしか脳のない主が一人で何の役に立つ。」

「くそツ…今からそっちへ向かう。待つとけてめえ。」

「ここにそなたの力は必要ない!!」そのとおくり。」

王女と英雄の言い合いに、一人の男が横から入ってくる。絶対にこの場にいるべき者ではない者。王女と一緒に行動などありえないはずの男。「紅き翼^{アラレルフラ}」の因縁の相手とも言える存在が、なぜか守るはずの王女と一緒にいる。このことに対しての動揺は大きい。

「昨日ぶりってやつかな？やあ英雄。」

「なんでてめえが…なんでそこにいやがる！」

「いやさ、王女様がお前らが使えなさ過ぎてやばいとかいって俺に泣きついてきたんだよね。ほら、俺ってば女の涙には弱いからさ。」

「ふっざけんなよてめえ。」

「まじまじ。王女様も私の全てをあ・げ・るとか言ってたし。やっぱ男って見た目じゃないよね。大事なのは中身だぜイケメン。」

「嘘ばっかほざいてんじゃねーぞ！」

「ワタシウソツカナイ。」

「おい姫さん！何とか言ってくれ。こいつこんなふざけたことしてるぞ。」

「……。」

「おい…姫さん！黙ってねーで何とか言えよ！！」

「ぎゃっははははは。だからまじだつて言ってるじゃねーか。ここからは「コスモエンテレケイア完全なる世界」の筋書きにはねーんだよ。てめーらのレールは終わった。そこで行き止まりだ。後は指加えて安全なところで見てるよ。」

「姫さん…。」

「ナギ…そなた達には世話になった。童が言えた事ではないが…幸せに生きてくれ。通信終了。」

「ぎゃははははは。あばよー英雄。飽きたら売ってやるから楽しみにしとけ。」

「姫さん！姫さん！！！」

プツンと通信が途絶える。ありえない状況に王女を呼ぶことしかできなかつた英雄との通信が終わり、本体の方も準備をしようとして戦艦の外へと向かう。

「RDよ…。」

「あん？なんか言いたいことでもあんの？」

「童の体は安くはないぞ。」

この期に及んで挑発とは頭が下がりそうになる。体分の仕事をしてみせると、あのRDに向かって吼える。国が崩壊しているさなか、

これだけの気力を保っているのはとんでもない。こいつのほうがよほど英雄に近いとすら思う。非常に面白い。これだけの人間が他に何人存在するのか。感服し、挑発に乗ることにする。

「いいねいいねー。まさかそんな言葉が出るとは…。まあみとけて。」

王女と共に外にでる。目の前には、雨でも槍でもなく、岩石が降り注ぐ異様な光景。届かないはずの民の悲鳴が聞こえてきそうな気がするほどの、悲惨な光景。あらためて外で目の当たりにし、唇をかみ締めるアリカ王女。それを何とも思わないかのように見続ける琢磨。

不意に『解除』と唱えると、目の前に馬鹿でかい銃が現れる。幾千、幾万もの人間を消し飛ばしてきた妖銃。その異様な銃を目の前で見て、アリカは息を呑む。

「それが…貴様の武器か。」

「おうよ。てめーの剣を叩き折って、盾をぶっ壊した俺の半身だ。もう半身は、この依頼にはあわないから使わない。ありがたく拝んどけよ？これ見るのはてめーが始めてだ。」

「私はこれから貧民島に向かう。…期待してよいのだな？」

「楽勝だろ。3号も到着したし…始めるか。」

3号が、中心部に到着してすみませんと思考をリンクしてきたので、準備は万端である。妖銃を構え、少しだけの時間待機する。

「（いけるぞ〜）」

「（わかりました。すみません！！！！）」

何に対してのすみませんなのがさっぱりわからないが、手榴弾のピンを抜き、上に向かって投げ始める。【絶対等速^{イコールスピード}】をかけながら、それにより、手榴弾の時間が止まり、能力をかけ始めてからの速さで浮遊岩に向かって飛ぶ。ちょうどよいところまで来たところで、能力を解除。ミサイル並の威力を持った手榴弾が岩に辺り、消し飛んでいく。でかい岩などは消しきれないが、ここからが本体の仕事である。

「まあよく見とけ。これが世界最高の狙撃らしいぞ？」

辺りに散った小さな岩を、根こそぎ弾丸で消し飛ばしていく。3号も負けずと手榴弾をばら撒く。終始一貫してすみませんを連呼しながら、ひたすら投げまくる。今オステイアの空は異様な風景である。岩が降り、下から大量の手榴弾がばら撒かれ、爆発し、小さくなって降ってくる岩がいきなり消し飛んでいるのだから。アリカはただ見続けてしまう。目の前の男がトリガーを引くたびに、音もなく民の命が救われている。仕事に対しては実に忠実に働いてくれる目の前の男。最低の外道だと忘れてしまうような、芸術のような狙撃術。

しばし見とれていたが、島ごと落ちるのはいくらこの男でもどうすることもできないであろう。貧民島をどうにかするために、アリカは島へと向かう。

「ここはまかせた！」

「俺の力じゃどうしようもないところもあるからさ。その辺は自分でどうにかして。」

アリカは船を乗り換え、貧民島へと赴く。残ったRDは、3号とでカバーできる全範囲の岩を消し飛ばしていく。一度依頼を受ければ忠実に、望んだとおりの結果を出す。3号も、途中からは手榴弾と普通のショットガンを使いわけながら、すみませんを連呼しつつ国民を助けていた。

この日、空中王都オステイアは地図上から消えることとなる。誰の活躍があつてか、はたまた人の生きたい！という願望が通じたのか、被害は全人口の1%を下回るといふ奇跡を残し、オステイアは大地へと沈んだ。その1%の中には、すみません！といいながら消えていった式も含まれていたとか、いないとか。

「結局こうだもんなほんと……。」

全てが終わり、戦艦のデッキで文句をたれる男がいたとか、いないとか。

14 撃目（後書き）

こいつこごぞというところで、めっちゃヘタレになりそうなイメージがあったので、このような形になりました。イメージが違うって方は申し訳ございません。

ですが、作者のイメージがまんまこんな感じですよ。ノリノリのはノリノリで、攻め立てられると妙にヘタレなような、そんな感じですよ。

式のほうは遊び心です。なんかすみません。アリカの一人称が私の時と童の時あるけどどっちなんだろ……。原作ですら定まってない。

15 撃目（前書き）

THE ご都合主義になるのかもわかりません。すみません。なるべく許容してくれたら嬉しいです。イメージが違うという方は、申し訳ございません。

お気に入りが入りが1500件越え、総合評価も4000超えそうです。なんかここ最近の伸びがすごいのですが、何が起きているのか……。いつも読んでくださってありがとうございます。

地震まじやばいですね。筆者は北海道住まいなのですが、海岸沿いではないので、そこまででもなかったです。みなさん大丈夫ですか？宮城県が特にひどいらしいですね……。ニュースとか見たら、船が横向きで波に揺られてました。怪我がないように気をつけてください。

「おとなの階段の〜ぼる〜 君はまだシンデレラさ〜」

歌いたくもなる。別に、急いで捨てたいと思っていたものでもないし、相手なんて誰でもよかったが、初体験というものは男も女も関係なく、否応なしに、多少の不安と、それを遥かに凌駕する好奇心で埋め尽くされるものだ。

一応、生物学上 に分類されるRD。性欲が有り余つてると言うわけではないが、興味くらはいは当然のごとく持っている。今まで、優先順位の問題により先延ばしにしてきたが、金もあるわけだし経験しておいた方が良かったかなと、今更ながら思う。そうすれば、男らしくリードして、惚れてもらえるかもしれないかなと少し後悔する。

もっとも、アリカが心底惚れるなんて事は、それこそ天変地異が起きたとしてもありえないわけで……。例えるなら、RDが「紅き翼アラルプラ」と仲良くお酒でも飲みながらワッショイするくらいありえない事であるのは言うまでもない。

まあ、そもそも惚れようが惚れまいがどうでもいい話なので、考えるだけ無駄ではある。

「近藤さんも買ったし、色々道具も買ったし……。パーフェクトウ。今日は絶対に逃がさん。」

机の上には避妊具をはじめ、これ初体験で使うの？と疑問に思うような道具もちらほら見られる。スイッチを入れると、変な風に動

き出す変な形をした道具や、アイマスク、手錠、口に入りそうな大きさのボールに固定具のようなものがついた道具など、見ただけでは使い方がよくわからない、多種多様な道具が机の上に散らかっている。

「子供は生活が安定するまでは作らないほうが良いってお母さんが言ってた気がする。……てか金あるし、子供いても問題ないのか？でもめんどそうだよな。」

母強しとはよく言ったものである。母親に幼いころ言われたことは、意外と覚えているものだ。この腐った脳みそで、これだけ長い間、片隅にでも記憶に残ってるというのは、やはりすごいことである。

現在は、あの依頼から2日後。あの時取っていたスイートを、\$をDPに換金した後に再び使っている。

本当は、初日から引つ張ってきたかったのだが、さすがに王女には色々あるらしく、どれだけ脅してもこようとはしなかった。言うことを聞かない奴隷用の首輪まで買ったのだが、王家の魔力と言うわけのわからないチートによりまったくの無意味。これが完全に予想外で、言うことを聞かない女を報酬とし、タダで安くは無理やアホのようにレアな陰陽符を使わされることとなる。無理や言うことを聞かせようとしても、王家の魔力（謎）により抵抗され、初日に至ってはヤル前に殺れそうになったりと、散々な目にあった。現在の状態は、生殺しに近い状態である。なんで仕事をしたのに、報酬が包丁による殺人未遂なのが、まったくもって納得がいかない。こんな状況では死ぬに死ねず、無理やり襲おうとした時点で、いきなり予想外の男女平等パンチを欠けた鼻にぶち込まれたり、勢いが余らなくても殺してしまいそうな勢いである。男女平等パン

チの後に、皆の恨みと言うわけのわからない言葉を言い放ち、包丁を振り下ろしてきたが、死ぬ気で回避。自身では殺せないと悟ったのか、颯爽と部屋から消えたのが昨日の話である。民を助けた後は、手のひらを返したような態度。さすがの王族である（意味不明）。あまりの事態に、呆然としてしまった琢磨。足でも撃つておけばよかったと、後になって後悔をしている。

「絶対にこんなことはあってはならない。仕事には対価を。今日は完璧だ……。まずは、動きを封じてやる。てか、あの符一枚いくらになると思ってるんだ糞ビッチが！！今日抵抗したら両足撃ち抜いて拘束だ。」

ビッチでもなんでもない鉄の女なのだが、罵りのボキャブラリーが少なく、基本的にネットでの知識程度しか持っていないので、意味も判らずそのような言葉を使う。ここまで溜まっている状態になることはまずないのだが、美人と確実にヤレルはずだった状況からの転落により、色々なものが溜まっている状態であり、初日につまういかなかったことにより、イライラが積もるばかりである。普通に考えて、帰ってくるなどありえない話なのだが、ここら辺は経験のない男の勝手な判断により、買われた以上は戻ってくると言う謎の理論が展開されている。

どうしてやるうかと考えていると、コンコンと、部屋がノックされる音が聞こえる。ようやく帰ってきたかと、手錠を持ちドアを開ける。

「てめえようやくきやがったかあああああああ。」

「きゃああああああああああああああああ。」

ドアを開け、速攻で手錠をかけようと手を振り下ろそうとした時に、悲鳴が響き渡る。何も考えず、手錠をかけようとしていたが、よく見るとアリカではない。ドアを開けた先にいたのは、配膳をしてきてくれた美人スタッフであった。

傍から見れば、ただのレイプ一歩手前である。琢磨は慌てて手錠を引っ込め、言い訳を始める。

「ち、ちがうですよ。これはあれなんです。同居人の趣味！その趣味なんです！なんかこうしないと興奮しないような変態なんです。本当なんです。決しておねいさんを襲おうとしたわけではないんです。あ、誤解されてはあれなんですけど、おねいさんが魅力的じゃないと言っているわけではないんですよ？むしろ今すぐ溜まったものを出したいというかなんというか。」

「あ、あの……お客様にお手紙です。」

冷静な対応が売りだと思っていた美人スタッフも、さすがにドン引き状態で手紙を差し出す。手紙を渡すと、失礼しましたと、完全に崩れている笑顔を向けて、超速で消えていってしまった。やつちまった〜っと思いつつも、差出人も書いていない手紙を受け取り、意味の判らない希望を思い浮かべる。

『ラブレター』男を惑わす甘い響き。わざわざ手紙を出す人物など欠片も想像がつかないので、おのずとこのような思考になってしまふ。差出人の名前がないのは、照れ隠しかな？と、始めて受け取る『ラブレター』を掲げ、ハイテンションで色々妄想する。何をど

う思考すればそうなるのかは、RDのみが知る。

「やっぱり男は中身だぜイケメン。見るよこれ。ビバ！勝ち組！！」

さっそく中身を見てみる。安っぽい紙な感じがしたが、そのようなものはまったく気にしない。生涯初のラブレターである。あのおねいさんがなんて書いたのか、ワクワクしながら取り出し、中身を広げると

”オステイアの難民の問題が残っているので帰れない。しばらくはそこに留まっておれ。アリカ”

「。」

理解不能。自分を『売った』の意味を理解しているのだろうか？自分で言い出しておいてこれは、いくらなんでもないのではないのだろうか。そもそも、ご主人様に当たる人物に、包丁を向けた時点で完全に理解ができなかったが、この手紙はダメだ。絶対にダメだ。世界樹の一部と、弾や手榴弾を使わされ、得たものが包丁による殺意と、上げて落とすラブレターである。

今までのことを考えれば、まったく生ぬるい仕打ちであるが、そんな常識はRDには通じない。

考えてみれば、アリカの居場所を探る手段すらない状態である。奴隷の首輪さえつけてしまえば、何とでもなると考えていた過去の自分を、モシン・ナガンver世界樹で撃ち殺してやりたいとすら思ってしまう。

「……あひゃひゃ。許すまじ……俺をなめてんじゃねえぞ!!! 借り物だろうがなんだろうが、こっちはチートなんだよ!!! 神様使用なんだよ!!! 絶対に逃がさないぞ。」

不意に、外で詠唱が聞こえる。壁越して見てみると、5人の魔法使いが魔法を放とうとしていた。即座に転移を2回ほど続けて行う。転移を行う寸前に、魔法を唱える声が聞こえたが、ギリギリ逃げることができた。10kmほど離れた森の中にたどり着き、自分がいた部屋を見てみると、どこかの軍人らしい人間達が、少数ではあるが部屋に魔法を放ちながら突入していた。

よく考えなくても、アリカが送った刺客であろう。少数ながら、とても筋肉質で強そうな見た目である。これだけの時間がありながら、これしか用意できなかったということは、ハブられてるのかな? という疑問も沸くが、それ以上にピュアハートをボロボロにしたのが許せない。許していいはずがない。

「最初からこのつもりだったのか……? アリカよ……お前は全世界のピュアなハートを持つ童貞ようせいを敵に回したのだ……。妖精を弄んだ罪。この罪許しがたし!!!」

刺客をよこした時点で、帰っては来ないということを決まりである。取り出すのは、連絡用の陰陽符。琢磨は、対象を撃ち殺すことはできるが、対象の行動や、居場所を知ることにはできない。そんな時に頼るのは、大抵情報屋である。優秀な情報屋は、なかなか得難いものである。今連絡を取ろうとしているのは、かつてチーム力

ゲタロウを引つ張つてきた小太りな情報屋。
あのチームが非常に優秀だったので、それを連れてきた情報屋は、
現在の琢磨の連絡の取れる情報屋の中では一番優秀であり、お気に
入りでもある。

(やあ、久しぶりだな。)

(RD……。もう依頼は勘弁してくれ！！こっちはそれどころじゃな
いんだ。)

(ん？なんか問題でも起きたのか？)

(お前が起こした本人なんだよ！あれからずっと、俺はカゲタロウ
に狙われ続けてるんだぞ！！)

(まじで？カゲちゃん元気にしてるんだ。会いたいね。)

(冗談じゃない！あれほどのレベルの使い手に狙われる俺の身にな
ってくれ。)

(てかなんで狙われてるの？)

(お前のところに連れて行ったからだよ。今やカゲタロウもお前ほ
どではないが有名人だ。表では顔と名前は割れていないらしいが、
裏ではほとんど知れ渡ってる。常に色々なやつに狙われているらし
い。その恨みが俺のところに来てるんだよ！！お前も覚悟してお
いた方がいいぞ……。)

(うへ。てか忙しい感じ？依頼したいんだけど。)

(逃げるのに一杯一杯だ。前の住居も襲撃されて……。今は新しいアジトを探してる所だ。)

(あー受けてもらえないってこと？それはちょっと困るな。うん、困る。)

(……。)

(本当にダメかな？そうになると俺も色々考えなきゃいけないんだけど。)

(……受けなければどうするつもりだ？)

(そうだな。襲撃してくる人数が一人増えるかもわからんね。お前のためになら、軽い運動くらいはしてもいいな。)

(俺にどうしろと言っただ……。)

折れるしかない。カゲタロウも相当な恐怖だが、それを遥かに上回るような悪魔が安易に殺すぞと言ってきたているのだ。それも、殺害率100%ではなく、150%を誇るような、狙われた瞬間に死が決まっているような悪魔に。

(アリカの居場所を調べて来い。)

(アリカって…あのアリカ王女のことか！？無理に決まっているだろう！その辺のやつとはわけが違う。相手は王族だぞ！王族の居場

所を調べてこいなんて……。国もなくなつて、どこにいるかなんてわかるわけもないだろう。）

（あの女は許されるわけがない。あれは純粋な少年を惑わす悪の魔女だ。退治せねばなるまい。第二、第三の被害者を出す前に……。）

（一体何を言っているんだ？）

（とにかく頼んだ。どんなに我慢できても一週間だな。それ以上は何かが発発しそうだ。）

（期限が無さ過ぎる！せめてもう少し時間を……。）

（うるせええええええええええ！今日のカレンダーに卒業式って書いてしまったんだよ！！やる気満々だったんだよ！）

（わけがわからない。とりあえず落ち着いてくれないか？）

（落ち着けて言われても……。）

あれ？ふと考えが浮かぶ。相手なんて誰でもいいとすら思っていたわけだし、そもそもなんでアリカとやる事にここまでこだわっているのだろうか。確かに、類を見ない美人である。間違いなく美人であるが、金さえ出せば、あれと同レベル、もしくはそれに近い人物くらいは手に入るのでは？言うことを聞くどころか、殺しにかかってくるような美女よりも、金がかかるが、従順な美女の方がいいのでは？そもそも、なんでこんなに必死になっているんだろうか。初体験間近になり、テンションが上がっていたのであるだろうか。冷静に

考えると、別にやれなかったことよりも、嘗められたことに怒っていたことに気づく。俗に言う、賢者タイムに近いものである。

(なんか……うん。)

(落ち着いてくれたか?)

(うん。なんかごめん?)

(い、いや。わかってくれればいいんだ。じゃあ俺はこれで……。)

(あ、アリカの居場所は多少時間かかってもいいから調べてくれ。それと、アリカを売りに出した場合、一番高値で買ってくれる人物。奴隷商人でもいいわ。それを探してきて。それと、金がかかってもいいから、お前が知る中で一番の美女で金出せば抱けるやつを今から言うホテルに派遣してくれない?美女は今日中な。)

(は?売りに出す?お前一体何を言ってる??)

(うん。よく考えなくてもいらねーから売るわ。)

情報屋にしてみれば、意味がわからないだろう。いきなり殺し屋が、王女を売りに出すなどと言いはじめたのだから。戯言以下。もはや妄言のレベルである。

(言っている意味がわからないのだが。)

(言われたことだけこなせ。それから……。)

未だに部屋で何かをしている5人ほどの精鋭を見る。追跡トレースでもしようとしているのか。琢磨が転移をした場所に向かつて魔法を唱えている。モシン・ナガンを取り出し、弾を込め、照準を合わせ、引き金を引く。まだ使い慣れていないので、装填などはぎこちないが、それでも時間にして20秒もしないうちに、先程まで自分がいた部屋に死体が5つ出来上がる。精鋭たちも、アリカからRDの情報を聞いていたのか、最初の一人が死んだ時には遠くまで索敵をし、物陰にすぐさま隠れようとしたが、WHや【絶対等速】イコールスピードのことなどは知られていないので、特に問題なく5人の額に穴が開く。もはや、避けるどころか、反応することすら不可能な弾丸。英雄ですら絶対に避けられない死の運命。抵抗しようにも、転移で逃げる程度のことしかできず、始めようとしたやつを優先的に沈めたため、あつという間に終わってしまった。

(待たせたな。今から言う場所に死体を5つ置いておく。それを箱に詰めて連合の中枢。場所はどこでもいいから目立つ所においてこい。)

(なにをしていたかと思えば……また殺したのか?)

(どうでもいいだろそんなこと。それと、金は出すからとにかくかわいい子連れて来い。ホテルは後で伝えるから準備だけしておけ。)

転移で部屋に戻り、死体を森の中に転移させる。これだけで相当な重労働のように疲れる。ホテルでは、ガラスが割れる音でも聞きつ

けたのであろう美人スタッフが、悲鳴を上げているように見える。自分に手錠をかけようとしてきた変態の部屋が、壁中血まみれになっており、回収しきれなかった脳の一部分が散らばっているのだから当然の反応であろう。

「ちくしょう。もうあの美人さんは諦めるしかねーか。もったいね」

たった今殺人を犯した男は、まるで関係のないような軽口でそれを終わらせる。これにより、余計な介入などを防ぎたいので、ホテルにいる人間を片っ端からモシンちゃん撃つていく。ここで警備隊など呼ばれば、RDとしてではなく、包帯男としても後を追われることとなると考えての処理である。

「まじ勿体無い。美人さんだったのに……。違うホテルでも探すか」

ホテルを穴だらけにし、死体を放置して、初体験を済ますホテルを捜しに動く。半ばどうでもよくなっているのだが、カレンダーに印までつけてやる気だったのを考え、ここで経験しておくことを選択する。

（んじゃあ準備と、アリカの件頼んだわ。）

（……とりあえず都合がつく女は用意させてもらおう。）

そう言って、お互い通信をやめ、それぞれがやるべきことを始めた。

「俺こんなことしたくてがんばってたのか……。」

ベッドで一人愚痴る。その後、適当なホテルの部屋を取り、情報屋に連絡。情報屋のほうも、いい女を仕入れる奴隷商人と話がついたらしく、手持ちで一番いい女奴隷を買い取ってきた。部屋までよこすとなるほど、非常にかわいい。美人よりも、かわいいという言葉が似合う15〜18歳くらいの女の子。

これだけかわいいのになぜ奴隷なのか。少しばかり気になったが、買った以上楽しむかとベッドに寝かして、一晩色々した。女の子は、終始目の前の男を気持ち悪いものでも見るような眼で見っていたが、奴隷の首輪もしっかりと装着されており、王家の魔力なんてものを持っていてるわけでもないの、なすがままにされた。

「めっちゃ疲れた。何が面白いんだこれ。」

うまくいかない。疲れる。自分でした方がいい。初体験を済ませた男の何割かはこのような思考に陥るらしい。RDもこっちのタイプで、正直ながいいのかさっぱりであった。色々やってみたが、まったくよくない。

結局、終わつた後に奴隷を解放してしまうほどの賢者っぷりを発揮。奴隷の女の子は、一度抱かれただけで解放されるなどとはまったく思っていなかったらしく、しばし呆然としていたが、首輪がはずされたのを確認し、足早に消えていってしまった。

「なんかあほらしくなってきたな。なんであんなムキになってたんだろ。FPSやってる方が万倍いいわ。久々にやりてえな。そろそろ古いやつなら始める時代なんだよな。古参として居座ろうかな。」

なつかしのFPSのことを思い出し、思いを馳せる。時代的にはそろそろ始めてもおかしくない。こつちの世界では、どんなFPSがあるのか。死ぬ前と変わらないのか。考え始めると、結構気になつてきたりする。

おもむろにテレビをつける。情報屋がやったのか、それとも更に回したのかはわからないが、アリカが送り込んだ5人が、MMの広場メカロメセンブリアで見つかったらしいニュースが写っていた。

「はっ。いい仕事するじゃん。すげー目立つなここ。」

野次馬も相当なものである。五つのでかい箱から、血が流れている映像。戦争も終わつたはずなのに何事だと人も集まって様子を伺っ

ている。その野次馬が突如として道をあける。人の波が割れ、僅かな従者を引き連れ、こんな事件で出張るはずも無い人物がテレビの前に姿を現す。

「あつはははは。アリカこんなどこにいたのかよ。まだ買い手が決まってないが、こりや近いうちに回収だな。」

箱を開け、中にある死体の顔を見て悲痛な顔をする。鉄のような女性のイメージからはかけ離れた、憎悪と悲しみに満ちた顔。しばし悲しみに明け暮れている様子が、テレビを通して伝わってくるが、突如何かを決意したかのように顔を上げる。

『ここにいる者、これを見ている者たちに聞いて欲しいことがある。』

ゆっくりと、一言一言を噛み締めるようにその場で話し始める。回りは無言。カメラマンも夢中で撮り続ける。

『ここで死んでいる者たちは……妾が殺したようなものだ。』

周りは騒ぎ始める。国を滅ぼした王女が、今度は人を殺したと発言したのだ。当たり前前であるが周りは騒ぎ始め、いつの間にもやら集まった数々のカメラマンとキャスターたち。今やテレビのどのチャンネルを見ても、アリカの顔が写っているような状態である。

『妾は覚悟したはずだった……。だが、どうしても無理だった。あやつにだけは…あやつにだけは体を許したくなかった。』

周りについていけないが、琢磨だけは鼻で笑ってそれを見続ける。もはや体とかどうでもいい。売り物になりさえすればいいので、何を言われようがどうでもいいことだと思っていた。

『そのせいで、死ななくてもいい者達が死んでしまった……。妾のせいじゃ。妾は絶対に地獄に落ちるであろう。』

「勝手に堕ちてるよ。てか契約裏切っておいて被害者ぶるとかふざけんなよ。」

『じゃが……貴様も一緒に堕ちてもらっぞ。』

テレビに向かって言い放つが、嫌な予感がする。これを聞いているもので、言っていることを理解しているものは、RDと「紅き翼」の連中だけであろう。周りは何を言っているのかわからない顔をしているが、それでも真剣な様子を見て、完全に聞き入っている。

「おいよせ。」

『もう逃げない。妾は絶対に逃げん！RDよ……貴様も一緒に来てもらっぞ！…！』

「よせ！……！」

懐から取り出すのは巻物。自身の記憶から抽出したのである。その巻物からは琢磨の顔や、言動が事細かに映像として流れる。魔法世界全域に向けて、RDの戦争における全てが流れる。

王女の全力の反撃が始まった。

15 撃目（後書き）

R/D君を理解していない、したくもないアリカ様のすばらしい反撃。早まりましたね。筆者の中では、このタイプのキャラクターは、こんな感じで無駄に戦おうとしそうな気がしました。今度アリカの視点で一話上げてみたいと思ってます。

復讐のカゲタロウ。生きてましたね。がんばってください。

まさかの名も無きキャラで、祝 童貞卒業。しかも省略で。メインキャラといちゃいちゃとか考えられないです。

次話から、本当に鬼畜なことを始めると思います。もう既に最低ですが、更に人として終わります。これ以上は……って方は見るのをやめたほうがいいと思われまます。

16 撃目 Side & quot ; RD & quot ; ; (前書き)

この16撃目は、同じような時系列のアリカ視点とナギ視点をもって16撃目としたいと思っております。初めてなので、色々挑戦したいのと、視点をコロコロ変えるのが変な感じがしたからという理由からです。この話だけだと、描写が薄かったり、え？って事が多々あるかもしれませんが。

次のアリカ視点で、省いた初日の描写も含めて、どのような考えでこうなったのかを書いてみたいと思います。アリカ視点は、筆者の文才にもよりますが、地獄の鬱 となっております。

内容は最悪です。今の日本で重ねるとリアルです。あくまで、この小説には原作にいないキャラがいて、それが起こした行動だと考えてください。なるべく柔らかく書いたつもりです。

「この女……。」

世界中に流れる。アリカが自身の記憶より抽出したRDが。顔が、声が、武器が。アリカが知るRDの全ての情報が、カメラを通して魔法世界に発信されていく。

「契約守らなかったのお前じゃねーかよくそがッ!!!」

散々好き勝手生きてきたが、契約を違えることは一度も無かったRD。また、相手に違えさせる事もさせてこなかった。考えてみれば、アリカの前で殺しをしたことは一度も無い。「紅き翼」もテオドラも、傷つけはしたが殺しはしなかったし、オステイアに至っては殺すどころか、助ける側で参加した。嘗められたのであるうか。依頼以外では殺さないなんて甘い思考の持ち主だとも思われているのか。それとも戦おうなんて思っているのだろうか？この映像を見て勝てると思えるのだろうか？

こうして考えている間にも、次々と映像が流れる。

『俺が「コスモエンテレケイア完全なる世界」の依頼を受けてこの戦争を激化させてたからだよ。』

『いや、依頼は結構あったけどシカトしてたわ。ちょい世界樹使って色々やってた。』

『まあよく見とけ。これが世界最高の狙撃らしいぞ?』

『精々祈ってる奴隷。俺にオステイアの件で依頼が入らないようにな。』

『死んだやつの事なんかどうでもいいだろ。そんなどうでもいいことより、今を楽しもうぜ。』

『ぎやはははは。まじいつまで悔やんでるんだよ。ほんとどうでもいいわ。死んだやつのことを考える時間なんて無駄だろうよ。んなことしてたら俺年老いて死んじゃうわ。…まあ年とらねーけどさ。』

自身の記憶から抽出した映像を世界中に流す。仮初の英雄という部分だけを省いたありのままの映像。映像の中でRDは嘲う。死んでいったものたちのことを。「紅き翼」のことを。アリカが国を捨てなければ、世界が消えていたかもしれないような戦争のことを。どうでもいいと切り捨て笑う。戦いに赴き生き延びたもの、死んだものの、戦争にいけなかったもの、いかなかったもの、あるいは死んでしまったもの。世界には色々な人がいるが、それら全てのものが同じ気持ちではないのだろうか。ただただ許せない。こんなやつにどうこうされる覚えは無いと。

だが、映像では英雄である「紅き翼」が手も足もでずにやられていく。信じられないような光景であろう。世界を救った英雄が何もできなかつたという現実。反面、すでに接触していたとはさすがだと言ふ意見もでてきたが、大多数はただただ恐怖するばかりであった。そんな周りを無視し、リポーターの一人がアリカに質問をする。

『アリカ王女。』

『なんじゃ？』

『なぜこれほどの情報を？』

『……オスティア崩壊のさい、妾はこやつに依頼をしたからじゃ。』

周りは今まで聞き入っていたのも忘れ、アリカ王女に暴言を飛ばす。王族の誇りはくから始まり、あんなやつに依頼をするなど恥を知れといったものなど、とても王族に向けられる言葉ではない暴言の数々が叫ばれる。映像だけで、どれだけの事をして、この世界のことをどう思っているかわかるRD。そんな存在に、王族が依頼を申し込むなど誇りはないのかと口々に叫ばれるが、アリカはカメラに向かって話し続ける。

『民を助けるために、妾はこやつに依頼をした。こやつは確かに助けてくれた……。じゃが……。』

『ここでの発言は全魔法世界に流れますが……。』

『構わん。こやつは100年以上も好き勝手こんなことをやっておるのじゃぞ！妾が情報を出さなければ、いつまでも姿もわからぬまま、この世界にこんなやつが居続けることになるのじゃ！皆は許せるのか！？こやつは死んでいったものたちのことを嘲うどころか、どうでもいいとまでほざきおったのだぞ！いつまでこやつに怯えている？戦うべきは今ではないのか！？戦争が終わり、つらい想いをしたものばかりであろう。じゃが、こやつは続けるぞ。妾が断言す

る。こやつは生きている限り、これと同じ事を続けて笑うぞ！！直接会ってわかった。こやつは最低じゃ！生かしておけば、この世界が終わるまでこのようなことをして、同じように笑うぞ！？皆はこの世界が終わるまで、こやつに好き勝手やらせておくのか！？それでいいのか？皆は国が、この世界が好きで、守りたくて戦ったのではないのか？』

『ですがあの「紅き翼」ですら負けるような相手に……。』

『こやつは近づかれれば恐らく何もできない。「紅き翼」がやられたのも、卑怯な不意打ちから始まり、終始見えない距離からの攻撃じゃ。妾の拳ですら当たったくらいじゃ。見つけさえすれば…見つけさえすれば必ず勝てる！！子供達の世代にまでこのような悪魔を生かしておいてよいのか！？』

この辺りから、周りは黙り始め、王女の言葉を黙って聞き始める。映像では、戦争ですつと苦しみ、苦勞してきた者たちのことを嘲うRDが映し出されている。聞くもの全てを不快にさせるような笑いを続ける。

いつしか、そこにいる全てのものが映像に魅入っていた。当然な反応だろう。この戦争で、家族を失った者。自身が大怪我を負った者。友を失った者。恋人を失った者。帰る家を失った者。国ごと失ってしまった者。この戦争に参加した全ての者が、大なり特大なり何かを失った。それだけの戦だった。命がけで、自身が思う何かのために戦った。

それを映像の男は嘲う。100年以上生きてきたとか、最高の暗殺者だかなんだか知らないが、この男にそんな権利があるのか？考えるまでも無い。その場にいた者の決意が次々と溢れる。

『よく言った!』

『こんなやつとの契約なんて守らなくいい!』

『100年以上も影を捕らえられなかったのに。アリカ様万歳!』

『見つけさえすれば、あの英雄達なら絶対になんとかしてくれる!』

『これだけわかれば、絶対に捕らえることができるぞ!』

『これ以上この世界を好きにさせてたまるか!』

『今こそ力をあわせるべきだ!今までこいつの好きにさせすぎたんだ!』

「え〜なにこの流れ……なぜ俺が悪いことに……。なんかこの世界のノリ軽くない?」

いつの間にかアリカを罵倒する声が消え、アリカを擁護する声しか聞こえなくなっている。意味がわからない。契約を守らないことに対する賛同まででてくる始末である。いや、契約は守れよと言ってやりたい。100年以上上まったくなかった最高額懸賞首の情報が、この数分で世界中に出回る。映像が終わるころには、周りの者たちは口々にアリカを讃え、テレビ関係のものは、この情報についての整理と、王女に向けてのインタビューを開始する。

『ここにある箱の中身は……。』

『妾のために、RDに挑んでくれたものたちじゃ……すまぬ。』

『居場所などの情報は？』

『今はもうわからん。じゃが、この世界の皆が必ずや探し出してく
れると信じておる。帝国も連合も、こやつを止めることはできな
かった。情報が無さ過ぎて、手のうちようが無かった。今は違う！あ
の儀式を止めるために、一度世界は一つになったはずじゃ！！なら
ばもう一度、もう一度一つになるう！世界で一つになれば、必ずや
勝てると信じておる。犠牲もどれだけできるかはわからぬ。じゃが、
こやつを放っておけばこの世界ごといつか消し去られる。これだけ
は断言できるのじゃ。』

「他人目当てかよ……悲劇のヒロイン気取りなのか？そんなのか？
？あれ？でもこいつ本当に悲劇のヒロインになるのか？なんかよく
わからなくなってきた。国民煽って軍を動かすつもりか……。嫌わ
れすぎだろ俺。」

周りは周りで、今こそや、血祭りに上げる、こいつは生かしてお
くべきではないなど、好き放題言っている。RDの実力はわかって
いるはずなのだが、世界中で力を合わせて挑めば勝てると考えてい
るのであるうか。だが現実的に、これだけ情報が出回り、連合、帝
国問わず、魔法世界全体で嫌われているRDが逃げ切れる可能性は
ほぼ0だと誰もが思うであろう。

『こやつをこれ以上好きにさせてよいのか！？良いはずが無い！戦
争は終わったが、この世界で散々なことをしたこやつが笑っている

のを許せるのか??許していいはずが無いのじゃ!」

「それと契約となんの関係が……。はあ、もういいや。どんだけ俺に抱かれなくなかったんだよ…いいじゃんいいじゃん、ちよつとくらしいイケメンじゃないからって。まああれは疲れるからもうする気はないけど…。」

『二度とこやつがこんなことをできないように、妾に力を貸して欲しい。どれだけ犠牲がでるかもわからぬ…じゃが、それでもこやつを放っておくことはできなかつた。』

「別に世界どうこうなんてするつもりないけどな。まあ依頼なら考えるけど。普通に考えて勝てるわけねーじゃん。運営様まじ鬼畜

」

『今回の戦争のようなことは、二度と起こしてはならん……。皆でこやつを倒そう。今度同じ事が起これば、今度こそ世界ごと消されてしまうのじゃ!こやつを倒そう!平和はその先にあるのじゃ!』

「俺に全部擦り付けるとか…悪魔や。それにしても強気だな。チー卜は垢BANじゃ!ってやつか?やべえ…運営が動き出した。」

もう完全にRDは「完全なる世界」と同じ、もしくはそれ以上の扱いとされている。周りは完全に王女に乗せられ、口々に呪詛のように恨みつらみを言い放つ。

『こやつの情報を少しでも持っているものは、どうか世界中に伝わるように発信して欲しい。』

「でてくるわけないだろう……とは言えないな。金が絡んできたら「ゴミ箱」の連中とか平気でしゃべるだろうな。姿は知られてるし……。あいつらがどれだけ頭がイカれてるかわからんな。こいつらが今後何してくるかもないしな。」

自宅と言う名の謎の建物がある街を思う。街の人間の大半が頭がイカれており、まともにしゃべれるやつも、殺し屋なり奴隷商人なりと、世間一般で言う「まとも」が何一つ存在しない街。仮面や包帯で顔を隠しながら生活していたが、包帯状態での映像が映し出されているので、それも意味をなさない。

この王女の演説を理解することができた思考の持ち主があこの街に何人いるのか。場合によっては、色々なFPSで見かけた銃のコレクションなどを、適当なアジトでも作って運ばなければならない。非常にめんどくさい事態だといえよう。

「とりあえず帰るか。アリカはやっちゃったな。難易度下がりがまくりだよ。妖精を弄び、恩をあだで返す魔女には罰が必要だな。人誅の時間だ。」

いつも通り、困った時の情報屋である。すでに仕事を任せているが、そんなことよりも重要な仕事がありリアルタイムで出来上がったため、連絡を取る。

(なあ、俺が今何を考えているかわかるか?)

(RD…)

(俺はな、今非常にイライラしてるんだ。なんでかわかるか？)

(はっ… お前ももう終わりだな。)

(はぁ？)

(何があつたか知らんが、アリカ王女にしてやられたな。これでお前は終わったも同然だ。)

(ちがうんだよ。首輪のせいなんだ。なんなんだ王家の魔力って… しらねーんだよそんなもん。)

(なぜあんな依頼をしたかは知らないし、聞くつもりもないが、俺はもう依頼をされてもこなさないからな。)

(お前は一体何を言っている？)

(魔法世界中にこの情報が出回ってる。お前はもう逃げられないぞ。お前を殺して名を上げようとするやつに追われ続けることになるな。)

(お前さ… もしかして魔法世界の誰かが俺をなんとかするとでも本気で思ってるのか？)

(あたりまえだ！お前はいい客だったが、こうなると話が変わってくる。お前と関わっていたと知られるだけで極刑ものだぞ。)

(いいじゃねーか。一緒に死のうぜ。アリカも地獄に落ちてくれる

らしいし、存外悪くないんじゃないか？)

(ふざけるな！お前から貰った大金も、カゲタロウのせいで碌に使えていないんだ。こんなところで死ねるか！！)

(\$でいいならくれてやるからさ……。ちよいと今の仕事後回しにして、調べごととしてほしいんだけど。)

(話を聞いてたか？もう死刑になる人間の依頼なんて受けるだけ無駄だろう。)

(お前はアホだな)。精々やる気を保てるのなんて長くても1ヶ月だろうな。後はアリカが孤立して終わりだ。あいつは人間とは何たるかを理解して無さ過ぎる。)

(何を言っている？)

(まあたしかに。非常にめんどくさい事態だよこれ。どうすんの俺って感じだけどさ。長くは続かないよこんな状況も。なんか儀式を止めた事で自信でもつけたのか知らないけどさ、甘いんだよね。人間で一番強い感情は希望とか勇氣だとか思っちゃってるよたぶんそれは違うんだよね。)

(は？)

(まあおとなしく俺に従っとけ？1カ月後には助かったって思うだろうから。)

(まさか勝つ気か？不可能に決まってるだろ！この世界には何億って人間がいるんだ。逃げ切れるわけが無い。)

（そりゃあな。」「完全なる世界」も結局はバレて消されたしな。長くこの状況が続けば、俺もおしまいだろっけどな。けどまあ、なんとかなるさ。）

（変装でもするのか？おそらく街などは変装や認識阻害を見破るのが得意な警備兵で溢れかえるぞ。額が額だし、お前はそれだけの人間を敵に回してるんだ。）

（認識阻害でなんとかなると思ったんだがな。まあ見つかったら終わりなかくれんぼって事だな。）

（終わるのが決まっているかくれんぼだよ。）

（案外どうにかなるもんだって。とりあえずオステイア難民の居場所なるべく多く調べろ。）

（相変わらずお前の依頼は意味がわからないな……。もし見つかったも俺の名前は出すなよ？それと金。それで見つけてこよう。）

（支払いがいいのは知ってるだろ？お前の名前しゃべる前に殺されるだろっし、それも問題ないな。なるべく早く、できるだけ多く頼んだ。）

（善処はするさ。）

（それと…わかってると思うが、俺を敵には回さない方がいいと思っよっ。）

通信をきる。金だけの関係。便利で、何よりもか細く、欲求が強いほど強靱になる絆。この情報屋はとても素晴らしい。情報の伝達の速さ、質、量、全てが一級品であり、欲求まで一級品であるから手がつけられない。こういうやつのほうが、この世界では信用ができる。

こちらの支払いが一級であることを示せば、後々のことまで考えこちらに従ってくれる。

「さてさて…アリカは人海戦術を選んだわけか…。捨て身で殺しに来たな。俺そんな悪いことしてな…してるな。とりあえず「ゴミ箱」に撤退するか。」

転移を繰り返し、我が家へと帰宅しようとする。距離が多少あったので、休憩を挟みながら、何回かの転移を繰り返しながらの帰宅。こうなってしまう以上、弾丸の補給すらどうなるのかもわからないので、弾丸を使った陣なども敷くに敷けない。

多少の気だるさはあるが、無事「ゴミ箱」の手前までたどり着き、我が目を疑う。

「……は？」

「ゴミ箱」が大炎上している。住人がネットにでも情報を出したのだろうか？早すぎる。放送から3時間たっていないような状況にも関わらずこれである。街ごと焼き尽くしている。単独か、あるいはどこかの国の軍か、誰がやったかはわからないが、とにかく燃えている。

姿は見られても、自宅はバレないように動いてきた。しばらくは
けるだろうと思っただが、盛大な勘違い。疑わしきは罰せずとも言
うのだろう。どこかの誰かが、「ゴミ箱」の住人ごと、街に向けて
殲滅魔法を放つたらしい。

それは街ごと全てを焼き尽くす。それにはRDの自宅も含まれてい
る。当然のごとく、家の中にある全ての物も含まれるわけであり…

「ふっざけんな！『世界樹』の陰陽符もあるんだぞ！！」

自宅の中に転移をする。あれだけの金を賭けた陰陽符だ。見捨てら
れるわけがない。部屋にはまだ、どう使うかを決めておらず、何も
書いてない陰陽符が残っている。

部屋に転移する。建物自体はまだ残ってはいたが、中が炎上してい
る。別に家を焼かれようがどうでもいいが、集めたコレクションや、
『世界樹』の符は絶対に勘弁して欲しい。

多少崩れている部屋の中を散策する。

「あつた！さすが『世界樹』…。紙の状態ですらこれか。銃は…く
っそがッ！！！」

さすが世界最高の符であるとしか言えない。燃え盛る炎の中、変わ
らずそこに存在し続けていた『世界樹』使用の陰陽符。自身がカス
タムした銃は、一目でダメだと思われる有様である。暇な時にカス
タムした銃とはいえ、最高の知識を使って弄った銃の数々。大事な
コレクションが燃え盛っている。

「これだけやるのにどれだけ時間使ったと思っただよ！！弁償しろよちくしょう。」

外を見る。ローブを羽織った魔法使いが3人。やってくれる…。人数が少ないところや格好を見る限りでは、軍の人間ではなく、同じ世界の人間だろう。躊躇無く街ごと燃やし尽くす辺り、ほぼ確定。名を上げるつもりか、名誉を望んだのか、金のためか、恨みがあるのか、これだけ燃え盛る街に向けて、次の魔法を放つ準備までしている。徹底して潰すつもりなのか、何のためらいも無く3人は街に魔法を放つ。『世界樹』の陰陽符だけを持ち、街から離れた場所へと転移する。

「……なるほどね。アリカは世界を取って、人の何割かを捨てたわけね。なるほどなるほど。世界を知らないな。そうまでして俺が許せなかったのかね…。知らないんだよねそんなことは！こんなめんどくさい事態まで引き起こしやがって…。人誅の時間過ぎるなこれは。」

もう他の街などがどうなっているのかもわからないので、適当な洞穴か、人が住めそうな場所を探しに、100年以上を過ごした燃え盛る街を背に歩く。アリカには王家の魔力なる謎のチート能力があるので、首輪などの効果が無い。これでは売り物にならないので、どうやって従わせようかと言うことを考えながら。

「終わった……。さっさと逃げよう。」

あれから2週間ほど、その日見つけた適当な場所で暮らしながら、情報が入ってきたオステイア難民をその周囲ごと消し去るといった作業を繰り返している。周りの無関係な人間も巻き込むように。

あのアリカの発表以来、アリカは世界中でもてはやされた。オステイアの民は、命を救ったはずのRDに対し、ざまあみると言ったスタンスを取り、他の国々も、RD確保のために動き始める。

空には戦艦が飛びまわり、地上周辺もその近くの街の住人や、警備兵、探索や認識阻害を見破るのを得意とする魔法使いが常にパトロールを繰り返し、『世界樹』の件で散々おちよぐられ、血眼になって各地に散っているアリアドネーや、ここぞとばかりにでてきた帝国の大軍隊により、RDにとっては散々な、どこの世紀末状態である。

狙撃が終わるか終わらないかのころには、RDのいる周辺に大量の人間が溢れかえるというギリギリの状況。まさしく世界が一つになっていると言っても良いだろう。亜人、人間、中立の立場の者。全員が全員、確固たる意思を持って、RDを殺しにかかってくる。

アリカが煽ることにより、下の者が騒ぎ出す。世界の未来を賭けて、本気で殺しにきている。そうなると、上に立つ者達も動かなければならなくなってくる。本心ではRDの事をどう思っているのかわからないような上の者達も、これだけの騒ぎになると色々と動かなけ

ればならなくなる。

この2週間で、世界は戦争以上に動いたといっても過言ではない。意図してかどうかはわからぬが、アリカが隠した仮初の英雄の真実。これにより、無駄に正義に目覚めた魔法使い達が第2第3の「紅き翼」になろうと動き出し、更に懸賞金が上がったRDを仕留め、富を得ようとする者。裏で名を上げようと動き出す者等、本心ではどう思っているかわからないが、とりあえず魔法世界に住む住人全てが一つの目的のために動いている。

これがアリカが思い描いた図であろう。世界対一人の戦争状態。いくら認識障害をかけているからといっても、必ずしも見つからないというわけではない。殺気の隠し方なんかも知らないような琢磨である。狙撃時に近くまで寄せた時点で終了。琢磨自身も、そうならたらしまいのつもりで動いている。

ネット上では、常にRDの情報に関する交換が行われ、有益な情報を出した者に対しては莫大な金を。これにより、大半の情報屋までもが敵に回るから手に負えない。

琢磨自身の懸賞金も更に跳ね上がる。もうここまでくるとどうでもよくなるが、帝国が琢磨の名前と、テオドラに対して行ったこと、怪我を負うことから不死ではないことまで世界にばらし、更なる希望をもたらず。

もはや、どれだけの罪を犯したのかを数えられないレベルにまで云ったっている。

皇女誘拐、戦争扇動、国家破壊工作、上院議員暗殺、皇族脅迫、魔法世界消去に関与など、罪状を並べるだけで、どれだけの事をしたかわかるような男。元々の懸賞金ですら莫大な物であったが、この騒ぎで更に跳ね上がり、今では倒した者には2500万\$即金で支払われるという状態。二つ名に『災厄』が新たに加わり、今後これ以上の犯罪者は出ないだろうと言う、ダメな意味で歴史に名を刻ん

だ。

琢磨にしてみればたまったものではない。遠距離からの狙撃がばれ、撃ち始めた瞬間から動ける者が血眼で捜しに来るのだ。弾の補給すらままならない状況でのこれは、地獄以外のなにものでもない。実際、ここ2週間は碌な物も食わず、黙々と暗殺しては逃げるといふ極限の繰り返しである。

(おい、次の情報をよこせ。)

(……これだけの状態で生きていられるのが、俺は不思議ではないよ。)

(ほんとにな……。まじで嘗めてたわ。この前適当な獣の肉焼いて食おうとしたら、戦艦から精霊砲ぶっぱなされたわ。煙だただけでこれだから……。ひどすぎるだろ！俺じゃなかったらどうすんの？死ぬかと思っただわ。)

(普通はそれで死ぬんだよ……。)

(なんで俺がこんな目にあってるんだ……マジ笑えるわ。こんなの廃人時代以来だ。)

(それだけの事をしたからだよ。)

(いいか？お前は裏切るなよ？これ以上弾を使わせないでくれ。)

(ネットで情報を流すよりはるかに金をくれるから従うが……。)

(そろそろだよ……。これだけ追い詰められたのはB O Tフヘイト以来だが、そろそろ変わる……。)

(金はしっかりと支払ってくれるんだろうな?)

(安心しろ。そろそろ綺麗な綺麗な人間の、もっとも汚い部分が見れるぞ。)

(そんなものは見たくないのだが……。次は少し多いぞ。連合の小国に団体で入っている難民がいるらしい。)

(さっさと教えろ……。もうすぐアリカが終わるんだ。腹いっぱいラーメンが食いたい。)

通信を切り、情報があった場所へと向かう。こんな風に振舞ってはいるが、実際普通の人間に、能力が追加されただけのような存在だ。包帯で隠れているが、目には大きな隈ができ、頬は大分痩せこけている。

何を考えてか、この事態の逆転を起こそうと、琢磨は薄ら笑いを浮かべ次のポイントに向けて移動した。「もうそろそろだ」と呟きながら。

あれから更に2週間。逃げては狙撃し、また逃げるをひたすら繰り返した。この一ヶ月で、100年間で味わった分を遙かに超すような、ギリギリの状況まで追い込まれ続けたRD。世界を敵に回すということの行為を、嫌というほど思い知らされた。

この世界は、奇麗事を言っている連中ばかりではない。富や名声のために、平気で他を犠牲にするような連中も少なからずいる。「RDがああ森にいるかもしれない。」この情報だけで、森ごと焼き尽くすような過激派も少なからず存在する。

しかし、誰も目の前まで辿り着けなかった。あわやと言う場面は、それこそいくらでもあった。それでも、誰もRDを目にすることはできなかった。気づかずに10m横を通り過ぎていった警備隊。意図してかは知らないが、精霊砲をRD周辺に放った戦艦。探査で見し、転移が間に合わなければ見つかった。といった状況が続いた。

だが、見つからなかった。見つからずに、オスティアの難民を、周囲の人間ごと殺し続けた。これにより世界は、おそらくアリカが想像していたものとは違う方向に向かい始める。

逃げ続けて3週間辺りで、少しずつではあるが、オスティアの難民を受け入れるのを拒否する小国が出始めた。宿屋などではなく、国が拒否をする。それは敗北を意味する行為。国が、たった一人を相手に白旗を降り始める。

決意が揺らぐ。いつまでも好きにさせてはいけない。生かしてはおけない。この世界は自分達で守らなければ。強い決意を持って、それこそ死すら覚悟して、世界の未来のためにRDに挑んだ者達が、白旗を振る。『恐怖』。死すら覚悟していたはずの決意を、崩壊させるような、全てを塗りつぶす『恐怖』。

世界が結束して、探索を行い、見つけれない。姿を誰も見ることができない。だが、確実に人は死んでいく。「紅き翼」の時も、こ

のような状況であったが、あの時は戦時中であり、結束していたわけでもない。今とは微妙に違う。世界が力をあわせて、それでも見つけられず、自身の国にオステイアの人間を入れれば、それに関わった者達が皆殺しにあうというありえない状況。

一ヶ月もすれば、アリカが思い浮かべた光景とは絶対に違う光景が写る。オステイア難民は、連合諸国から完全に見捨てられた。どこにいても受け入れてもらえず、それどころか、RDの探索自体をやめる国まででてくる始末である。

人間とは、群れる生き物である。群れていることにより、無類の強さを発揮する。その群れが揺らぎ始め、誰かが逃げ始めるとなると途端に弱くなる。

RDの情報を出してくれたのはありがたいが、それとこれとは別問題。「誰かがきつと何とかしてくれるだろう。」人間が最後に辿り着く思考である。ようは他人任せ。自分達がやらなくても、「誰かがなんとかしてくれるという、想像上の、それこそ「誰か」にすぎりつく。そうなれば後は落ちるだけ。

アリカは人間と言うものを知らな過ぎた。宮殿からほとんど出ず、少数の汚い人間達を見続け、それを上回るような大多数の強く生きる人間を見て生きてきた。

種族などの違いはあるが、少数の汚い人間以外は、この世界を愛し、この世界のために戦える人間であると思ってしまった。違うのだ。人間なんて、いつまでも綺麗なままじゃいられない。強くはいられない。

どうしようもない事態に陥った時は、どうしようもないと諦めてしまふ者が大半なのだ。そのような状況で、強く結束した世界の住人を知ってしまった。世界の危機を救ったみんなのことを知ってしまった。だから勘違いをしてしまった。

どうしようも無い事態に陥った時の人間は本当に弱い。皆が皆、アリカのように思考し続けられるはずがない。闘おうとする意思を、根こそぎ攫っていく『恐怖』。いつ自分の番が来てもおかしくないと思わせる、RDの本気。

オステイアに関わりさえしなければ、自分の命だけは助かると、魔法世界の住人達が考え始める。一人が恐怖に負けて受け入れを拒否すれば、後続が次々と続く。

「ああ……長かった。ねみいし、腹が減って死にそうだ。見るよアリカ。これが現実だよ。英雄だとか、世界や国を愛すとか、戯言もいいところさ。」

そうして、静かな静かな、それでいて歴史上最も圧倒的に見えた戦争が一ヶ月半過ぎた今、おそらくこうなるだろうかと予測していた事態になる。20km先では、オステイア難民が一箇所に集められ、キャンプのような集合体を作っている。

ようするに、生贄状態である。連合に属する国は完全に匙を投げ、RDによる被害をこれ以上増やさないために、生贄を何箇所かに分けて集めた。たった一人、その一人に連合は完全に白旗を振ったのだ。

今までの悪事を全て認めた上で、匙を投げた。世界の未来よりも、自分の命を取った連合諸国。現在、琢磨をまともに追っているのは、裏の人間、正義感に溢れた連合の少数の人間、帝国、アリアドネーであるが、帝国とアリアドネーも初期に比べると、明らかに数が減っている。

あれだけ結束したように見えた世界が、目に見えない恐怖に屈していく。「死にたくない。」この一言に押しつぶされていく。皆の希

望であった「紅き翼」にいたっては、魔法世界での目撃情報すらで
ていない始末である。

「おっと、逃げるのはなしだ。」

当たり前だが、住人だって生贄だという自覚がある。転移で逃げよ
うとするものも後を絶たない。もちろん、琢磨一人でカバーできる
わけではないので、ある程度の人間は逃げることに成功する。それ
が余計な希望を持たせる。

もうこんなところに居たくは無いと、転移を使えるものや、普通に
逃げ出すものが出始める。他を犠牲にしても、自分だけはこの人
間が。

人間の汚い部分が露出する。何人かは、遠距離からの狙撃により消
し飛ばされるが、何人かはその場から脱出する。脱出する術が無い
子供等を残しながらも。キャンプの一つは、もはや希望も何もあつ
たものではないだろう。我先にと、逃げ出すものが後を絶たず、そ
の半分以上が死に絶え、残ったものは何か諦めたかのようにただ生
きている。

「さあ、そろそろファイナルだ。早く来いアリカ。」

このキャンプ地に限り、すでに普通とは違う殺陣で困っている。上
空の陣に、炎から救い出した『世界樹』の陰陽符を5枚も使用した、
最高級の陣を敷いている。維持するのが大変なことにより、転移数
事態は減ってしまうのだが、王家の魔力なるものを完全に押さえ込
む方法を思いついてしまったために、使わざる負えなくなった。

「きたきた。まあ俺が居るって情報があれば来るか。あつちは僅かながらのアリアドネー。それに帝国の戦艦一隻ね。数減りすぎだろ。運営様ボロ負け過ぎる。」

支援物資を運んできたアリカ御一行が、生気の無いキャンプに到着する。よく見てみると、キャンプだけではなく、今到着した者達も、お世辞にもいい状態であるとは言えず、アリカにいたっては本人か？と思ってしまうほどやつれている。

やつれてはいるが、今だ毅然とした態度は崩さないまま、支援物資を配る準備に入り、キャンプ地の人間達も集まり始める。

「やりすぎた……。あれ売り物になるのか？まあ、なんか食わせれば大丈夫だろ。最後だ。妖精を弄んだ罰を受ける。」

最後の詰めが始まる。王家の魔力自体はどうしようもないので、琢磨が選んだ方法は精神的に逆らう気をなくすといったもの。支援物資を受け取るうと、アリカに近づいた人間を狙撃。そこから動き出そうとした帝国、アリアドネーに狙いを定めると同時に、上空の転移陣を起動させる。

転移させる物体は巨大な岩。その岩に、手榴弾をいくつか埋め込んだもの。それを上空に打ち上げ、手榴弾を撃ちぬく。すると何が起こるのか……。

「あつはは。オステイア再びだな。折れとけアリカ。お前はやりす

きた。まあ俺のほうがやりすぎてるけど……。」

巨大な岩が降り注ぐ。転移などで逃げようとするれば、撃ち抜かれ、これだけの岩を撃ち落とす魔法をとっさに使えるような使い手など、そうそうにいるわけもなく、必死になりながら逃げまとう。

二ヶ月前に、全力で救おうと動いてくれた力が、襲い掛かってくるアリカの周辺を除いて、意図的に、アリカに降り注ぐ岩なんかを砕いていく。こんなところで死なれたら、なんのためにがんばってきたのがわからない。逃げ出そうとするもの、アリカの近くに寄ろうとするものを優先的に狙っていく。

まさしくオスティア再びである。魔力が使えるという点では違うが、この状況では大して変わらない。向こうではどのような会話がなされているのだろうか。アリカは呆然と座り込みながら、上空から降り注ぐ岩をただただ見つめ続けている。

岩が降り注ぎ、狙撃が止まる。琢磨から見ても、地獄のような光景が広がっている。アリカはこれを前にして何を思うのだろうか。

「終わったな……。あと何箇所かあるキャンプ地は残しておいて、これでおしまいだな。おつかれさまだった。ggg。」

ここで全部を終わらせて、自殺させることすらさせない辺り、ダメな部分の心得がありすぎるRD。魔法世界の何かをへし折った男は、久しぶりに長めに睡眠しようと、その場を後にした。

あれから2週間がたち、あのキャンプ地は生き地獄と化している。もはや、あれだけ怒り狂っていたアリアドネーや帝国すらも撤退し、RDは手がつけられないと魔法世界で判断され、消化試合のように、だらだらとキャンプに貼りついている。

やっていることは単純。もはや誰も探しに来る気配すらないような状態なので、落ち着いて、冷静に、支援物資を受け取ろうとしたものや、逃げ出そうとしたもの、アリカに近づいたものを狙撃する。ただそれだけ。

食料もなくなり、逃げ出すことすら許されない、そんな状況でアリカは動くことすらできない。2週間もなにも食べられないような状況なのだ。極限状態にて、人間は全てがむき出しになる。わけもわからず暴力を振るうもの、命がけて支援物資に手を出すもの、全てを諦めて自殺を試みるもの。

ここでほんの少しの気まぐれで、支援物資に手を出した者を生かせばどうなるか？地獄の完成である。そのものから何とかして食料を奪おうと必死になるオスティアの人間。アリカの目の前で、一緒に戦おうと言っていた人間たちが、僅かな食料を賭けて戦い始める。それを止めようと近づけば、近づかれた人間が撃たれる。カオスとはまさにこのことであろう。

「よく見とけアリカ。お前が守ろうとした未来なんてこんなもんだよ。な？あほらしいだろ？だから逃げて楽しく暮らせばよかったのにさ。まあどこいってもいっしょだけどね。」

この現状を作り出した人間は暢気なものである。契約不履行に対する当然の処置程度の考えであろう。ひでえもんだな〜くらいに考えていた時に、おそらく連合の戦艦であろう船が、オステイアのキャンプに降り立ち、アリカだけを連れてさっさと出て行ってしまった。

「ありゃ？なんかあったんかね？」

外の情勢など、何一つ知らない。困った時のry

(なんかアリカしょっぴかれたんだけど、何やったの?)

(…本気で言ってるのか?お前のせいだろう。)

(また俺のせいだよ。もう飽きたよ。)

(これだけのことをしておいてよく言う。お前と言う存在が黙認されるなんて、夢にも思わなかったよ。)

(しかたないさ。結束の力よりも、俺のチートのほうが上だったっただけだ。ほんと…どこ行っても迷惑だよな。チートってやつは。)

(何を言っているのかわからないが…お前への供物として、処刑されるそうだよ。)

(いやいや、死体とかもとめてねーよ。なに勝手なことしてるの?)

(俺に言わないでくれ。あの王女の最近の呼び名を知ってるか？『災厄を呼ぶ女王』だとさ。皮肉な者だな。正しいことをした王女が、国民にすら嫌悪され、『災厄』そのもののお前が、世界から黙認されてるなんて。)

(お前はどつちの味方だよ。)

(金をくれる方の味方だな。)

(俺とかわらねーな！。そういうのいいと思います！！)

(それはどうも。処刑はいつになるかわからないが、まあやる時は見せ付けるようにやるだろうな。)

(ふ〜ん…んじゃあそれまで待つか。売った後に文句つけられるのもやだし。めんどくさいから死んだことにしよう。お前は旧世界で買ってくれそうなやつ探して来い。写りがいい写真使えよ。今のままじゃうれねーわ。)

(どこまでも容赦ないな…。未恐ろしいよ。)

(馬鹿みたいに高い符を使わされ、契約不履行、弾も底を尽きかけ、おまけにここ二ヶ月碌な生活してないんだ。なるべく高く買っていくるやつ探して来い。多少遅れても文句いわねーからさ。俺は寝るわ。)

(まあ、金さえ貰えるならやるけどな。)

(ほんとお前いいわ〜。人間らしいよ。)

「お前に言われてもまったく嬉しくないな。じゃあ俺は行ってくる。」

（頼んだ〜。）

「さつて、新しい家でも探すか。小屋でも建てたいけど見つかりそうだな。なんかしょっぱい国のポロアパートでも借りとかか。さすがに大家さんが一流で、障害を見破ってくるとかはないよな。警備兵も減ってるだろうし。いくか。」

どこまでも暢気に、魔法世界すら屈服させた男は、久々に屋根の下で寝ようと隠れ家を探す。情報屋に期待を寄せながら、いくらで売れるのかを楽しみに、その場を後にし潜伏する。その日が来るまで。

「あゝ2年も待たされるとか思わなかったわ。まじ意味わからん。でも結局買い手見つかってないしな…。世話する手間が省けたと思えばいつか。」

現在琢磨はケルベラス渓谷という、アリカの処刑場として選ばれたこの場所は、魔力や氣を一切発生させることができない、魔法使い

を殺すために存在するような谷である。普段、谷底の森には、世界中で最も凶暴な獣達が、いつ餌が落ちてくるかと唸り声をあげて待っているのだが、今日に限っては魔獣は襲い掛かってこない。いるにはいるのだが、それどころではないとでも言うかのように、その場に居るRDには目もくれず、何かを必死に喰いちぎっている。

「よく噛んで食ったほうがいいらしいぞ。俺ってば魔獣に好かれすぎてやばいな。ハンターにでもなれそうだ。おっ、落ちてきた。」

上から、今日処刑されるアリカが落ちてくる。それを、【絶対等速】イコールスピードを使って、うまく抱き寄せる。アリカは見ただけでわかるほどボロボロになっており、落ちてきてからずっと目を閉じたままである。さすがにおかしいと思ったのか。ゆっくりと目を開け始め、目を見開き、辺りを見渡し、ありえないものを見るかのような顔をしている。

「2年ぶりだな。元気だった？」

「ああああああああああ。ああ…あ。」

「いや…ああああとかに言っただ？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。」

「いや、意味わからん。大丈夫？」

R Dの顔を見て、変な声をあげ、辺りを見渡し、涙を流しながら謝罪を続ける。その間にも、辺りで魔獣が何かを租借する音がし続けている。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。」

「何に対してあやまつてんのか知らないけどさ。契約不履行ってのはよくないと思うよ？こんなのは子供ですらわかるだろ。」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。」

「あのさ、まだオスティアの難民結構残ってるの知ってる？俺お前が捕まった後、一応潜り続けてたんだよね。だから、あのキャンプ以外のやつは結構残ってたりするんだよね。」

「うあ…ああああ…。」

「そんな人たちのためにも、なるべく従ってほしいかなって思ったり思わなかったり。なんであんなことしたのか知らないけどさ、俺基本無害だから。な？頼むよ。」

「ああ…ごめんなさい…ごめんなさい…。」

R Dが淡々としゃべる中、アリカは周りを見て発狂している。もう何が言いたいのがよくわからない状態なアリカ。誰が見ても、これ以上の反抗など起きるはずもないだろうと確信できるほど、涙を流しながら周りに向けて謝り続けている。

「結構俺もつらかったしさ。莫大な金だってかかったわけよ。精一杯高値で売れるようにがんばれよ？ここまで来るのに莫大な金がかかったんだ。お前の体安くないんだろ？期待してるわ。」

周りの魔獣は見向きもしない。必死になってそこらじゅうにある何かに牙を向けている。アリカはもう言葉で言い表せるような状態ではなく、終始泣きながら『ごめんなさい』と呟き続けていた。

16 撃目 Side & quot ; RD & quot ; ; (後書き)

アリカ崩壊END。誰かアリカを助けてあげて……。

オリジナルストーリーは難しいです；；

人間なんてこんなもんじゃね？つてのを書きたかったです。これ以上ひどくは書けませんでした。脳内補完でお願いします。

感想などは、なるべく返していきたいと思います。時間がかかるかもしれませんが、返信はすると思います。

最後に、本当にどうでもいい情報ですが、仮免無事一回で合格しました。よろしければ、祝福してやってください。

Someday I want to run away

To the world of midnight

Where the darkness fills the air

Where it's icy cold

Where nobody has a name

Where living is not a game

There, I can hide my broken heart

Dying to survive

There, no one can see me cry

There fears of lonely soul

I'll find peace of mind

In the dark and cold world of

midnight

始めて会った時は、テオドラを奪還しに来た時。会話の中で、薄ら寒い思いに捕らわれたことは今でも忘れない。そのままの流れで、あやつらの隠れ家についてくることになった。あの場所で、私やあやつらが信じてきたものを粉々に砕いていった。

その後も、説得のために何度も関わった。くやしいが、あの外道の力は莫大な物。自分が信じてきた「紅き翼」^{アラルケラ}を嘲いながら、弄り続けられるほどの力。少しでも高い可能性を求めて、何度も何度も説得を繰り返したが、最後まで自分で動くということはなかった。

結局、この魔法世界を守るため犠牲にした民への被害を最小限に抑えるために、あの力に手を出してしまった。くやしかった。死ぬほど悔しかった。この世界をどうでもいいと切り捨て、下品に笑いながら好き勝手しているような男に頼らなければいけないような事態を作り出してしまったことが。頼らなければ、民を満足に救うこともできないような自分の力のなさが。今後のことを考えれば、間違いないく殺しておいた方が良かったはずなのに、それでも殺せなかった自分が。

この戦争は何だったのだろうか。あの最低の外道が言うには、予定調和のごとく進んだ戦争。沢山の者達が傷ついて、泣いて、死んで、何かを失った。自分にいたっては、国を失った。そのせいで、帰る場所を失った何万もの難民が、住む場所もなくその日の暮らしをしている。

そんな現状を作り出した男の所へ行き、これから慰み者になるのだろうか。吐き気がする。しかし、どうしようもないのも事実。もう契約をしてしまった以上、私が逃げられることはないだろう。あれだけの力を持ちながら、今だどれほどの力を隠し持っているかわから

ない男と契約をしてしまった。

私はもうおしまい。心残りは民のこと。民の今後のことも決められないまま、おそらく日の光を見ることは2度とないという現状。これが心残りにならないといえば嘘になる。

そしてもうひとつ。天真爛漫で、やる気になつたら急に男らしい顔へと変化する赤毛の馬鹿の顔が思い浮かぶ。申し訳ないことをしたと謝罪したい。散々振り回しておきながら、最後の最後で切り捨ててしまった。

あの時の顔は、一生忘れられないだろう。いつもの謎の自信に満ち溢れた顔ではなく、捨てられまいと必死にアピールを繰り返す子犬のような、何かが崩れそうになるのを必死に押さえながら、私の名前を叫び続けた赤毛の男。

恨まれて当然。殺しに来てくれたっていいとすら思う。最後の最後には、恥も外聞も捨て、今まで使ってきた者たちを捨てて、最低の外道に頼ってしまったのだから。

弱くなったなと自分でも思う。あの宮殿で生き残るために、女であること、人であることを捨て、王であることを選り続けてきた。自身に、こんなに人である部分が残っていたことに驚き、戸惑いつつも、でもそれがどこか嬉しくて。

矛盾していると思う。いらない物を捨てたはずなのに、それが残っていたことに喜びを覚える。あの馬鹿に出会ってから、どこか調子がおかしくなっている。今までの自分ではありえないようなことが平気で起こってしまう。でも、そんな状態もいいなと思っている自分かわからない。

一言、あやまりたい。民に、戦いに出向いてくれた者たちに、こんな自分を守るためにがんばってくれた英雄達に。叶わないと知りつつも、そう思ってしまう。

(この扉をくぐったら、本当におしまいじゃな。)

呼び出されたホテルの一室の前で立ち止まる。体を条件に動かしたのだ。行かなければならないが、それでもなかなか足が動かない。あんな最低なやつに、これからいいようにされるとわかっていて、嬉々として足を踏み出す方がおかしい。

(なぜあの馬鹿の顔ばかり浮かぶのじゃろうか……。)

この部屋の前に来てから、赤毛の男の顔ばかりが浮かんでは消える。いつも隣で元気をくれた男。9をとるために切り捨ててしまった1。最低なのは私も同じ。こんな時に浮かぶのが、民ではなく一人の男の顔だなんて、王失格どころではない。

(本当に……弱くなったものじゃな……。)

「入るぞ。」

「おお。遅くね？焦らしプレイってやつ？俺未経験だからそういうのレベル高くてついていけねーわ。」

目の前にはソファに腰掛、ふざけたことを抜かす最低の外道。視界に入れただけで憎悪が膨れ上がる。この世界のために犠牲になって

しまった民が大勢居て、つらい思いをしている者ばかりの中、なぜこんなやつがこんな良い部屋で暮らしている？私が国を犠牲にして苦しんでいる中で、なぜあれだけのことをした本人が、何も気負わずに笑っている？なぜ？どうして？
ナゼコイツガヘラヘラトワラッテイル？

「……。」

「うおい。シカトは寂しいよ。てかさ、これからご主人様になる俺に対してシカトってどうなの？」

「……なぜじゃ。」

「あん？」

「なぜそんな風に笑ってられる!?!」

「はぁ？今更どうした急に。」

「わかっておるのか？貴様のせいでこの世界は滅ぶ寸前だったのじやぞ！本当に自分でやったことをわかっておるのか!?!」

「死んだやつの事なんかどうでもいいだろ。そんなどうでもいいことより、今を楽しもうぜ。」

「貴様……。本当に沢山の人が死んだ。何度も言うが、本当になんとも思わないのか!?!もはや背負うとかじゃなくともよい。死んだ者たちに対して、本当に何も思ったりすることはないのか？私は国を犠牲に、この世界を救った。認めたくはないが、貴様のおかげで被

害は最小限に抑えることができた……。それでも……。それでも情けない気持ちや、申し訳ないという気持ちで押しつぶされそうになる！」

「……………」

「何か……何か思うことはないのか!？」

「ぎゃはははは。まじいつまで悔やんでるんだよ。ほんとどうでもいいわ。死んだやつのことを考える時間なんて無駄だろうよ。んなことしてたら俺年老いて死んじゃうわ。……まあ年とらねーけどさ。」

本当に殺してやりたい。どんなに酷い殺し方をして、こやつだけは心が痛まないといい切れる自信がある。私も最低な人間だろうが、目の前の男によりはましたと言い切れる自信がある。

「……………殺してやる。」

「それはご主人様という台詞じゃねえな。俺の奴隷足る者常に優雅に、時に笑顔で、みんなに元気を与える存在じゃねーとな。まあその辺は追々教え込むか。とりあえず……………」

首輪を取り出した目の前の男。これを付けた瞬間に、アリカという人間は死に、名もない奴隷としての生活が始まるのだらう。頭がうまく働かない。こやつは、国を滅ぼす原因を作る手伝いをしていた男で、大事な何かを壊していった男で、それでいて民への被害を最小限まで抑えてくれた男。

わけがわからなくなる。殺してやりたいと心から願っているが、心

のどこかでしていいはずのない感謝をしている自分がいる。

(それももつとどうでもよいな……。皆、幸せになってくれ。)

「はい装着 王女奴隷アリカの誕生だ。なんかパーティーでもするか？あつはははははは。」

首輪がはめられる。もう目の前の男に逆らうことはできない。じゃが、この身一つで、民達が笑って暮らせるのなら、それでよいのではないだろうか。王として、最高の判断が下せたのではないのだからか。もついい。どうせ何を考えたところで、どうしようもするところがない。

(なぜこんな時に思い浮かぶのはナギの顔なのじゃ……。)

「超似合っじゃん。まさしくお前が装着するために作られたといっても過言ではないな。」

「……………」

「またスルーかよ。まあいいや。どうせ逆らえないんだしな。とりあえずあっちのベッドに直行な。初めてだし、優しくリードしてくれよ？」

「……………」

少しくらいは抵抗してやりたい。何でも思い通りになると思わせた
くないと考え、ふとおかしなことに気づく。体が自由に動く。なぜ
？首輪は確かにはめられているのに。あやつという言葉が、強制力を持
たない。ベッドに向かわなければならぬはずなのに、体は別に動
きもしないし、どこもおかしなことがない、いつもの体。

（王家の魔力か…？なぜじゃ…。なぜこのような時に限って、願
いが叶ってしまう…。これでは…諦めきれぬではないか。）

強制的に、なすがままだったら、もうどうしようもないと投げ出し
ていた。民のため、体を捧げる覚悟をしてここにきた。なすがまま
にされて、一生を終える覚悟をしてきた。そうしなければいけな
かった。それ以外に、民を助ける方法がなかった。

なぜ？なぜこの場面で、ルールを敷いてくれない？なぜ抗えるいう
選択肢を残す？民の顔が思い浮かぶ。国を失ったのにも関わらず、
気丈に笑い飛ばしている強い民達。そういった者達の顔が浮かぶと
同時に、戦争で消えていった者達の顔も浮かんでくる。泣いている
者。絶望している者。諦めている者。この戦争で犠牲になってしま
った者達の顔が、浮かんでは消える。

（皆の痛みを少しでも…少しでも味あわせてやりたい……。でもそ
れをしてしまったら…。）

「なんだ？最後の最後まで焦らしプレイってやつか？ってかありえ
なくね？首輪はめたのになんで……。んだよこれ。不良品ってやつ
か？適当に誰か拉致って試してみるか。」

「な、なにを言っておる!？」

「何って、不良品かどうか確かめようとしてるだけじゃん。」

「そのためだけに、誰かを連れてくる気か!？妾が従えばよいだけであろう。連れてきた者はどうする!」

「性能確かめてから売るかな。別にお前一人いればいいし。首輪効かないとこえーしな。」

こやつと言っていることが、本当に理解できない。なぜそれだけのために、他人を犠牲にするという発想ができる?なぜそんなことのために、他人の人生を壊すことができる?こんなやつに…こんなやつに壊されていい人生なんて、あつていいはずがない。平気でこんな発想がでてくるのがありえていいはずがない。狂ってる。手を出してはいけない。わかっている。理性ではわかっているのに、腹の底から憎悪が込み上げる。王として、民を守るために、我慢しなければいけない。じゃが、アリカと言う人間の感情が止まらない。皆が苦しんでいる中、こんなやつが…なぜこんなやつがなにも気負わず生きている?誰よりも罪深いはずの男がなぜ…
ナゼタノシソウニイキテイル?

「……。」

「んだよまじで不良品か?てか誰にしようか…ルームサービスでも頼んで運んできた人にでもするか。」

「…して…る。」

ホテルから出て少ししたところで、頭が冷えてきて立ち止まる。

「はあ…はあ…。」

(私は何をしている…?)

このまま逃げてどうする？体を捧げる覚悟をして、王として契約をしたはずだ。世界を救うために国を切り捨てた人間が、自身の体を捨てるのにためらいを見せ、怒りに身を任せて殺しにかかり、あるうことかそのまま逃げるなどあっていいはずがない。

(本当に…何がしたいんだ私は。私は…まだ人間であったのじゃない…。)

「戻ろう。戻って、地に頭を付けて謝ろう。最低の外道じゃが…
契約は契約じゃ。」

自分は、アリカと言う人間ではなく、ウエペルタイア王国の王女アリカ。人であっていい立場の者ではない。契約は守ろう。今から謝り続け、一生の服従を誓えば、おそらく許されるであろう。許されなければ、許されるまで謝り続けよう。首輪なんてなくても、絶対に逆らわないことを誓おう。

ここで逃げたとしても、あやつは追ってくるだろう。それも、周りを巻き込むやりかたで、私が最も苦しむようなやりかたで。

あやつは性格上、おそらく自分に敵対の意思がないことを見れば、それ以外の者を傷つけるようなことはしないであろう。そんなこと

が、なんとなく確信をもてるほどの付き合いがあるのが、また嫌なものであるが。

「まだ時間は立ってないな……。もう少しで契約破棄をしてしまうところじゃった……。どちらが最低かわからぬな。」

「いえいえ、あなたは最高ですよアリカ様。最高のタイミングで離れてくれました。」

「何者じゃ!?!」

ホテルに戻り、謝罪をしに行こうとした時に声をかけられ、振り返ると同時に意識が遠のいていった。

「……ここは? なんじゃこの鎖は!?!」

「お目覚めですか、アリカ王女。」

「誰じゃ!?!」

意識がなくなる前に、口に何かを当てられ、目が覚めたら牢に繋がれている。一体何が起きている？こんなところにいる場合ではないというのに。目の前の男は、口元に嫌らしい笑みを浮かべたまま、こちらを見続けている。

「この手枷や鎖を今すぐはずすのじゃ！妾が誰かわかっておるのか？」

「ご存知ですよ。今は亡き国、ウエペルティア王国の王女アリカ様でしょう？」

「貴様…元老院の…。」

「ええ。覚えていておられましたか。」

「何のつもりじゃ…？こんなことをして許されるとでも思っておるのか？」

「……。」

「いますぐこれを解くのじゃ！妾はこんなところにいる場合ではないのじゃ！」

「知っていますよ。あなたは今すぐここから抜け出して、RDの元に行きたいのでしょうか？あなたに消えられると、多少困った事態になるので、何人かを付けさせてもらいました。ですが最高のタイミングで飛び出してくれましたね。まさかRDと繋がっていたとは。しかもあのような契約で…我々からすれば、嬉しい限りですよ。」

「なっ！！？」

なぜそれを知っている？それを知るのは、自分以外では「紅き翼」とRDだけのはず。目の前の男は、もはや笑みを浮かべるところではなく、今にも大笑いしそうなほど、顔を歪めながらこちらを覗きこんでいる。

「アリカ様。最初に聞いておきます。黄昏の姫巫女とともに封印された場所の最奥部。そこに至る方法を教えていただけませんか？あなたの記憶で、その部分だけはどうやっても抽出できなかったのですよ。」

「言うわけなかるうが！！今すぐこれをはずすのじゃ！」

「……そうですか。それは残念です。」

「当たり前じゃ！それよりもこれを早くはずすのじゃ！こんな所にいる間にも、民が「ええ。その通りですね。」

「アリカ様。この5人に見覚えはございますか？」

「この者達は……妾の……。」

「ええ。あなたの近衛兵に近い5人です。長年あなたに従い続けた数少ない者達でしょう。顔は良くご存知のようです。」

目の前の男は、そんな事は言わなくてもわかつているとも言つかのように言葉を遮る。男は一体何を考えているのか、もはやRDよりも狂気を感じるような笑みを浮かべ、私に従ってくれた数少ない兵である5人の男達の写真を見せ付ける。

「我々はね、困っているんですよアリカ様。」

目の前に映像が映し出される。映像の先には、隙間から血が流れている5つの箱。なんなのじゃこれは？映像の隣では、狂気的笑みで5枚の写真を見せ付けてくる元老院の男が。

「あなたは、丸一日寝ていたんですよ。ああ、ご安心ください。RDはまだあなたもしておりませんよ。けしかけたこの5人以外は、未だ被害0です。」

こやつは一体何を言っておる？状況が理解できない。困っている？けしかけた？被害0？

「あなたと同様、私達もRDには困っているのですよ。あれほど怖い存在もないうえに、金もほとんど持っていないかれ、おまけにいらぬものまで大量に残していつてくれた。」

そして目の前のスクリーンには、自分が映し出される。見間違えるはずもない、絶対にいるはずのない、ありえていいはずがない光景

が写る。映し出される自分は、とても悲痛そうな顔をしている。こいつは誰だ？なにをしようとしている？あの箱は何じゃ？いらぬもの？

「どうにかして消してやりたいのですが、失敗した場合の報復があまりにも恐ろしい。そこで考えついたのですよ。周りと協力してRDを追い詰めることができ、尚且つ失敗したとしても、被害が我々には及ばない、それどころか我々にとって有益になって返ってくる夢のようなアイデアを。」

「……何をしようとしておる？」

「アリカ様の記憶を見せていただきました。体を捧げて、民を守るとは大変ご立派です。一度は揺らいでおりましたが、最後は、あのような者との契約をしっかりと守ろうとしておられました。王の鏡ですな。」

「記憶じゃと…？」

『ここに居る者、これを見ている者たちに聞いて欲しいことがある。』

映像に映し出されている自分が、急に演説を始める。何かを決意したような顔で、自分ではない自分が、カメラに向かって話し始める。

「我々も、このようなことはしたくなかったのですが……。アリカ様、今一度お聞きします。先ほどの問いに答えるつもりはございま

「せんか？」

「言うわけなかるうが！貴様らはこの世界を巻き込んで何かをするつもりじゃろうが、そのようなことは絶対にさせん！」

「そうですね。それは残念です。」

『妾は覚悟したはずだった……。だが、どうしても無理だった。あやつにだけは……あやつにだけは体を許したくなかった。』

話している間にも、演説は進む。スクリーン上の自分が心境を語っている。その通りであった。そして、一度逃げ出そうとしてしまった。

じゃが、間髪入れず戻ろうとした。私は戻って王の勤めを果たそうとした。一瞬だけ、『人』であろうとしてしまった。それでも、すぐに思い直して戻ろうとした。

『そのせいで、死ななくてもいい者達が死んでしまった……。妾のせいじゃ。妾は絶対に地獄に落ちるであろう。』

違う。私は、戦おうと、責務を果たそうと、戻ろうとしたんだ。こやつは誰じゃ？何をしようとしておる？

「RDは本当に怖い存在です。下手に手を出せば、国が滅ぶレベルでの報復を受けるでしょう。」

「何を…何をしようとしておる。」

「我々には現在余裕がないのですよ。具体的に言つと、どこかの誰かが必死になつて救い、現在難民となつてゐる者達を養つほどの余裕がね。ですが、ここで見放すとなると下の者たちがうるさいのです。国は民によつて成り立つ者ですからね。我々は、下の者たちの力を甘く見たりはしておりませんよ。バカな者ばかりですが、それゆえに扱いやすく、また時に牙を向くものです。」

「何を言つておる！！妾が国を…民を犠牲にしなければ、この世界が危なかつたのじゃぞ！」

「ええ。ですが、その話はもう終わったのです。結果だけ見れば、行き場のない難民が数え切れないほどできてしまつたという戦争です。そこで考え付いたのですよ。我々にとって、どのような結果になつてもプラスにしかならないようなアイデアを。」

「……………」

「たとえばの話ですが。契約破棄をして、おまけに暗殺者を送り込むような相手がいた場合、RDはどう行動するかわかりますか？」

「よせ……………」

「ましてや、その破棄をした相手が、自身の持っている情報を世界中に流せばどうなるか。更に演説で、100年以上情報が出なかつた者の情報を出し、周りに助けを求めらるるよう訴え始めればどうなるか。RDの情報を皆が知ることとなり、うまく演説でまとめることができれば、世界とRDはどう動くか……………」

「貴様：何を言ってるのかわかっておるのか！そんなことをしたらどうなるかわかっておるのか！？」

「わかりますよ。アリカ様も、それが起きた場合何が起こるのかわかっておられるから、こつやつて焦っておられるのでしょうか？実際のところ、我々はRDを消すことを、半ば諦めているような状態なのです。まあ、消してくればありがたい話です。ですが、恐らく無理でしょうな。今までのあいつの性格上、消されるのはオステイアに関係している者でしょう。念には念を入れて、あの5人までけしかけたのですから。」

「どこまで…もう民は十分苦しんだ！これ以上追い討ちをかけるなんて、貴様らは人間か！！？」

「RDは、ある意味必要悪かもわかりませんね。使いやすく、読みやすい。何をしてくれるのか、手に取るようにわかりますよ。素晴らしい作戦だと思いませんか？世界が一つになり、あいつを追い詰める。あいつは難民を消す。報復を受けるのは、アリカ様と縁のある者たち。それでいて、世界中にRDの情報を流すことができ、今後殺せるかもしれない確率もあがる。どうです！？我々への被害は少なく、それでいて莫大な有益をもたらしてくれる！失敗しても、あなたを処刑するようにすればいいわけです。元々、父親や国の件で捕らえる予定でしたので、何も問題はありません。」

「はずせ……今すぐこれをはずすのじゃ……！！！」

『じゃが……貴様も一緒に堕ちてもらっぞ。』

「止める。今すぐこやつを止めるのじゃ……！！！」

「何を言っておられるのですか？私に、アリカ様を止める権利なんぞあるわけないでしょう。」

「よせ…頼む。これで苦しむのは民なのじゃぞ…。」

「では場所を。最奥部に至るまでの道を。」

言える訳がない。世界を消し去れる可能性を持つ、黄昏の姫巫女の居場所を教えることと同意なのだ。連合の上の連中が知ったら、どうなるかは想像するのが難しくない。

もう十分すぎるほど苦しんだではないか。なぜここにきてまで、追い討ちをかける？あの地獄から生き延びて、その後は、それを埋め合わせするほどの幸せがあってもよいではないか。なんなのじゃこの仕打ちは。あまりにも、あまりにも救いがなさ過ぎる。

「…あやつを止めるのじゃ。そしてこれはずせ。」

「見殺しと言うわけですね。本当に…残念です。」

「頼む…。これではあまりにも…あまりにも報われないではないか…。」

「後あなたができることは、RDを誰かが殺してくれることを祈るだけですな。まあ、どの道あなたは父親と国の件で処刑されることになっておりますがね…。」

「やめろ…。」

「この世界のために犠牲になった者たちじゃぞ！！それを保護しないほうが間違つておる！」

「ですから、連合に属する国は金がないのですよ。あの愚か者達は、この不毛だった戦争のせいで疲れきっております。どの道あなたは生贄にする予定でしたので、この状況は非常にありがたいものです。あなたを頭として、RDの情報を流すことができた。これだけでも非常にありがたいことです。あの編集した映像を見てください。見事でしょう？勝手ながら、英雄達のことは伏せさせていただきます。有望な将来の駒が、英雄に憧れないとなると、我々も困った事態になりますからね。うまく情報操作をして、RDと接触して、唯一生き残り世界を救った英雄として、祭り上げようかと考えておりますゆえ。あの英雄達も、なぜか旧世界に向かったという報告がありますし、もう一度挑むことも無いでしょう。話によると、生気の抜けたような顔をしていたらしいですよ。何があったのか……。」

「民は、民は関係ないじゃろう……。妾一人でよいではないか……。」

「貴方一人が犠牲になったところで、数百万の難民が消えるわけではないのですよ。」

「こんなこと……こんなことあってはならぬ……。」

「もうどうしようもありませんよ。理想としては、難民を全滅まで追い込んだあとに、RDが死ぬというのですが……。どうなりまじすかな。まあ、あなたの国以外を皆殺しにするという発想はないでしょうね。ありがたい限りです。」

「出せ！今すぐここから出すのじゃ……！」

「周りにもある程度被害は出るでしょうが……。その辺はしかたがありませんね。その程度で、あの難民達を消してくれるのなら安いものですね。」

「まだ…まだ間に合う…。頼む、こんなのあんまりではないか…。」

「次に来る時まで、教えていただけるとありがたいですな。そうすれば、運がよければ被害が少ないままで済むかもわかりませぬ。では、ごきげんようアリカ様。」

「出せ！出すのじゃ！！！！！」

あれからどれだけの時がたったのかわからぬ。あれから、あの男は度々私の元を訪れ、RDが生き延びているということだけを報告し、場所を言わないとわかると、颯爽と消えていくということを繰り返した。

外の状況がわからぬが、RDが生き延びている以上、民は今も殺され続けているのである。報告に来るあの、男の顔が日に日に笑顔を増していくのを見ると、想像してた通りのことが起こっているのである。

なんなのじゃこれは？一瞬でも、「人」に戻ってしまったからなのか？あそこで逃げなければ、このような結果にならなかつたのか？

もう少しだけ早く引き返せば、こんなことにはならなかったのか？ いや、付けていたと言う事は、遅かれ早かれこうなっていたのである。RDと関わったことが知られた時点で、この流れになるように情報を操作されるに決まっている。

ではどうすればよかった？あの英雄達を信じて、最後まで頼ればよかったのか？魔力も氣も使えない地で、ただの人間であるあやつらに頼ればよかった？そうすればこうはならなかった？否、それも違う。どの道私を生贄にするつもりだと言っておった。では誰にも頼らず、私だけで済ませるべきだった？それも否、私が捕まることが決まっていた時点で、難民を進んで助けるようなつもりもないのであろう。

この戦争の責任、国を滅ぼしたことも含め、私に全てを擦り付けて消しにかかるつもりであったのだろう。どうすれば正解、民が安心して暮らせるような道に辿り着ける？私が生きていても、こうなってしまう目の前にも行かない限り、RDによって民が殺され続け、私が死ねば、RDにより民が報復と称して殺される。

私はどうすればよい？私は生きていても、死んだとしても、民を安心させるどころか、害を与えることしかできない。なぜ？なぜこれ以上民を苦しめる？もう後は幸せだけでもよいではないか。散々苦しんだ民に、なぜこれ以上追い討ちをかける？

バカらしくなってくる。『王』だの『人』だので悩んでいたが、結局どっちも一緒。自分に関わっただけで、ただそれだけで死んでゆく。自分は死ぬこともできず、生きていても害を与え続けるだけの存在。狂っていく。わけがわからなくなる。私は何なのだ？なぜ生きている？なぜ死んでいない？なぜ、なぜ…ナゼウマレテキタ？

「お久しぶりですねアリカ様。」

「……」から出せ。」

「そのことでお話があつて、こうして足を運んだのですよ。あなたは強情ですね。ここまでしてしゃべらないとは……映像もしっかりと見せた方が良かったのでしょうか？見せない方が、頭で色々考えるので効果的だと思つたのですが。」

「はやくこれを……まだ、まだ助けられる。」

「もう無駄ですよ。外はあなたが思っているよりも、はるかにひどいことになっていきます。何人の難民が生き残れるのか……。すでに大分数は減っていますが、この先は更にひどくなるでしょうな。これでRDも消えてくれれば、我々としては最高なのですが……そううまくはいきませんな。」

「まだ、まだ助けられる……。」

「大分おかしくなっていますね。まあそのことでお話があつてきたのですよ。一度外に出てもらい、現状を知っていたらどうかと。」

「早く、早くこれを解くのじゃ……！」

「現状をその目で見れば、我々に話しやすくもなるでしょう。ああ、ここでのことを外で流さない方がよろしいと思いますよ？まあ我々が情報を消すまでもなく、今の貴方が出す情報など、誰一人信じないでしようがね……。」

「なんでもよい！早く！こうしている間にも民が……。」

「その目で現状を見てきてください。どうせ死ぬことはできないでしょう。我々にあの場所の情報を話せば、RDも消すことができるかもしれないということもお忘れなく。」

「誰が話すものか…はやくはすすのじゃ！」

「おい、アリカ様を丁寧に移動させる。」

奥から、鎧を着込んだ兵が2人表れ、一人が私の口元に布を当てる。すぐに意識が朦朧とし始め、私は意識をなくした。

「……は…?」

目を開けると、国を失ってから使っている仮住居の光景が目映る。おそらく、あの後運ばれたのであろう。久方ぶりに鏡に映る自分の顔を見る。もはや、やつれてきってしまったていて、以前の自分とは似ても似つかない。

「誰か！誰かおらぬか！！」

「……失礼します。」

兵の一人である男が、すぐに部屋に入ってくるが、どこか自分を見る目がおかしい。まるで、敵でも見るような、憎悪を抑えきれないような顔で、私に近づかず、離れて睨みつけている。もうこれだけで、およそ何が起きているのか想像ができてしまう。

「よく来てくれた。頼む…理解できぬであろうが、何も考えず現状を教えて欲しい。」

「現状を……だと…？」

「頼む。何も聞かずにおす」あんたのせいで……！！！！！！」

「あんたのせいで、俺達がどんな目にあってるのかわかっているのか……！！？」

兵は、王家の者に対するような言葉遣いをしておらず、悪魔でも見るかのような顔をこちらにむけている。全てを教えたい。私がやったことではないと、声を張り上げて叫びたい。じゃが、今更それをしたところで、意味がないことくらいわかりきっている。何があったのかはわからぬが、恐らく偽者は皆をけしかけるために動いていたのだろう。そんなことをしていた王女が、今更この状況になつて真実を出したところで、誰がそれを信じる？もはや完全な言い訳以外の何物でもない。

あの最低の外道どもの情報機関を持ってすれば、情報ごと消すこと

すら容易く、いいように操作されて終わり。下手に誰かに話せば、その者もおそらく消されてしまうであろう。これ以上誰かが苦しむなんて事は、あってはならない。

「頼む…。何も聞かずに、全てを話してくれ。」

「何を話すって言うんだ？何が聞きたい？『呪われた民』の話か？あの悪魔のことか？それとも『災厄を呼ぶ王女』のことか？」

「ありのまま…ここ1月の間の話を。頼む…。」

現在、戦艦の中で、RDが狙っているという難民キャンプの一つに向かっている。その後、兵に頭を下げて聞いた話は、まるで地獄のような内容であった。私が始めた戦争。最初は、世界が団結してRDを殺そうと動いていたが、RDがオスティア難民、それに少しでも関わった者のみを殺し続け、そして生き続けているらしい。

皆が力を合わせても、姿を見ることがすら叶わない殺し屋。いつしか連合に属する小国が、難民の出入りを完全に禁止し始め、そこからはあつという間の崩壊だったらしい。それに伴うように、連合全体での出入りの禁止。

帝国も、アリアドネーも、動いてはくれるが、街に入れるまでは至

らず。そして、連合が難民を何箇所かに分けて集めさせ、そこで勝手に生き抜くようにと宣告したという。

オスティアの者ではない者達は、難民を『呪われた民』と呼び、一部の者以外は、もはや近づくとすらしようとせず、避け続け、いない者とも思っただけで生活をしているらしい。

R Dは他を狙わず、オスティアと関係した者、近くに寄った者以外一切攻撃を仕掛けなかったという。これだけの状況で、そのようなことができるということが、返って恐怖心を呼び、今では菌向かおうとする者がほとんどいないという。

そうして、キャンプは見放され、もはや地獄のような光景になっているらしい。

食料すらまともにならない状況と言うことで、物資をキャンプに届けようと、必死に声をかけ、動いてくれたアリアドネーの小隊、帝国の戦艦1隻と共に、キャンプの一つに到着する。

(この者たちが……この者たちが何をしたというのじゃ。)

地獄。それ以外に言葉が思い浮かばない。死体がそこらじゅうに放置され、生きている者も、死を待つ家畜のように、ただ生きているだけ。頭が真っ白になる。世界のために犠牲になろうとしていた英雄達が、世界に受け入れられず、病原菌のように隔離されている。

私が生きていても、死んでいても、死に怯えなければならぬ民達。なにが悪かった？ どうしてこのようなことになっている？ 私が体を捧げようとしたから？ 私と少しでも関係をもつてしてしまっただから？ 私が王族だから？ 私が生まれてしまったから？

（どうすれば…私は何をすればいいのじゃ…。）

「アリカ様、とりあえず物資を配りましょう。」

「…そうじゃな。皆の者、物資を持ってきた！全員に行き渡るようにあるはずじゃ。落ち着いて、受け取りに来て欲しい。」

ゾロゾロと、列が作られ始める。皆、私を恨むような視線を向け続けながら、物資を受け取ろうと、アリカの前に集まり始める。

恨まれるのなんて、当然であろう。仮に私が死んだとしても、RDに殺されるか、受け入れる余裕のない連合によって締め出され、過酷な状況で生きなければならぬのだから。じゃがあそこでRDと契約しなければ、ここにいる民たちはもしかしたらいなくなつたかもしれない。私が生き続ければ、あれだけ火のついた外道のことじゃ。どの道飽きるまで殺し続けるに違いない。連合か、RDか、どちらかだけならばどれだけ良かったのだろうか。

どうしようが、逃げ場がほとんどない民と私。魔法世界を守るために、民を守るために全力を尽くした結果がこれだ。そして、自分達のことばかりを考え、民のことなど駒程度にしか考えていない者たちが、この状況を見て高笑いをしておるのだろう。

頭が狂ってしまふ。なんなのじゃこれは。こんなことが、こんなことがあつてよいのか？

（せめて民だけでも…一人でも多くの民を。）

物資を手渡そうとしたとき、近くにいた人間の首から上がなくなつた。いきなりのことで、頭が働かない。周りも呆然とそれを見続け、

急に我に返ったように悲鳴を上げる。

「RDだああああああああああああああああ。」

「魔女が災厄を呼び寄せたああああああああ。」

「魔法も使っていないし、逃げたわけでもないのに!!!」

もう頭がまったく働かない。上を見上げると、オスティアの時とまるで同じ、岩石がいくつも降り注ぐ。魔法を使おうとした者、転移で逃げようとした者、私に近づいた者は、狙撃され、それ以外のものは強大な岩石によって押しつぶされていく。

悲鳴が辺りで響き渡る。こんなことも、連合の予定通りだとも言うのだろうか。もし神というものがいるのなら、この状況を許すのか？どう転んでもつらく、半ば死を待ち続けるだけの民。死ぬことすらできず、民が滅ぶまで生き続けなければならぬ私。

もう足掻けば足掻くほど、より強く絡まる蜘蛛の巣にかかってしまったのだろう。いつかかったかはわからぬが、絶対に抜け出すことのできない巢に。

「ああああ…もう…やめてくれ……。頼む……。誰か、誰か助けて…。」

誰に聞こえるわけでもないのに、自然とそんな言葉が出てしまう。守りたかった民に罵られ、罵った民達が消えていく。罵られるだけならどれほどよいか。生きているのだから。

あの、地獄から全力で助け出した。あれを生き延びた民が、地獄を一度体験した民が、もう一度同じ目に合っている。助けなくてはいけないのに、近づいた者が殺され、ただ見ていることしかできない。岩石の雨が止む。もはや悲鳴をあげれるほどの者がいないような状態。そこらじゅうに無残な死体があり、生き延びた者も無事な者は一人もおらず、周りの死体を見ても何も反応も示さない。

「すまぬ…すまぬ…。」

「あなたの…おまえの…オマエノセイダ。」

赤子の死体を持ちながら、近づいてきた女に一言。最大の憎しみを込め、オマエノセイダといわれ、その女性も頭から血を流し倒れる。

「あああああ…あああああああああ」

その日、その時、その瞬間、私と言う存在は死んだ。

「アリカ様、これが最後です。どうか話していただけませんか？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。」

「ちつ、ここまでやるとは…RDめ、やりすぎだ。記憶の抽出もできなかつたし、これ以上先延ばしにすると、我々にまで襲い掛かるかもしれん。……ここが限界か。」

あれから、何が起きたのか良く覚えていない。気づけば牢に繋がれていて、今は処刑されそうになっている。どこにいようが、やることは変わらない。何かに対し、ひたすらに謝り続けている。何に對して謝っているのかは、もはや自分でも思い出せぬが、絶対にこうしなければならぬ気がして、ひたすらに謝罪を繰り返している。

「歩け。」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。」

目の前には、底が見えない谷。ここに落ちれば、楽になれるのか？もう謝らなくてもよいのか？だとすればそれは…幸せなのではないのだろうか。

周りで見ている者からすれば、凶器の絵であろう。笑いながら、ためらいもなく谷に飛び降りるような人間が移ったのだから。

（楽になれる。もういい…もう疲れた。）

目を閉じ、幸福感すら感じながら飛び降りる。その瞬間を、今か今かと待ちわびながら。しかし、いつまでたっても、その瞬間がこない。そのかわり、全身に鳥肌が立つような、おぞましい感触に包まれる。これがそうなのであるうか？
いや、これは何かがおかしい。気になって目を開けると

「2年ぶりだな。元気だった？」

「ああああああああああ。ああ…あ。」

なぜ、なぜ死なせてくれない？なぜ今になって現れる？色々な想いがよぎっては消えをくりかえす。何かを言っているが、ほとんど耳に入っていない。ここは、魔獣が住む谷ではないのか？周りでグチャグチャと、何かを噛み締める音がする。

餌ならここにあるのに、一匹として襲い掛かってこない。辺りを見渡すと、見渡す限りの死体。死体。死体。

首がない者。体が原型をとどめていない者。腐っている者。赤子、子供、女、男、老人。ありとあらゆる、難民の死体の山。魔獣たちは、それらを一生懸命喰らっていて、自分には一切の興味を示さない。

まるで、関わりたくも無いとでも言うように…。

「あのさ、まだオスティアの難民結構残ってるの知ってる？俺お前が捕まった後、一応潜り続けてたんだよね。だから、あのキャンプ以外のやつは結構残ってたりするんだよね。」

今なんと言った？まだ生き残りがいる？それなのに私は、その者たちを置いて逃げようとしていた？幸福感すら感じながら？頭がおかしくなる。もう何も考えたくもない。

もういい。またいつも通り、いつも通り、許されるはずがない罪に対して、謝り続けるだけ。それがどのような罪なのか、自分でもわからないが、それでもひたすら謝り続けるだけ。

生まれてきてごめんなさいと。

なるべく軽く書きましたが、予告どおりの鬱でした。所詮、素人の妄想です。ある程度は流してやってください。

散々叩かれたアリカさんの裏側です。少しくらい弱くてもいいじゃない…そっちの方が守りたいって思いますね。もう手札がないです。出し尽くしました。予想通り？予想外？アリカさまあ？何でもいいです。もう一度言います。誰かアリカを助けてあげて…。

屑だらけな小説。踊らされるのはRDも同じ。人間だもの。ただ、あいつはそれを知っても何も思わないでしょうね。元老院は死に晒せ。

次のナギのお話面白くないと思います。原作で悟りを開いてた2年間を、ちよい壊れた風に書いてみるだけです。

まあこれが面白いかといわれれば、なんとも言えませんが。そろそろ本気で感想に返事書きます。明日から本気出す。

もし元老院死ねとの要望が多少あった場合は、壊れたカゲタロウ先生がパラレルワールドで意味もなく無双をするという謎の に入ります。

最後に、赤城山さんまじ勘弁WWWすごいっす。

お久しぶりです。忘れていた方も多いことかと思しますので、少しばかりこのSSの流れを説明します。

このSSは、気持ち悪い男が、気持ち悪いことをしまくり、それを見かねた読者と筆者と英雄が一丸となって、気持ち悪い男を倒す旅に出るといふ気持ち悪いSSとなっております。気持ち悪い物が嫌いな方は、すぐにブラウザを閉じて、シュタインズゲートをやってください。

助手まじかわいすぎて何かが壊れていくうううううううううううううううう

助手からのメールを、気持ち悪い顔で何回も見直したのは、僕だけではないでしょう。何あの態度とメールの違い。反則すぎワロタW

W
W
W

え？なんでみんなRD側にいくの？……紅き翼と一緒に戦おうよ！！

「今、この瞬間も苦しんでる人達が大勢いるんだ！学校なんて行ってる場合じゃねえ！」

俺は何でもできると思ってた。学校の成績は良い物とは言えなかったが、成績がいいやつが俺に勝てるかと言われれば、間違いなくNOと言えた。生まれ持った膨大な魔力に任せて、適当に魔法を唱えるだけでどんなやつにだって勝てた。別に、他のやつらを見下すこととかはしなかったが、それでも学校はダルかったし、退屈していなかったといえは嘘になる。

でっかい戦争が魔法世界で起きた。魔法世界全土を巻き込むような馬鹿でかい戦争。最低だが、困っている人たちの助けになりたいと強く願うと同時に、心のどこかで俺の力で暴れてやりたいと思ってしまった。

気づいたら、学校を中退していた。周りを見渡しても、俺に勝てるようなやつはいなかった。そんななか、学校に律儀に通うなんてアホらしくなった。

だってそうだろ？学校の勉強なんてしてたところで、困っている人を救う助けになるなんてとてもじゃないが思えなかったし、俺の力があれば、今すぐにでも連合を救えると信じていた。

教師や周りのやつらは、最後まで俺を止めようとしていた。「お前はまだ子供なんだから、戦争になんて参加してはならん」「力だけではどうしようもないこともあるんだぞ！」だとかほざいてたな。俺より年下のやつでも、参加してるやつはしてる。自分の意思か、はたまた強制かはわからないが、そんなやつらもいるってのに、黙ってなんかいられなかった。

途中、かけがえのない仲間とであった。みんな、自分の力に自信を持っていて、世界を救いたいと願って集まった最高の仲間達。実力も文句なし。みんな俺と同じくらいの力を持っていた。

楽しかった。俺は、俺に並ぶようなやつらがいるって事だけで、すげー嬉しくなった。戦争は悲惨な物だったが、仲間がいればどんな困難にも立ち向かえると思ったし、事実、俺たちは勝ち続けた。

話によると、俺ら「紅き翼」^{アラルブラ}が連合につく前に、一人連合のために戦って、帝国を押し戻すほどの活躍をしたやつがいたらしい。田舎者の俺は聞いたことなかったが、仲間たちはその名前に驚いていたのを今でも覚えている。

だが、そいつは助けるかわりに膨大な報酬を要求していき、連合に金がなくなつたのがわかると、すぐさま手を引いたらしい。

とんでもねえ野郎だと思つたね。もう暮らすのに困らないどころか、下手すれば国を作れるってほどの金を得ておきながら、なおも搾り取ろうとするなんて。この戦争で苦しんでいる人たちを目の前にしながら、そんなことを平気でするなんて、ハツキリ言わなくても最低な野郎だ。

俺らが魔法世界に行った時には、連合はもはや壊滅状態だった。そいつがいなければ勝てない。だが膨大な金がかかる。削れるところなんておのずと限られてくる。こんな状況ですら、上の連中は自身の保身と、どうにかして自分だけでも利益をなんて考えてやがるんだ。

じゃあどこから金を出す？決まっている。国民に使うべき金を削るしかなくなってくる。そうして金が尽きる。そうになると、被害をこつむるのは何の罪もない人たちだ。

だから俺たちは戦った。見返りを何も求めず、連合のために戦った。

そして勝ち続けた。俺達は、こつちの世界でも最強だった。気づけば、周りからは英雄として扱われ始めた。ファンクラブなんてものまでできたらしい。

いつの間にか、名前の後ろに「様」がつくのが当たり前になっていた。最初のころは恥ずかしいのと、嬉しいのとで複雑な気持ちになっていたが、それも時がたつにつれて当然のようになっていった。

そして、出会いもあった。仲間達との出会いと同じくらい大事な出会い。始めて見た時は、おつかねえの一言だったね。仲間の一人が話しかけて、下種呼ばわりされていたのにも関わらず、「ありやあいい女だ。」と言っていた時は、遂に完全に頭がおかしくなったのかと心配してしまった。

だが、一緒にいるうちに、いつの間にか目で常に姿を追うようになっていた。たつた一人で、色々な物を背負っていたその人を、恥ずかしいが、なんとしても守りたいと思うようになっていた。

そしてもう一つの出会い。こいつさえいなければとどれだけ考えたかわからねえ。始めてちゃんと対面したのは、姫さんが「完全なる^{コヌモエンテ}世界」の連中に捕まって、それを救出しに行った時。

あいつは、姫さんと一緒に捕らえられていた帝国の第三皇女を救出に来ていたらしい。全身を包帯で巻き、やる気のないだらけきつたような雰囲気。魔力も気も人並み。それでいて、人間なのに帝国についているし、第三皇女がやたらと気に入っていたんで、物珍しさに気になってはいいた。

そこから先は忘れてたくても忘れられない出来事が沢山起こった。皆で一致団結し、世界を救おうぜってなった時に、突如大笑いを始めた。どこまでも耳障りな声で笑い続け、いきなり第三皇女を撃ちやがった。

自分を助けた女の子を平気な顔をして撃った。ぶっ殺してやろうと

思った。だが、俺が動くよりも先に、仲間の一人が簡単にそいつを切り捨てた。

あつけないと思ったね。だけどそれもしょうがないのかもしれない。切り捨てたやつや、元政府の人間、それについてきた弟子を味方に加え、俺たちは間違いなく最強の集団になっていた。これだけ人がいる中で、これしか実力がないのに、よくこれだけのことができたもんだと思っていた時に、ラカンの腕と足が吹き飛んだ。

は？と思うと同時に、自分達が唯一撤退した戦いで出来事を思い出した。俺が喰らったわけではないが、飛び道具に対して無敵だと思っていた仲間の剣士が、何をされたかもわからずに負傷させられたあの戦い。

すぐさま反撃に出ようと、皆動き出してからは、本当に地獄だった。詠春の時は、やむをえざるの撤退だったが、今度のは違う。本気で倒しにかかって、最強だと思っていた俺らが、何をされたのかすらわからずに負けた。

信じられなかった。これだけの力を持つてるやつがいるって事もそうだし、そんなやつがこの戦争中おとなしくしていたのが何より信じられなかった。

だが、今となつては負けたという事実はさして重要ではなかった。忘れたくても忘れられないのは、この後のこいつの言った、この戦争と俺らについて。

生かされていた。都合よく適度に殺してくれるからありがたい。バランスを保つのに使いやすい。笑いながら言つてのけた。信じられないわけがない。そいつの言うことが事実なら、この戦争は仕組まれていて、一つ一つの戦いごとに、勝敗が決まっているかのような言い方だ。

信じられるわけねえだろ？俺らがいようがいまいが、勝敗なんて目の前の男の気分一つで左右されてしまう。じゃあなんで俺らが生き

ていられるのか。都合がいいから。何も言わなくても、いい仕事してくれる殺戮人形。

この戦争で苦しむ人たちのためにも、一刻も早く戦争を終わらせて、この世界を平和にしようと思つた俺たちが、戦争をなるべく長引かせたいと考えている連中に感謝されている。

頭の中が、生涯で一番グチャグチャになっていたのを今でも覚えてる。あれほど誰かを殺してやりたいと思つたのは、最初で最後だと断言できる。自分が信じていたものが、崩れてしまいそうだったのを、繋ぎとめてくれたのは、守りたいと思つていた姫さんや、今までがんばってきた仲間達だった。

次に話した時は、なんとかして味方につけようと説得しに行つたときだ。あんなやつには頼りたくはなかったが、持つてる力は膨大なもの。味方につければ、魔法世界の行く末を左右する戦争の勝率も跳ね上がる。

姫さんは、最後まで迷っていたが、それでも魔法世界のために説得に向かった。俺達がついていながら、あんな野郎に助けを求める姫さんを見るのは、すげーつらかった。

結果は散々だった。聞く耳を持つ持たないの話ですらない。ちゃんという意味が通じてるのか疑問になるほど、話し合いにすらならなかった。

このときにこいつに言われた「同類」と言う言葉を、このころからずっと考え続けてた気がする。俺は、俺たちは、自分を正義だと信じて戦い続けてきた。人も沢山殺した。でもそれは、俺達の方が正しいという確固たる意思があつたゆえの行い。世界を救うためにしかたのないことだと割り切ってきた。

その確固たる意思が、あっけなく砕かれた。RDの話を知っているのと、もはや何が正しいのかがまったくわからなくなった。あいつは

笑いながら、まるでどうでもいい事だとも言うかのように話していたが、それが余計に俺の中の何かを壊していった。

「俺とお前達で何が違うの？」

まるで当たり前前のことを言うかのような態度。心底そう思っているからこそ来る余裕。あるいは、正義も悪もまるつきり興味が無いだけかもしれない。だが、RDの言うことが全部事実だとしたら、果たして俺とRDで何が違うのだろうか。

RDは金を貰い、人を殺す。俺は、『正義』と言う名の何かのために、戦争に出続け、人を殺し続けてきた。

じゃあ『正義』って何だろう。”立派な魔法使い”のこと？俺は、連合では英雄扱いだ。遠からず、”立派な魔法使い”になるだろう。でも、英雄扱いなのは戦争に出て、勝ち続けたからで、その戦争は作られた物で、勝敗も最初から決まってる命がけのお遊びのような物で、俺らが出続けたおかげで、戦争を作ったやつらが高笑いをする。その俺が”立派な魔法使い”？『正義』？頭の中が、グルグル廻る。

自分達の調査で、RDが言っていた事が全て事実だとわかった。じやあ改めて考える。俺らは何だ？向こうも、戦争に出てきた以上、死ぬ覚悟はあつただろう。でも、その戦争は作られた物で、覚悟もせざるをえなかっただけかもしれない。

手のひらで踊らされ続けるただの人形。俺らは、ちょっとだけ力を持ったただの人形。使い勝手のいい殺戮人形。

頭の中でいくら違うと否定しても、そういった考えが永遠とループし続ける。困っている人を助けるために、この戦争に参加した。俺の力があれば、みんなを救えると信じていた。事実、連合の人間は、

大分救えただろう。だが、それと同時に、帝国側に大打撃を与えた人を救った分人を殺した。困っている人を助けるために、同じ数の困った人を作り出してしまった。一体、どれだけの人間を殺したのだろう。戦艦を1隻沈めただけで、どれだけの人が死ぬのだろう。その名前も知らない一人一人に、少なからず繋がりが存在するわけで、その人が死ねば、悲しみに嘆く者、絶望に堕ちる者が出てくる。当たり前だ。生物は、少なからず繋がりが存在する。それが存在しない人間などいるはずがない。

こんな簡単な事に気づくのに、時間をかけすぎた。

結局、RDと俺とで何が違うのか、答えは出ないまま最終戦争に突入した。この戦いに勝たなければ、この世界が消滅してしまう。心のモヤモヤが消えていかなかったが、この戦いに勝たないと、助けってきた人まで消えてしまう。そんなことになってしまったら、それこそ俺たちは何がしたかったのかわからなくなる。だから、全力で戦った。この世界を消させないために。

そして、そこでもあいつに出会った。最後に会ったあいつは、もはや俺の事なんか見てすらいなかった。あつという間に現れ、俺のことなんて見向きもせず、あつという間に殺して去っていった。

その後の戦いには、結局姿を現さなかった。口ではこの世界なんてどうでもいい。あいつにさえ復讐できれば、それで満足だとか言っていたが、最後には戦ってくれろと思っていた。

まだ、どこかで信じていた。あるいは否定していた。自分さえ戦えば、何千万もの命が救える可能性が大幅に上がる。それを知っていて、それでも出てこないなんてことは無いと思っていた。口では言いたい放題言っているが、そんなことは実際ありえないと思っていた。

スイートルームがもつたいないからという理由で、交渉をはじめ、

決裂したと思えば、じゃあもうどうでもいいやとでもいうかのようになくなっていった。信じられなかった。本当に人間なのか？と疑いなくなった。

もはや俺の目には、人の形をした何かにしかならなくなった。

その後の黒幕との戦いのことは、正直よく覚えていない。死ぬ気で戦った。頭の中がグチャグチャで、世界のこととかよりも、姫さんのことを想って戦っていた気がする。戦いが終わったら、姫さんや姫子ちゃんと一緒に色々な所に出かけて、二人に世界を見せてあげようとか考えていたと思う。

そして勝った。俺たちは世界を救った。その日のうちに、英雄として讃えられた。連合、帝国問わずに。帝国からすれば、俺らは世界を救ったと同時に、自分達の大切な人を殺した殺人鬼だと思っただ。実際は違った。誰も俺らを責めることなく、口々に讃え続けた。『英雄』と。

俺はそれが無性に怖かった。殺されることすら覚悟して、みんなの前に出た。だが、誰一人俺らを責める者はいなかった。これだけの人がいれば、絶対に俺らに復讐心を抱いている人物は存在する。

絶対にこんなのはおかしいだろ？俺がどれだけの人を殺したと思っ
ているんだ？この戦争で、俺たちはこの世界で忌み嫌われているRDと同じくらいの人を殺した。この世界を消し去る儀式を止める働きはした。だけど、そこに行くまでに大量の人を殺した。

一人くらい何かを言いに来るかと思っただが、結局最後まで讃えられただけで終わった。怖かった。世界を救おうが、何をしようが、大量の人間を殺したということには変わらない。なのに、誰もそのことについて触れない。操作でもされてるんじゃないかと思うほど、不自然なほど、誰も口にしない。死んでしまった人のことなど、忘れてしまったかのように騒いでいる。

俺はおかしくなっちゃったのだろうか？もう人の考えさえ作られた物のような気がしてならない。この戦争とあいつのせいどころがおかしくなっちゃったのか？なんで誰も俺を批判しない？なんで俺を当たり前のように『英雄』って讃えてる？ちよつと前までの俺はなんで俺はそれを疑問に思わなかった？あいつにもし出会わなければ、俺はこの状況で笑っていられたのか？あれだけの人間を殺した俺が？『英雄』？

否定したくても、考えれば考えるほど、俺とあいつで何が違うのかわからなくなる。金を貰おうが、自分の正義のためだろうが、人殺しは人殺しだ。戦争だからとか、そうしなければこつちが危なかったとか、色々理由はあるけど、それでも人を殺したんだ。

もうこの世界が気持ち悪い物に思えてしかたなかった。いや、ただ事実から逃げたかっただけかもしれない。とにかくこのときは、姫さんと姫子ちゃんのことしか考えてなかった。あの二人が笑ってくればそれでいい。笑って生きてくれればそれでよかった。笑って生きていけるようにしてやりたい。そんな最後の願いも、次の日に壊された。

魔力衰退現象。魔法世界のために、姫さんは自分の国と国民を犠牲にしようとしていた。気づけなかった。気づいたところで、何もできない自分の力を憎みすらした。それでも、何かできることはあるはずだと、仲間とオステイアに向かった。

そして、そこでの姫さんとの通信で、信じられない物を見た。

「やい、アリカてめえっ！！どういうこつたコレは！？」

「ナギ…見ての通りだ。世界を救う代償に、自らの国を滅ぼした。

案ずるな、童もいずれ遠からぬうちに地獄へ墮ちる。」

「…ッ！なんで話さなかった唐変木！！」

「話しても無駄であろう。戦いしか脳のない主が一人で何の役に立つ。」

その通りだ。行った所で、魔力がない俺にできることなんてたかが知れてる。それでも、頼って欲しかった。信じて欲しかった。そして……。

「くそッ…今からそっちへ向かう。待つとけてめえ。」

「ここにそなたの力は必要ない！！」そのとおくり。「」

画面に、もつとも見たくない物が映る。人を嘲う笑みを浮かべ、こっちの反応を楽しむかのように話しかけてくる。

「昨日ぶりってやつかな？やあ英雄。」

「なんでてめえが…なんでそこにいやがる…」

なんで？なんでそこに俺じゃなくあいつがいる？

「いやさ〜、王女様がお前らが使えなさ過ぎてやばいとかいって俺に泣きついてきたんだよね。ほら、俺ってば女の泣には弱いからさ。」

「ふっざけんなよてめえ。」

「まじまじ。王女様も私の全てをあ・げ・るとか言ってたし。やっば男って見た目じゃないよね〜。大事なのは中身だぜイケメン。」

「嘘ばっかほざいてんじゃねーぞ!」

「ワタシウソツカナイ。」

まともに思考できなくなる。何言ってるんだこいつは。なんで姫さんは何も否定しない？

「おい姫さん!何とか言ってくれ。こいつこんなふざけたことしてるぞ。」

「……。」

「おい…姫さん!黙ってねーで何とか言えよ!」

「ぎゃっははははは。だからまじだつて言ってるじゃねーか。ここからは「完全なる世界」の筋書きにはねーんだよ。てめーらのレールは終わった。そこで行き止まりだ。後は指加えて安全なところで見てるよ。」

「姫さん…。」

「ナギ…そなた達には世話になった。童が言えた事ではないが…幸せに生きてくれ。通信終了。」

「ぎゃははははは。あばよ、英雄。飽きたら売ってやるから楽しみにしとけ。」

「姫さん！姫さん！！！」

なんだこれ？俺が必死に守りたかった人は、力が足りないとわかると、あっけなく俺を捨てた。国民を助けるためにはしかたないのだろう。あいつならそれが可能なだろう。だけど、頼って欲しかった。信じて欲しかった。

幸せに生きてくれ？俺はあんたと姫子ちゃんが笑っててくれれば、それで幸せなんだ。それが幸せなんだ。もう、『英雄』って呼ばれても、幸せどころか嫌悪感しか感じない。あんたが笑ってくれるなら、それでもいい。なんでそんなつらそうな顔なんだ？なんで泣きそうな顔をしてるんだ？

なんで俺に姫さんを助ける力がないんだ？世界最強の『英雄』。こんな称号で喜んでた俺をぶっ殺してやりたい。本当に守りたい人に頼りにされず捨てられ、残ったのは『英雄』なんていう道化の称号。殺戮人形に与えられる称号。

この日、俺の中の何かが粉々に砕け散った。

あの通信が切れてから、俺はどこかおかしくなった。いや、元からどこかおかしかったんだろう。じゃなければ、戦場にあんなに嬉々として出向くわけがない。考えればおかしいことだらけだ。ちよつと前までの俺は何を考えて生きてたんだ？世界を救うことに酔つたのか？『英雄』と呼ばれて、なんであんないい気になつてたんだ？最低の屑の癖に、なんであんなに笑つていられたんだ？「完全なる世界」との戦いになる前に、確かに俺は、何も考えずに戦場に出続けてた。それが、連合のためだと信じて。別に帝国に恨みがあるわけでもない。俺はこの世界の出身じゃない。ただ人間にいたただけだ。何も深く考えずに。そして、数え切れない、当時は数える気すらなかったほどの命を奪った。

それが「正義」だと思つて。当時の俺に聞いてみたい。「正義って何だ？」って。そしてその場で殺してやりたいとすら思う。俺は命を奪つていいほどの人間じゃない。

「使い勝手のいい殺戮人形。」この言葉が頭を駆け巡る。否否否否。違つて否定したい。俺は違つて否定したい。

あの通信が切れてから、俺たちは、俺はすぐに故郷に戻った。もう魔法世界にはいられなかった。何もかもが気持ち悪くなった。どうでもよくなつたつて言つてもいい。頭の中が真っ白で、何も考えられなくなつていた。

仲間達が着いてきて何か言つてたが、もうどうでもよかつた。何を言つていたのか、覚えてすらいらない。魔法世界のことを考えるだけで、吐き気がこみ上げるほどになつていた。

真つ先に生まれ育つた村に戻ってきた。理由があるわけじゃない。ただここに帰りたくなつた。何もかも忘れて、ゆつくりしたい。それだけを考えて戻ってきた。仲間たちは、それぞれ思うところがあるだろうが、俺を気にかけてくれた。

「なあナギよ。あんな屑に言われたことなんか、あんまり気にしすぎるなよ。」

「ナギ……今からでも戻つて、復興を手伝いましょう。」

「ナギ、俺も思うことはあるが、今はやるべきことがあるだろう。復興まで終わってから、そこで戦争は終わるんだ。」

「……。」

みんな俺を元氣付けようとしてくれるんだろう。俺は今どんな顔をしているんだろう。その優しさすら、うつとおしくてしょうがなかった。村についても、励まし続けてくれた。何も知らないやつらからすれば、戦争を終わらせた英雄が勢ぞろいで現れたことになる。

「ナギ!! やつたなおい。みんな!! ナギが帰ってきたぞ!!」

ましてや、そのリーダーは、村を騒がせ続けた悪ガキである。村人たちは、あつという間に周りに集まってきた。

「お、世界を救った英雄「紅き翼」じゃねーか。よく帰ってきたなナギ！」

「あの悪ガキが世界を救う英雄になるとはな。こりゃナギ様って呼ばなきゃだめか？あっはっは。」

「なぎだあ。サインちよーだーい。」

村人たちは、こぞつてナギを褒め称える。魔法世界と同じように。大人は英雄と讃え、子供はサインをねだってくる。空っぽの頭に響き渡る。『英雄』という言葉。グチャグチャになる。ナギは幽鬼のような表情で、一番前にいた男に話しかける。

「……………な。」

「ん？すまんすまん聞こえなかった。」

「え……………ぶな。」

「おいどうしたんだナギ。世界を救った英雄がそんなボソボソしゃべって。恥ずかしいのか？あっはっは。」

「……………ナギ？」

明らかに様子がおかしい。一番長く旅をしてきた詠春はナギに話しかけるが、ナギの様子はおかしくなるばかりである。

「みんなを困らせ続けたお前が、まさか本当に英雄になるとはな〜。飛び出した時はどうなるかと思ったが、みんな心配してたんだぞ。」

「お……えい……呼ぶな。」

「おいおい本当にどうしたんだ？そつだ、親父さんに顔見せに行つてこいよ。なんなら呼んでこようか？一番心配してたんだぞ。それからスタンのじーさんな。あれでお前が生きてたになったこと喜んでたんだからな。あのガキが英雄なんて〜とか愚痴つてたんだぞ。話し相手になつてやれよ。」

急いで2人を呼びに行こうとした男の肩を、それまでピクリともしなかったナギが掴む。その時点で、様子がおかしいナギを見て嫌な予感がする。とりわけ付き合いの長い詠春は、もうナギの動きを封じようと動くこうとしていた。

「お、おいナギ。ほんとにどうしたんだ？肩結構痛いんだが。英雄様の力で握られたらたまつたもんじゃないぞ？」

その一言で、ナギは幽鬼のような雰囲気顔をあげ、腕を振りかぶり

「ナギよセツ！！」

「俺を英雄って呼ぶなああああああああああああああああああああ」

この日、かつてこの村を騒がせ続け、夢と希望を持って旅立った少年は、戦争を経て、夢も希望もプライドも、何もかもが粉々に砕かれ、かつての面影を欠片も残していない、壊れた状態で帰還した。

2年。この2年、何をしていたか思い出せない。村の酒場に入り浸っていた気もするし、家で布団に包まって震えていただけのような気もする。何も考えたくなかった。誰ともしゃべりたくなかった。自分のでしてしまったことから逃げるように、自分の殻に引きこもり続けた。

いつそのこと、あの男と同じようになれば、こんな地獄から開放されるのかも思ったが、理性がそれを引き止めた。

毎晩悪夢も見た。無限にいるように見えるほどの、殺してしまっただけの人。その人たちにただ見られるだけ。うらやましそうに見られる、たったそれだけの夢。発狂しそうだった。それから逃げるために、更に自分の殻に引きこもった。

父や、スタンのじーさん、村人、そして仲間達。みんな俺を励まそうとしてくれた。俺はそれを拒み続けた。殻にこもり続けた。そして一人、また一人と俺から離れていった。みんなの顔が死んでいった人たちに見えてしかたがなかった。

人から、魔法から離れたくてしかたがなかった。

最後まで俺のそばにいようとしてくれた仲間達も、いつの間にか消えていた。それすらどうでもいいと考えてしまうほど、俺は腐っていた。

「なんでこんな時にまで姫さんの顔を思い浮かべるんだろう……。……」

誰もいない部屋で呟く。もっとも深く影響しているはずの人にもかかわらず、不思議とその人の顔を思い描いている時だけ心が休まっている。

「幸せに生きててくれるかな……。……」

惨めで、情けない。自分ですらそう思う。でもどうしようもない。もう魔法世界に関わりたくない。魔法に関わりたくない。RDに関わりたくない。怖い。これ以上否定されたら、俺はどうなってしまうかわからない。やってしまったことに対する償いなんてできるわけがない。考えれば考えるほど、あの男の言うことは正しい。

「う、うおええええええええ」

考えすぎて嘔吐した。これ以上はやめよう。もういい。このまま死んでいけばいい。疲れた。

コンコン

不意に、閉じこもっている殻の外から、ノックの音が聞こえる。

「ナギ……開ける。」

ノックの主は、かつての仲間の一人のジャックであった。それだけではなく

「ナギ……。」

「聞こえているか？」

「久しぶりだなナギ……。」

アル、詠春、ガトーの声が聞こえる。お笑い種だ。一步外に出れば、サインを強請られる有名人が、こんな小汚い部屋の前に集まっているんだから。

「開けるナギ。」

「……。」

「親父さんから聞いたよ。いるんだろ？開ける。」

「……帰れ。」

ドゴンッ

大きな音が鳴ったかと思えば、ドアを壊してかつての仲間がぞくぞくと入ってきた。

「ナギ……。」

そこで皆が見た物は、ボロボロの布団に包まりながら、膝を抱え、こちらを睨んでくるかつてのリーダーであった男。病的なまでに、隈ができ、かつての活発なナギとは同一人物だととも信じられない男。

部屋には、そこらじゅうに酒の空き瓶や、処理していない嘔吐物が広がっている。

「ナギ……久しぶりだな。」

「何しに来た……失せる。」

「つれねーな」。少しは再開を祝おうぜ？この村にいい飲み屋あるらしいな。お前も帰ってきてから入り浸ってたんだろ？そこ行こう

ぜ。」

「失せろ。」

「おいおい、俺達仲間だろ？いつまでそんなことしてるつもりだ？」

「消えろ。俺の中に入ってくるな。」

「おい。」

先程までのチャラけた雰囲気が一瞬で消え、ジャックは大真面目な顔になり、ナギに近づく。

「もう一度聞くぞ？いつまでそんなことしてるつもりだ？」

「お前には関係ない。消えろ。」

「お前はそんなことで申し訳ないとおもわねーのか？」

「はっ、申し訳ないって何がだ？死んだ人間に何ができるってんだ？そんなやつらのことを考えてもしようがないだろ？」

「お前……今のマジで言ったのか？」

「どつでもいい。もう疲れた。消えてくれ。」

「ナギ、今の貴方はあの男とそっくりですよ。」

軽々とジャックに掴まれ

「結構いてーぞ？歯くいしばれやあああああああ」

思いつきり殴られる。勢いで窓から外に吹き飛ばされる。

空中に浮いている状態で、下に向けて更に殴られ、地面に叩きつけられる。

「ガッ……はっ、殴ってどうするんだ？殺すまで殴り続けるのか？」

「なんで俺がお前を殺さなきゃならねーんだよ。アホか。とりあえず目は覚めただろ？」

「何がしたいんだお前は……。頼むから消えてくれ。俺に考えさせないでくれ。」

「それは無理だ。あれだけのことをしたんだぞ俺らは。そんな俺らが、そいつらのこと忘れていいわけないだろ？」

「頼むからやめてくれ……。」「

「認めるナギ。俺たちは『英雄』だ。」

「俺は違う！！」

「いや、お前は『英雄』だ。それを否定したら、お前ほんとおかしくなるぞ。」「

「精一杯、精一杯自分が幸せだと思えるような生き方をしなければならぬんです私たちは。そうして生きて生きて、寿命を迎えて、死んで、そこで初めて憎しみを一身に受けるんです。それが私達に架せられた罰です。死んだ人たちができなかったような生き方をし、憎しまれて羨まれて、溜まりに溜まった憎しみや渴望を受けなければならぬですよ。」

「……………」

「今のままでは、死んでしまった人たちの憎しみも溜まりきってないでしょうね。そんなのじゃダメですよ。まだまだ溜めてもらわないと。私たちは地獄の苦しみを受けるのにふさわしいことをしてしまつたのですから。殺人とはそういうことです。人の命を奪うというのはそういうことです。」

「……………」

「ナギよ。お前だつたら殺してしまつた人たちの1万倍の人間を幸せにして死んで、永遠と苦しむ！ぐらいのことを言ってくれと思うんだけど。」

「俺は……………間違つてたのか？」

「何が正しいかなんてよく俺らにわかるわけねーじゃん。良くも悪くも生きてるんだからよ……………精一杯生きてみるのもいいんじゃないのか？」

「お前は……………何も思わないのか？」

「思うに決まってるだろ？ だけどよ、そればっか考えてても時間足りねーしな。死ぬ時に、いい酒でも持って、全力で詫び入れに行く。殴りてーやつには殴られるしな。向こうじゃもう死ねないから、なんとかして痛めつけようとするんじゃないか？ だがまあ、俺様は最強だからな。何万人こようと、受け止めてやるさ。もうどうしようもないしな。」

「そいつらにも繋がりはあるんだぞ……？ それを奪ったんだぞ？」

「ああ。返せるかわからないが、それでもそいつらが幸せに生きれるような世の中になるようにはがんばるつもりだ。俺様はもう戦争は終わったって思ってたが、今後の方が大変らしいぜ？ 人手も足りなくなるだろうな。どっかに人のためにがんばってくれる最強の魔法使いはいないかな。」

「……………」

「ナギ……あなた本当にこのままあの部屋で死んでいくつもりですか？」

「……………」

「あなたは忙しくなりますよ。みんなのために生きて、自分も幸せになり、死んだらそれまで生きた分も込みで、最大の恨みを受けなければならぬのですから。」

「ナギ……お前の幸せはどこにある？」

「俺の……幸せ……………」

俺の幸せ。そんなのずっと昔に決まっている。考えるまでもない。いつか京都に行こうとも約束した。まだそれすら果たせてない。先程までの死に掛けの雰囲気は徐々に消えていき、目に力が戻り始める。

「姫さんに会いてえ……。」

「さて、やっと目に力が戻ってきましたね。」

「姫さんと約束したんだ。京都に行くつて。姫さんは？姫さんは幸せに暮らしてるのか！？」

「では、アリカ様を助けなければなりませんね。」

「助けに……？」

「アリカ様に何があつたかは、後ほど話しますが、結論から言つと、現在アリカ様は売りに出されています。」

「売り？」

「この2年間、私たちは色々な……まああまり社会によくない組織を潰して回っていましたが、その中の一つから得た情報です。所謂人身売買。それにアリカ様は奴隷として売りに出されるそうです。」

「な、なんでそんなことになつてる？」

「……後ほど話します。魔法世界で、貴方がいない間に色々あつ

たのです。おそらく本人で間違いないでしょう。もしかしたら……いや、ほぼ確実に、貴方の知るアリカ様ではなくなっているでしょう。それでも助けたいですか？」

「当たり前だ！！俺の幸せは、それ以外ありえねえ。」

「……下手すれば、RDともう一度殺し合いになります。それでもですか？」

「……次はぜってー勝つ！！何が何でも負けねえ！！」

その言葉を聞いて、否が応でも仲間が笑みを浮かべてしまう。戻ってきたと確信させる、どこから沸くかわからない絶対の自信。かつての自分達のリーダー。それが戻ってきた。

「あ、あのよ……。」

ふと、ナギは仲間達の方に向き直り

「助かった。ありがとう……。」

頭を下げ、恥ずかしそうに顔をあげ

「行くぞ野郎ども！」

なかつた事にするかのように、また前を向き声を張り上げ動き出した。
アリカ姫が売りに出される、オークション会場へ。

16 撃目 Side" Nagi"; (後書き)

ぶっ壊れナギ君の復活劇。

アルの考え方は個人的に面白い解釈だと思ってます。

王道はやっぱりいいな。……王道だよなこれ？

あんま面白くなかったと思います。まあこのSS事態あれなんで、許してください。

多少次回への繋ぎを入れました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4105q/>

FPSプロゲーマーが魔法世界で撃つ

2011年5月20日07時28分発行